新編紫史

一名通俗源氏物語

巻二

末摘花　紅葉賀
花宴　葵
榊　花散里

新編紫史卷二

松風閣主人譯

第六帖　末摘花

源氏君追ニ懷夕顔一

源氏の君も。如何に思ひ返しても。尚飽かざりし夕顔の後れし時の心地を。年月經れども思ひ忘れず。此處も彼處も。打解けぬ人の。心深き方の厭ましさの。氣近く懷しかりし夕顔の愛憐のみは。似るもの更のなくて。戀しく覺え玉ふ。いかで尊き種姓のあらずとも。いと可愛らしげならん女の。物包みせぬを見付けまほしくもがな。と懲りずまの思ひ渡れば。少し由緒めきて世の聞ゆる邊は。御耳留め玉はぬ隈なきの。さてもや見んと思し寄

又懷ニ空蟬
軒端荻一

る程の様子ある邊まは。一篇の御文をも遣ーー玉ふまま。靡き從はぬ女ハ。大方あるまじきぞ普通のことなる。さて其中まもまた。無情と心強くて。靡き從はぬ女ハ。眞實さ餘りて情後れ。物の分際も知らぬやうなるを。實まさやうかと見れば。さう許も過ーー果ず。後まはつれなき心の餘波もなく打頽れて。何ともなき常人の妻まを。定りなどするもあれば。御文を言ひかけて。中止たまへるも多かりけり。かの空蟬を何ぞといふ折々まは。殘念まを思し出つ。軒端荻も。さるべき風の便ある時は。音信たまふ折もあるべーー。過にーー夜。火影まを亂れて見えし軒端荻の様子ハ。またその通まても見ま欲しと思す。君ま大方かれまで逢し限りの女ハ。御心まを忘れ玉ハざりけり。

大輔命婦
語ニ常陸宮
女末摘花
事於源氏
君一

左衛門乳母とて。大貳乳母の次まを列りたるもの〻女。大輔命婦とて。禁中まを侍ふ。これハ王家の裔の兵部大輔といふが女なりけり。いと甚く色好める若人まてあつまけるを。源氏も召使びなど志玉ふ。母左衛門乳母は。筑前守の妻まて國へ下りまければ。父兵部大輔の許を里まて往き通ふ。故常陸の親王の季まを生して。いみじく大切まを侍き玉ひし御女あり。父宮まは後れて。心細くこの世に遺り居るを。事の序まを大輔命婦は源氏まを申上げ〻れば。君ハ

（源）そは（憐のことや）

とて問ひ聞き玉ふ。

三友〇白氏文集に今日北窓ノ下。自向何所レ爲。欣然得二三友一。三友者爲レ誰。琴罷輙舉レ酒。酒罷輙吟レ詩。三友遞相引。循環無二止時一。一彈愜二中心一。一詠暢二四支一。猶恐中有レ間。以醉彌繼レ之。とあり

（命婦）姫君の心操容貌など。深くハ得知り候はず。たゞ寂寞ヨ人疎くして居玉へば。然るべき宵居など。物越ヨてぞ物語などして候ひし。さて姫君ハ。常ヨ琴をぞ懷しき遊敵と思ひて居玉ひ候ふ。

と申せば

（源）そは三友ヨて。今一種や。うたてあらん。

と言ひて。

（又）吾ヨ聽かせよ。父親王のさやうヨ由緒ありげヨ物〳〵玉ひければ。普通の手振ヨはあらじとおもふ。

と語合ひ玉ふ。

（命婦）さやうヨ聞〳〵召す程ヨハ候はざらん。

と言へば。

（源）いと氣持がましや。この頃の朦朧月夜ヨ忍びて往かん。其方も參れよ。

と言へば。命婦は面倒とは思へど。禁中邊も長閑かふる春の徒然ヨ罷り出てぬ。父の大輔ノ君ハ外ヨ住みて。常陸ノ宮ヨた時々ぞ通ひける。命婦は繼母兵部大輔の後妻の邊は更ヨ住つかずして。姫君の邊を睦びて常陸宮の方ヨハ來るなりけり。源氏ハ前に言ひし如く。十六夜の月面白き時分ヨ。常陸宮へおはしたり。

源氏君月下竊窺二末摘花家一

（命婦）いと御氣の毒なるわざかな。かゝ朧月夜にて。琴のね澄むべき夜の樣なも候はぬに。

と申せば。

（源）まづ姫君の方ゟ往きて。唯一聲を催促し申せ。空しく歸らんが口惜かるべきを。

と言へば。命婦ハ心ゟ。源氏をかゝ打解たる吾局ゟ居き奉りて。人目あらんを氣使しゝ。畏多しと思へど。寢殿ゟ參りゝれば。また格子も其儘ゟて。姫君末摘花ハ。梅の香面白きを見出〳〵て居たまへば。好き折かなとおもひて。

（命婦）御琴の音いかゝ澄み勝らんと。思ひ候ハゝ夜の景色に誘はれて參り候ふ。心忙しき出入ゟ何時も御音を承はらぬこそ口惜く候へ。

と言へば

（末摘花）さる折節の物の憐ハ。心ありて聞き知る人こそあるなれ。禁中ゟ行き通ふ其方ゟの聽く程の事やハあるべき。

と言ひて琴を召寄するも何となくをかしく。源氏のいかゞ聽き玉はんと命婦ハまづ胸潰る。末摘花ハ微ゟ搔き鳴し玉ふ。面白く聞ゆ。何程の深き手ならねど。琴ハ音がらのよき物なれば。さのみ聽惡くも思されず。源氏ハ心ゟ。いと甚く荒れ渡りて。淋しき所ゟ故父宮の古代の行儀正しく。所狹く侍き居ゐさりしその餘光もなく。いかゟ姫君の深くも思ひ殘すことのなか

末摘花花前獨彈レ琴

らん。かやうの所まこそハ。昔物語まも憐なることゞも有けれ。など思ひつゞけて。物をや言ひ寄らましと思せど。末摘花の卒爾まに思さんと心恥しくて。躊躇ひ玉ふ。命婦は才あるものまて。大概まに彈かせて止めんと思ひければ。

(命婦)曇り勝まに候ふ我方へ。客人の來んと申候ひければ。居らずば客人は厭ひ貌まもこそ思ふべけれ。今心閑まに承らん。御格子下し申さん。

とて。琴をばいたくも勸めて。歸り來れば。

(源) なか〳〵まに惜き程まても止みぬるかな。物の音篤と聽分く程もあらで。いと口惜し。

と言ふ氣色を。命婦はをかしと思ひ。

(源) 同じくハ氣近き處まて。かの樣子を立聞きせさせよ。

と言へど。命婦ハ却りて心ゆかしき處まてこそ止まゝと思へば

(命婦) いでや姫君ハ。万事いと幽微なる有樣まに思ひ消えて。心苦〳〵げまに居玉ふ樣なれば。迷惑まや思されん。

と言へば。

(源) 實まさうあることなり。俄まに出會ひて打解け語合ふことは。凡人の分際などにてこそ爲る業なれ。實は尊く物し玉ふ分際ふれば。なほこの由を姫君まに微聞せよ。

と語合ひ玉ふ。君はまた此他まに契約り玉へる方やあらん。いと忍びて還り

玉ふ。

（命婦）帝まは君の餘り實体まおはしますと。御苦勞まを思〜玉ふこそ。なか〜と思ひ候ふ折々候へ。かやうの忍びの御姿を。帝の御覽じつけ玉ひなば。如何思し玉ふらん。

と申せば。源氏は立返り打笑ひて。

（源）他人の言はんやうまを顯は〜咎むな。これほどの事を。浮氣らしき擧動と言はゞ。女の好色なるをば何とすべき。

と言へば。命婦ハ己が餘り色めきたりと。源氏の思〜て。折々このやうま言ふを耻〜と思ひて。物も言えず。君ハかの末摘花の様子。聞るやうもやある

と思して。寢殿の方まやをら立出て玉ふ。透垣の唯少〜朽殘りたる陰の方まを立寄り玉ふま。最初より立在る男ありけり。誰ならん。かの姫君に既くよつを想懸けたる好色者ありけり。と思して陰まを就きて立隱れ玉へば。その男は頭中將なりけり。源氏ハ今日中將と。諸共まを禁中を退出で玉ひけるを。其儘大殿まも寄らず。二條院まも歸らで引別れ玉ひけるを。中將ハ君の何方まを往き玉ふらん。といとゆかしくて。自分も忍びて行く方あれど。まづ竊まを君の後につきて窺ひけり。怪〜き馬まを騎り。狩衣を着たる姿の。志どけなき様まて來りければ。源氏ハ更まえ知り玉えぬに。さすがまを君のかゝる案の外なる別方まを入り玉ひぬれば。中將ハ心得ず思ひ居くる間君ハ琴の

源氏　中將　邂逅　諸共に○君と共に禁中を退出したれとも別れ入りし處を知らせぬとなり前に十六夜の月とあるまより て月まよせていへり

音まで聞こえて立てるに。還り出て玉ふまやと中將ハ竊まに心の裏まで待ち居たるなりけり。源氏ハ誰ともえ見分らで。我と人まで知られじと。抜足まで歩み退き玉ふまで。中將ハふと差寄りて。

（頭）　曇まで振り捨てさせ玉へる無情まで。御送仕ふ奉り候ふ　諸共まで大内山は出てつれど入る方見せぬいざよひの月。

と恨むるも。源氏ハ口惜かれど。中將なりと見たまふまで少〳〵をかしくなつぬ。

（源）　更まで人の思ひつかぬことよ。

と憎みながら。

里わかぬ○中將の一通ならず隈なく探り歩くことを前歌の月を受けていへり

撫子の事○撫子は玉蔓のことなり源氏の夕頭を竊に連れ出して失ひたることをいふなり

（源歌）　里とかぬ影なば見れどゆく月の。入るさの山を誰か尋ぬる。

と返歌〳〵玉ふ。

（頭）　かやうの御微行まも。然るべき隨身ありてこそ道の程も危げなく慥なるべけれ。されば何時も拙者を隨へ連れ玉ひてこそ出で玉はめ。忍びたる御歩行ハ輕々〳〵く不都合の事もや出で來候をなん。

と推返〳〵諫め奉る源氏ハかくばかり見付らるゝを口惜と思せど。御心の内まハかの撫子の事ハ。まで中將の得尋ね知らぬを。まつ重き功まで思〳〵出つ。さて源氏も中將も各契約れる方あれど互まで洒落あひて。其方まえ行き別れもせず。一車まで打乗りて月の面白き位まで雲隱れたる道の程を。笛

源氏與中將
至二大殿一

吹き合せて大殿まおもしぬ。先駈なぞ召さで。忍びて入り。人見ぬ廊まて御並衣ども召して着更へ玉ひ。何氣なく内裡よつ今來る樣まて。笛ども吹すさびて。祭り玉へば。左大臣ハ例の聽き遁さず狛笛を取出てたり。大臣ハ妙手なれば。いと面白く吹く。葵上まも琴を召寄せて。音樂の方まも心得たる人々まも彈かせ玉ふ。女房中務君ハ。是まて頭中將の想懸けたるを振り離れて。唯源氏の折節まも祭り玉ふ御氣色の懷かしさをば。え背き申されぬまも。この事の自然隱れなく洩れ聞えて。葵上の母君大宮なども宜しからぬ事と思ひ成ーたれば。琵琶ハ專門まも彈けと。物思はしく不者合き心地して。不用らしげまも物まも倚り伏在り。さて中務はこなを去りて。絶て

源氏を見奉らぬ所まかけ離れ行かんと思へど。それもさすがまも心細く思ひ亂れたり。源氏また頭中將には。常陸宮まて聽きつる琴の音を思ーー出てト。哀げなつる住居の樣なども。樣變りて面白く思ひ續けて。中將ハあらまほしき事まハ。もし美しき人の末摘花の如き住家まも在りて。年月を累ねたらんを相見初めて。甚しく心まも入りたらば。世の誹謗まも逢ふほどまあるべし。などまで思けり。さて源氏のかく氣持ありて漂遊き玉ふを。いかて其儘まハ捨置かんやとて。中將ハ源氏まも。かの姫君を獲られんかと。何こなく口惜ーく危がりけり。其後源氏よりも中將よりも。互まも末摘花の方へ艶書など遣り玉ひーー樣なり。何れも〳〵返事見えず。覺束なく心やま

しきよ。餘り物思ひ知らぬ末摘花の心かな。かのやうなる住居せぬ詫人は。果ふき折々の木草の花。又は空の景色などよそへても。物の憐を思ひ知りたる樣を取成しなどして。その志の傍よりも推量られたる折々あらんこそ衰なるべけれ。さるをかの姫君の其身いかに重々しきとても。餘り埋れて返事をもせぬやうなるハ。氣に添はぬ業ふりと思ひて。中將ハまして心いら〳〵忘く思ひけり。源氏と中將とハ例の隔心なき交際なれば。

（頭）忘かゞ〳〵の返事ハ見玉ひ〳〵や。拙者ハ試よ微め言ひやりたり〳〵よ。返事なければ不都合とてこそ止こたり〳〵か。

とて憂ひ詫びければ。源氏ハ。御心よされば中將も言ひ寄つるよけるよ。と含

笑まれて。

（源）いな吾ハ見まほしとも思ひぬ故よや。見たりとも覺えず。

と答へ玉ふを。中將も。さてハ源氏のかゝへハ何か返事あり〳〵ならん。と口惜〳〵く思ふ。君も最初よりさまで深くも思ひ玉ひぬ事なる上よ。末摘花の情なきを。不用ら〳〵く思ひ成り玉ひ〳〵かど。またかく頭中將のいひ寄りけるを聞き玉ひてよりハ。また其方よ心寄り玉ふなるべし。されば爲たり顔まで。初よつて末摘花に思ひ放ちたらん樣忘たるこそ却りて口惜しかるべけれと思〳〵て。大輔ノ命婦よ眞實よ語らひ玉ふ。

（源）かの姫君の覺束なく取合はぬ御氣色ぞ。いと心憂き。吾の浮氣

御雨宿○催馬樂ま。妹が門兄が門。往き過き兼てや。吾往かば。ひちがさの。ひちがさの。雨もや降らん。さでさをき。雨宿り。笠宿りてまからん。さでたをき。とあり

源氏君促ニ大輔命婦於末摘花ノ媒介ニ

らしく姫君の疑ひ寄せ玉ふまこそあらめ。然りとも吾を輕薄しき心はえ使はぬ物を。女の心寛裕なることなくて。案外なる事のこあるをさて。世間まは。吾過失の如くま言はるべし。心寛裕まて。父母兄弟の持て扱ひ恨むる人もなく。心安からん女ぞ却りて愛らしかるべき。と言へば。

（命婦）いでやかの姫君は。さやうま面白き方の御雨宿まハ。さても爲り玉ふまじく似合ぬしからず見え候ふ。さりとて偏ま物ゑして引込みたる方ハありがたく物志玉ふ御方ま候ふ。

と平常ま見る有様を語り申す。源氏ハ御心まかの亡まし夕顔を。老功らしく才女めきたる心ハなき様なり。唯あどけなく大様ならんかそ愛らしくもあるべけれ。と思し忘れず戀ひ言ふ。

さて源氏ハ瘧病ま煩ひ玉ひて。かの藤壺のことなど。人知れぬ物思ひの間切も。御心の暇なきやうまて春夏過ぎぬ。秋の頃心静ま思しつゞけて。かの五條宿の砧の音も耳まつきて。聞惡かりしまで戀しく思し出らるゝ隨ま。常陸ノ宮末摘花まは屢御文を通はせ玉へど。姫のかほ覺束なくばかりあれば。事成らず。心疾ましく。負てハ止まじとの例の御心さへ添ひて。命婦を催責たまふ。

（源）いかなる理由ぞ。このやうなる事ハ。吾ハまた曾て知らぬよ。

こいと心外と思ひて言へば。命婦ハ氣の毒ゑ思ひて。

（命婦）　姫君の懸離れて似合しからぬ事と。背き玉ふ様ゑもあらで。唯一体の物色の餘義なさゑ。返事も爲たまはぬ様ゑ見え候ふ。

と申せば。

（源）　それふればまた男馴ぬよや。世中の物思をもまだ知らぬ間。父母兄弟などもありて。獨身を我心ゑ任せぬ内こそ。さやうゑ耻しきも道理なれ。さるを姫君ハ何事も思ひ知り玉はんと思はるゝゑこそあれ。何となく徒然に心細くばかり覺ゆるを。同じ心ゑ答へ玉たゞ。宿願叶ふ心地ぞ爲べき。世ゑある好色家のやうゑ。文を遣り媒を頼みて。忍び寄るやうの事ゑハあらで。假初ゑかの荒れたる簀子ゑ立住みて言ひ寄らまほしきなり。姫君の餘り慎み玉へるが覺束なく心得ぬ心地すれば。姫君の許諾ならぬこも謀れよ。よもやうゝてなる待遇ゑハあるまじ。

など語らひ玉ふ。さてなほ世ゑありとある女の有様を語らふ人ハ。君の大概ゑ聞召すことゝ思ひて申すを。此頃ハ深く耳留め玉ふ癖のつき玉へるを知らでたゞ物寂しき宵居の折など果なき序ゑ。かやうの人こそあれとばかり申し出てたりしゑ案ゑ違ひて。かく源氏の故意とがまゝく言ひ渡れば。命婦も何となく面倒ゑ。姫君の有様も似合ゝからず美しげゑもあらぬを。憖ゑ媒介て源氏の心ゑ協はずば。姫君の爲ゑ氣の毒なる事もや

見え來んなど思ひけれど。君のかく真實に言ふを聞入れぞらんも變屈ぞか
らんと思亂る。さて父親王おは〜けるを折ふさへ。誰も古代めか〜き邊とて
音信ひ申す人もなかり〜を。況して今は淺茅を分けて尋ね來る人も跡
絶えたるを。かく世に珍しき源氏の御容貌の漏り香ふをば生女房なども
笑み待ちて。なほ御返事を申〜玉へと末摘花に勸〜奉れど。姫君ハ淺ま
しく物包し玉ふ心にて。一向に見も入れ玉はぬなりけり。命婦ハさらば然
るべからん折に。物越に物言ひ玉ハん時。君の御心に恨はずばそれまても止
め。また然るべき因緣ありて。假初にも君の參り通ぞとて。咎め申す親族
もなければ。さて其儘にしてん。など浮氣なる心に思ひ取りて。吾父の兵部

源氏君始訪二末摘花一

大輔にも語らはで。獨事を執行ひけり。
八月廿餘日。宵過る頃まで。待たる月の待遠さに。星の光ばかり清け〜
松の梢を吹く風の音。心細くて。舊時の事語り出て〜。末摘花の泣きなど
するに。命婦ハいと好き折かなと思ひて。源氏君へ消息や申しけん。君ハ例
のいと忍びておはしたり。月やう〜出て〜。荒れたる籬の邊を。踈ましく
打詠め玉ふに。末摘花の琴勸かされて。搔き鳴し玉ふ樣惡くハあらず。さ
れど命婦の浮氣心にハ。少〜今風の音を添へばや。と氣使ぞ思ひ居た
る。人目もなき所なれば。君ハ心安く内に入り玉ひて。人して命婦を呼ば
せ玉ふ。命婦ハ故と今始て源氏の入來したりと知りて驚きたる体にて。

末摘花よ。

（命婦）いと御氣の毒なるわざかな。源氏君ハ云々の事よてこそ參り玉ひしなれ。かく君の恨み申志玉ふを。妻ハ姫君の御心よ恊はぬ由をのみ。言ひ爭ひ候へば。源氏よは自身よ理由をも言ひ知らせんとて。參り玉へるなり。いかゞ御返答申さん。一通の容易き好色よはあらで。屢懇よ言ひておそしたるなれば。徒よ歸し奉らんも氣の毒に候ふ。さればかの君の物越よて言をんことを聞召せ。

と言へば。末摘花いと恥しと思ひて。

（末）人よ物申さんやうも知らぬを。いかてか言はん。

とて。奥の方へ膝行り入り玉ふ樣。いと初心しげなり。命婦は打笑ひて。

（命）いと幼々しとおはしますこそ心苦しけれ。高位の人も親の取扱ひ後見する間こそ。幼び玉ふも道理なれ。これほど心細き御有樣よておもしますよ。尚世を何時までも思し憚るハ。似合ひ候はず。

と教へ申す。末摘花は人の言ふことハ。さすがよ強情も。否み爭はぬ心なれば

（末）返答もせで。唯聽けとふらば。ともかくも格子など鎖して。さてそれを隔てふ聞かん。

と言ふ。

（命）さりとて源氏君を簀子などよ居ゑ奉りては。不都合よ候はん。か

の君も卒爾に疎忽しき御擧動などハ。よも爲たまふまじ。

など。いと能く言作〜て。二間の際なる障子を。手自いと強く銷〜。褥を置きなごして引修ふ。末摘花はいと恥しげゝ思したれど。かやうの懸想人ゝ。物言ふらん氣取などハ。夢ゝも知らざりければ。命婦のかく言ふを。何の辨知もなく居たまふ。乳母らしき老女は。曹子ゝ入り臥して。宵より眠みたる頃なり。若き女房二三人あるが。世ゝ賞感られ玉ふ源氏の御有樣を。見たきものゝ思ひて心懸け合へり。末摘花ゝ美服を着替へさせて。粧飾ひ申せば。當人は。何の心懸もなくておはす。源氏ハこの上もなく風流なる御樣子を竊ゝ用意〜玉へる御氣容。甚ゝ艶治めきたるを。命婦ハかゝ

二間○二間は神主佛像などを安置し又ハ貴人をも請ずる座敷にて貴人の家には必ずつらへ置くなり

る姿ハ。物の樣を見知らん人ゝこそ見せめ。此處ハ何の光映もあるまじき邊なれば。見せ奉るとても。詮なからんを。あないとほしと思へど。唯末摘花の大樣にてあれば。却りて出過たる事は。源氏ゝ見せ玉ハじと思ひて。これば かりぞ心安く思ひける。さて命婦ハ。毎ゝ源氏ゝ媒介の事を催促らるゝ言譯に。かくハ執持〜ものふがら。もしも源氏の御心の留らで。やがて末摘花の物思や出て來ん。ふと不安心に思ひ居たり。源氏ハ末摘花の分際を想ひ遣るゝ。洒落かへりさる今風の由緒めきたるよりは。格別ゝ奥ゆかしと思し渡るゝ。末摘花ハ命婦ゝとやかく誘勸されて。膝行り寄りたる氣容。裏衣の香忍びやかゝ。いと懷しく薫り出てゝ。大樣なるを。君ハさればこそ

裏衣の香○掛け香の名なり

源氏君始テ面ニ會末摘花ニ

幾十度○君は吾に物ないひよと言はぬまよりそれを頼みにして幾度も君が無言の行を負ぬといふ意なり。まとは童謡に無言を行ぜんと約束して無言

思ひし通りなれ。といと愉快とおぼさる。さて君は年來思ひ渡る樣など。以と能く言ひ續くれど。末摘花ハ隔て居たり〜時だに應答ハなきを。まーて近くてハ絶えて返詞もなし。君ハ無情のわざやと打歎き玉ふ。

（源歌）　幾十度君が志ぐまを負けぬらん。物な言ひそと言はぬ頼みを。」

言ひ捨てよかし。玉襷は迷惑を候ふ。

と言ふ。末摘花の乳母の子。侍從といふもの。いと輕躁ふる若人ふれば。心もとふく氣の毒と思ひて。末摘花の傍に差倚りて。御返歌を申す

（侍歌）　鐘撞きて結めんことはさすがまて。答へまうきぞ且ハあやなき。

といと若びたる聲の。殊に重々しからぬを。人傳にはあらで。姫君の言ひし

々々とうしまに鐘つくといひて物を鳴して後物言はぬことを誓ふ。ありこれを志〜まといふ

玉襷○河海抄に思はずは思はずとやはいひ果てぬなと世の中の玉襷なるとあり玉襷ハ彼方此方に引き懸け置くも

やうを申し成せば。源氏は末摘花の身の分際よりは。洒落てをかしと聽き玉へど。さても珍しければ。

（源）　志か言はれては。口塞るわざかな。　言はぬをもいふを勝ると知りながら。押しこめらるハ苦しかりけり。

と果なき事なれど。とやかくと眞實にも心を盡して言へど。姫君には返答せねば。何のかひなし。君ハ姫君のいとかくあるも。世人とは樣變りて。思ふ方の特別ふる人にやあらん。と奥ゆかしくて。やをら障子を打開けて入り玉ひけり。命婦ハあなうたて。君ハ吾に由斷させ玉へる事よ。さて姫君のいと氣の毒にてあれば。自分ハ故と知らず顔にて。吾局へ入りけり。かの若人

の故に判然と返答せぬことをいふ

鐘撞きは○無言行の鐘つきて結局をつけ物言はせぬをさすがにいとほしくて何方にも返答せぬも且をわけもなきことなりといふ意なり

言はぬをも○六帖より心より

侍従どもゝ。また兼て世より比類なき源氏の御有様の評判より。闌より入り玉ひし御所爲も。それより罪免じ奉りて。甚しくも歎息れず。唯餘り俄まて思もよらぬ事なれば姫君の何の用意もなきなぞ。いとほしく思ひける。末摘花ハ我よもあらぬ。恥しく慎ましきより外の事またとなければ。源氏ハ御心より。今ハまさかく慎ましけなるこそ却りて愛憐なれ。まだ男馴れぬ人の打侍かれたるほどゝて。何事も見免し玉ふものゝ。何とな氣の毒より見らるゝ容貌なり。さてかく容貌も美〜からぬより。また懐〜しくも打解け玉はざれば。源氏は何事よつけてかハ。御心の留るべき。打歎かれて夜深く還り玉ふ。さて命婦ハ如何ならん。と目覺めて聞臥し居たりけれど。元より故と知らず

は下行く水の涌きかへりいはで思ふぞいふより勝れる、とあり物言はぬも言ふに勝さると思へとかくに喑唖の如く押籠めて返答なきは苦しといふ意なり押しは喑唖よりかけたり

源氏君還二條院

貌よて居ることなれば。御送り申さんよとも聲作らず。君も竊より忍びて出で玉ひにけり。二條院より還り打臥玉ひて。今度こそはと思ひけれども。猶我心より叶ひ難き世のこそと思し續けて。さて輕き種姓の人ならば。かくて止むべきも。宮の御女ほどの重き人なれば。然やうよも成まじきなど。さても氣の毒なることゝぞ思ひける

源氏君ハかく思ひ亂れて居玉ふ。頭中將訪ひ來りて。

（頭）あの上もなき御朝寢かな。これよハ何か事故あらんこそ思ひられ候ふ。

と言へば。君ハ起き上り玉ひて。

頭中將訪二源氏君於二條院一

（源）心安き獨寢の床よて。つゐ寢緩びよけり。其方ハ禁中より參りしか

と言へば。

（頭）然り。禁中よつゝ退出で候ふまゝ參り候ふなり。朱雀院の行幸ハ今日樂人舞人定めらるべきよゝ。昨夜承知りしを。父大臣よも傳へ申さんとて罷り出て候ふ。これより又直よ禁中へ參り申すべゝ候ふ。

とて中將の急忙しげなれば。

（源）されば拙者も諸共よ參らん。

とて御粥強飯など食しゝて

強飯○強飯は今の普通の飯なり

源氏、中將共參二內裡一

（又）客人よも食進らせよ。

と言ひて。車を二輛引續けたれど。一所よ乘り玉ふ。中將ハ道すがら。

（頭）君ハまだ睡さげよ見え候ふ。

と咎め出てつゝ。

（又）拙者よは定めて。隱匿し玉ふ珍事多からん。

と恨こ申す。さて禁中にてハ。舞樂の事ども多く定めらるゝ日よて。君ハ內裡よ侍らひ暮し玉ひぬ。常陸宮末摘花にハ。せめて文よても贈り參らせんと。いとほゝく思ゝ出てゝ。夕方御文ハあつけり。その日ハ雨ふり出で。禁中より歸り玉ふ道も。煩しく所狹くもあるよ。常陸宮ハ雨宿せんよ恰よき所な

るよ。君ハせこうもまた思さぶりけん。さて常陸宮の方よりハ今朝源氏より後朝の御文もあるべきと。待つ時分過ぎても花鳥もあらざれば。命婦もいと氣の毒なる姫君の御様かな。と心憂く思ひけり。末摘花ハ。心の内よ恥かしく思ひ續けて。御文の日の暮れて来ぬるをも。何とも思ひ辨かず居たつる。さてその御文よハ。

源氏後朝書來

夕霧の〇君のまた隔心して思ひ晴れざる上ゑ雨さへ降りていぶせさの增すといふ意なり

（源歌）　夕霧の晴るゝ景色もまだ見ぬよ。いぶせさ添ふる宵の雨かな。

雲の晴間を待ちて出でん間。いかゑ待遠よ思ひ候はざらん。

とあつて。女房どもハ。この御文を見て。到底源氏の參り玉ハぬ様子なるを。胸潰れて心憂く思へど。末摘花よ。なほ御返事を申し玉へと勸め合へど。

姫君はさゝ思ひ亂れ居る時分よて。例式の如くにも歌を得詠みつくけねば。侍從ハ。

晴れぬ夜の〇吾と同し心にながめずとも君を待ちて待遠なる吾方を思ひやり玉へといふ意なりなめは長雨にかけたり

（侍）　かゝる内よそ。夜も更け候ふ。

とて。例の通り教へ申す。

（末歌）　晴れぬ夜の月待つ里を思ひ遣れ。同ど心よながめせずとも。

女房どもよ。口々よ催促られて。紫色の紙の年經よければ。灰もおくれ故めきたるよ。漸く書き玉ふ。御書ハさすがよ文字剛く中品の筋よて。上下打揃へて書成したり。源氏ハこの返書を見るかひなく。手よも取らず打置き玉ふ。されど末摘花の如何よ思ふらんと思ひ遣るも。何となく氣の毒よ

灰も○灰おくれとた紫の色かへりたるなり紫には灰なさせば色よくなるなり

心安からず。定めて憂しなどいふにやあらん。さりとて如何ハせん。されども我ハ心長く。行末までも見果て參らせん。と思し成す源氏の心を知らねば。常陸宮の方まてハ。甚ゞそ歎きける。

さて左大臣夜ま入りて内裡を退出つるま引かされて。源氏ハ大殿ま參り玉ひぬ。行幸の舞樂の事を。興ありと思ひて。君達集り語合ひ。各舞ども稽古などするを。其頃の事まて。月日も過ぎ逝く。音樂の聲ども。常よりハ耳喧ゝくて。亙ま負けず劣らず打働こつゝ。平常の樂遊の樣まもあらず。大篳篥尺八の笛など。大音を吹き揚げつゝ。大鼓までを勾欄の下に轉ばし寄せて。手自打鳴ゝ遊ぶ。源氏ハかゝる事まて。御暇なきやうまて。切ま

大輔命婦參源氏方

思す方の所ばかりま微び行き玉ふ。さればかの常陸宮にてハ。君をいと待遠ま思ひて。秋も暮れ果てぬ。またふほ頼み來ゝかひなくて。月日を過ぎ行く。

行幸近くなりて。試樂の事など言ひ騒く頃ま。命婦ハ源氏の方へ參りぬ。

（源）姫君まハ如何おはすや。

など問ひ玉ひて。いとほしと思したり。命婦ハ姫君の有樣を申ゝて。

（命）いとかく持離れたる君の御心ばへハ。傍よりと見奉る私まで心苦ゝく候ふ。

など言ひて。泣かぬばかりま思ひ居たり。源氏ハ御心ま命婦が奥ゆかゝく

待して能き程にて中止なんと思へりしことを打碎きけるをば。その意を知らで心憂く思ふらん事をまて氣の毒に思す。また末摘花の物も言はで。恥しく思し埋れたらん樣を思ひ遣り玉ふもいとほしければ。

（源）當時ハ閑暇なき頃まて何分にも參るに由なし

と打歎息き玉ひて。

（又）姫君の餘り物も言えで。無情やうなる心を。暫時懲さんと思ふぞよ。

と微笑ゝ玉へるが。若く美しげなれば。命婦ハ自已も打笑まるゝ心地して。御齡の若くして人に恨みられ玉ふぞ餘義なき。かく若くおはすればこそ人の上をば思ひ遣らずして。我心に任せて振舞ひ玉ふも道理なれと思ふ。源氏もこの行幸のほどを過ごしてぞ。時々常陸宮へ參り玉ふ。さて君ハかの紫上を尋ね取り玉ひてよりハ。六條邊にさへ問絶がちなる樣なれば。況て古びたる常陸宮などハ。憐に思しふがら訪ひ玉はんも何となく懶く思さるゝぞ情なかりける。されば末摘花の所狹きまで物恥して對面せぬを。強て見顯さんの御心も別段にふるて。月日を過ぎ行くに。さすが御心の内にハ。若も今まで思ひたるこゝハ相違ひて。見勝するやうもあらんか。怪しく心得ぬ所のあるやうに覺えしい。唯手探の覺束ふき故にて。實ハ然らざるまや。なほよく慥に見度ものなりと思せど。明白に執り成さんも恥しかるべ

源氏君再訪ニ末摘花一

しと思して。打解けさる宵居の時分。竊まに内まに入り玉ひて。格子の間隙より窺ひ見るに。末摘花はそれとも更まに得知らず。几帳など甚く破損れたるものながら年經たる立所も古まに變らず。押遣り方など亂れねば。何となく心もとなきまに。老女房ども四五人居たり。御臺秘色やうのもの唐土の物なれど舊びたるまに。然るべき料理もなく。いと慈然げなり。次の間まに罷り出て女房ども物食ふ。角の間のほどまぞいと寒げなる女房。白き衣の言はんやうもなく煤けたるまに。穢げなる褶を着たる腰つき頑固しげなり。さすがまに古禮を失はず櫛を押垂れて挿したる額つきハ内教坊や内侍所の邊まぞ斯るものどもハあるなると。打嗟かれてをかし。源氏ハかゝる怪しき女房

御臺秘色○御臺に食物を載する臺なり秘色とは青き茶碗の類なり

内教坊内侍所○内教坊は舞妓の樂を習ふ所にて内侍所は神鏡を齋き奉る所なり

どもの。貴人の傍近く立寄るものとも更まに知り玉ハざりけり。

（女房）あはれ。さても寒き年かな。命長ければこそ。かゝる世にも逢ふものふり。

なと言ひて打泣くもあり。

（女房）故宮おはしましし世を今より思へば。何とて辛苦と思ひけん。かく憑みなき世までも月日ハ過ぐるものなりけり。

とて飛び立ちぬべく慄ふもあり。種々まに人樣ゝろき事どもを愁ひ合へる体を。源氏ハ聞き玉ふも氣の毒なれば。故と立退きて。只今來玉へる樣まて格子を打叩き玉ふ。女房ども惶忙てゝ。そりやなど言ひて。火を執り直し。

飛び立ちぬべく○万葉集貧窮問答の反歌まに。世の中をうしとは

さしも思へとも飛立かねつ馬ましあらねば。

常陸宮有様

格子を取放ちて内へ入れ奉る。さてかの侍従ハ。齋院まを參り通ふ若人まて。此頃ハ生憎居らざりけり。されば彌あやゝと田舍びたる限りまて。源氏ハ見馴れぬ心地し玉ふ。この寒さまなほ〳〵愁に思ふ雪搔き垂れて甚じと降りけり。空の景色烈ゝと風吹き荒れて。燈火も消まけるを。點付く る人もなゝ。源氏ハかの某院まて。變化まを壓はれし折を思し出でられて。家の荒れたる樣ハかの院まも劣らざる樣なれと。間狹と人氣の少ゝあるなどまを少ゝハ心安と打慰められたれど。心と凄とて寢惡き心地する夜の樣なり。さて君ハ。此處の可笑も可愍まも樣變りて心留るべき有樣なるを。末摘花のいと引込み強とて。何の奥底なきをそ口惜と思す。漸々のことまて

夜の明ぬる景色なれば。君ハ格子を手自上げ玉ひて。前栽まを降り積れる雪を見玉ふ。人の踏こ分けたる跡もなく。遙々と荒れ渡つて。甚ゞと寂寞しげなるまを。今更此處を振捨て出行ん事も哀なれば。

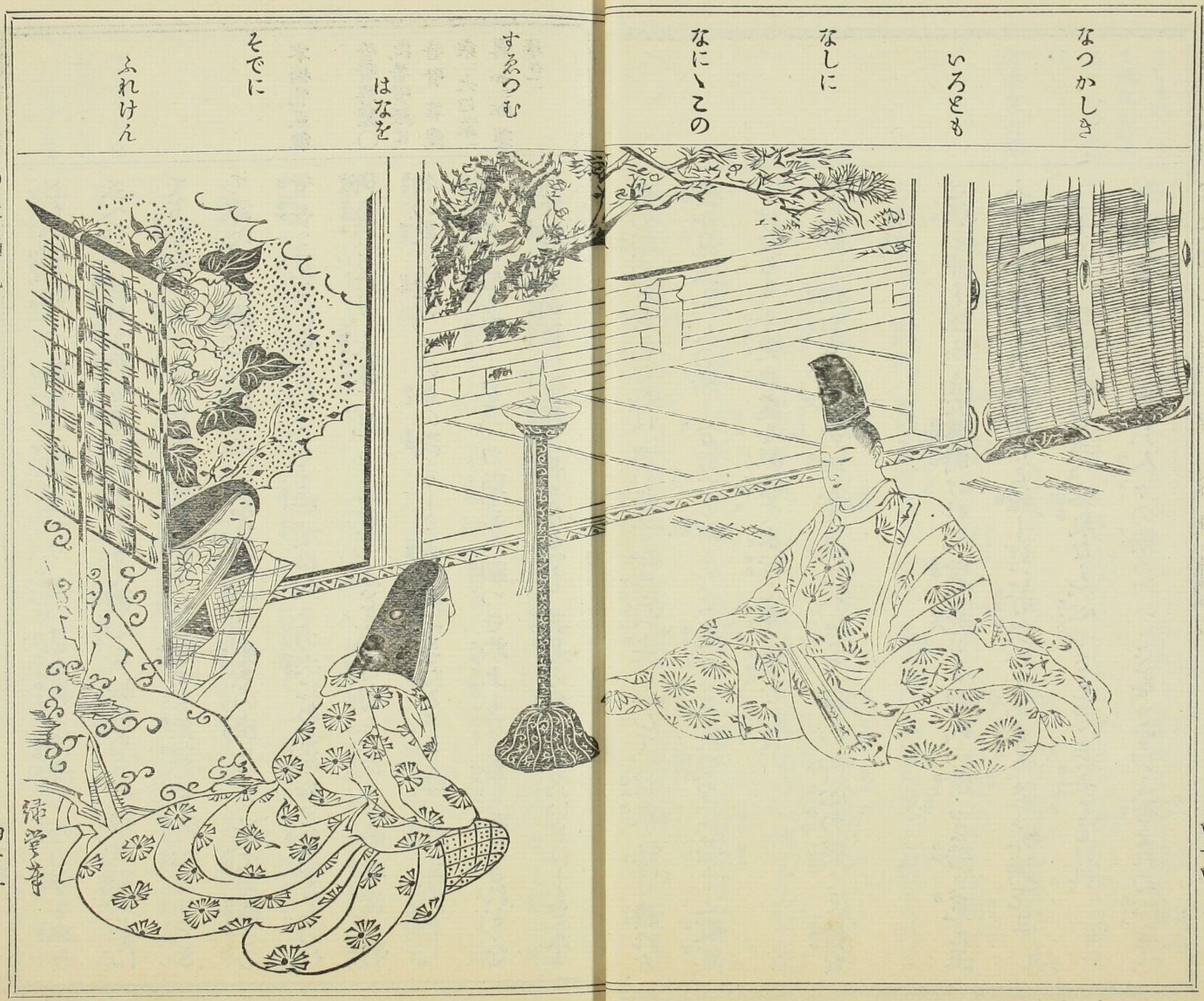
（源）面白き時分の空をも見玉へ。尽せぬ君の御心の隔こそ情なけれ。

と恨み申し玉ふ。まだ薄暗けれと。雪の光りまを源氏の清らまを若と見え玉ふを。老女房ども。餘念なと嬉しげに打咲みて見奉る。さて末摘花まを

（老女）早出でさせ玉へ。味氣なし。心やさしきこそ女とよけれ。

なと教へ申せば。末摘花ハ人々の勸め申すことを。さすがまを否まれぬ心まて。

なつかしき
いろとも
なしに
なにゝこの



すゑつむ
はなを
そでに
ふれけん

とかく引修ひて膝行り出で玉へり。君ハ見ぬ樣ゑ振舞て外の方を眺め玉へれど。後目ゑ折々見られ玉ふ。さて御心ゑ。如何あらん。姫君の少しにても打解け勝ることのあらば慨しからん。と思ふも無理なる御心なりや。さて源氏ハ末摘花の出で玉へるを見玉ふゑ。先その座りたる居丈の高さの背長ゑ見ゆれば。さればこそと膽潰れぬ。その次にあふ片輪と見ゆるものハ。御鼻なりけり。大樣に見もてゆけど。ふさまつ目留る。恰も普賢菩薩の騎物の象と覺ゆ。その鼻の淺ましく赤き色づきたるさま。殊の外ゑ見苦し。顔の色ハ雪も恥しきまで白過ぎて。額つき此上もなく廣く晴れられど。なほ下勝なる面樣ハ。餘程ゑ長きなるべし。其身の痩せたるハいとほしきまで

末摘花風貌

普賢菩薩○觀普賢經に。普賢菩薩乘二大白象一鼻如二紅蓮華色一

艶ひて。肩の邊なごハ衣の上よりさへ痛げなるまでゑ見ゆ。君ハかゝる醜き容貌を。何の爲ゑかく殘りなく見顯しつらん。と後悔しく思ふもの〻。又餘りゑ珍しき樣なれば。さすがゑ打見遣れ玉ふ。されど頭つき髮の垂れ懸りざまハ。是まで美しくめでたしと思はる〻人々ゑも。おさ〳〵劣るまじく見えて。その髮の末の袿の裾ゑ溜りて引れたるほど。一尺ばかりも餘りたらんと見ゆ。さて着玉へる衣服まで言ひ立るも。口惡きやうなれど。昔物語ゑも。人の裝束をこそ第一ゑ言ひたるやうふれば。今もまた言漏すべきゑあらず。さてもその裝束ハ禁色の限りなく上ハ白けたる一重の餘波ふく黑き袿を重ねて。上着ゑハ黑貂の裘衣のいと清らゑ香しきを着玉へり。古代の由

末摘花裝束

黑貂の裘衣

○和名抄ゑ

貂音凋和名天似レ鼠黄色皮堪レ作レ衣また黒貂唐韻曰ク貂有二黄貂黒貂一出二東北夷一黒貂ハ和名布流木とあり

緒めきたる装束なれど。なほ若やかふる女の粧飾まハ似合はで。仰山なるさ
ゝ持て囃されたり。されど實まかの裘なゝてハ寒からましゝ見ゆる顔つき
なるを。氣の毒ゝ見玉ふ。さて末摘花の何事も言はぬを。源氏ハ吾身まで
口閉ぢたる心地ー玉へゝ。例の志ぐまも試んとて。何くれと話しかけ玉へど。
甚ゝ恥らひて。袖まて口覆ひ志たるまで鄙びて古めかしゝ仰山ふり。その
様恰も儀式の官人の。物持て練り行く時の臂つきに似て。さてさすがまた打
笑みたる様子。はーたなゝ疎忽びたり。源氏ハ御心の内まで。氣の毒まもまた
懸まて。いとゝ急ぎて立出で玉はんとて。

（源）　かゝ後見する人もなき御有様を。見初めたる拙者まハ。疎からず

思ひ睦びて。何事も包まず言はんこそ本意ある心地すべけれ。さるを何
時までも許しなき其方の御氣色なれば。無情ゝ思ひ候ふ。
など託けて。

（源歌）　朝日さす軒の垂氷ハ解けふがら。などか氷のむすぼゝるならん。

ゝ言へど。末摘花ハ唯むゝと打咲ひて。いと口重げなるも。いと氣の毒なれば
出で玉ひぬ。御車寄せたる中門の。いと甚ゝ傾み撓ひたるふど。夜目まても
著ければ。なほかゝる様の万事隠れて見えぬことも多かるべし。いと衰まに淋
しゝ荒れ惑へるに。松の雪ばかりハ暖げまに降り積める有様。山里の心地ー
て物哀なるを。かの雨夜の物語まに左馬頭どもの言ひー葎の門ハかやうな

朝日さす○君の心は解けくるに似てまたさもあらずといふ意なり

名に立つ末の○河海抄ニ我袖は名にたつ末の松山か空より波のこゑぬまそなきとあり雪の飜るを波の越ゆる縁に見たるなり

る所なりけん。實ニ可憐ニ可愛げふらん 女を此處ニ居置きて。後見まほしく戀しと思はゞや。さらばかの藤壺ニ思ひ亂るまじき物思ハ。それニ紛れふんと思ふやうなる住所ニ似合ぬ末摘花の有樣ハ。取所なしと思ひながらも。我ならぬ他人ハ況て見堪へられまじ。我のみて見初めけるハ。父親王の後めたしとて。姫君ニ留め置きたる魂魄の先導なるべしとぞ思されける。さて橘の樹の雪ニ埋れゝるを。隨身を召して拂ハせ玉ふ。これニつきて傍の松の木の。羨み貌に我と起返りてさと飜る雪も。名ニ立つ末のと見ゆるふどえもいはれぬ景色なるを。君ハいと心深からずとも。せめて平隱ふるほどニ會釋せん人もあれかしと見玉ふ。御車出つべき門ハまだ開けざりければ。鑰の預人尋ね出でたるニ。老翁のいと甚しく老耄たるぞ出で來る。それが女ニやまた孫ニや。何れともつかぬ大ふる女の。衣ハ白き雪ニ映え合ひていよ〳〵煤け惑ひ。いと寒〳〵と思へる氣色なるが。怪しき器に火を微ニ入れて。袖裏ニ持ちたり。考翁ハ門を得開けやらねば。かの女差寄りて引き明くるさまいと見苦し〳〵。御供の人立寄りて開けぬ。

（源歌） ふりまける頭の雪を見る人も。劣らず濡らす朝の袖かな。 幼き者ハ形藏れず。

と打誦じ玉ひて。鼻の色ニ出ていと寒〳〵と見えつる末摘花の面影。ふと思ひ出られて含笑まれ玉ふ。かの鼻の容を頭中將ニ見せさらんニハ。如何

ふりまける○翁が年ふりて詫しき頭の雪を見れば衣にて吾も翁ニ劣らず袖を濡しぬと

の意にて、秋の野のさゝわけし朝の袖よりもあをでぬるゝぞひちまさりけるといふ古歌によれり

若き者は○白氏文集秦中吟に夜深煙火盡、霰雪白紛々、幼者形不レ蔽、老者体無レ温、悲端

なる事を比喩へ言はん。中將ハ常ゴ此宮ゴ窺ひ來れば。今に見付らるべゝと爲方なゝ思す。さて末摘花の容貌の尋常なるほどなれば。思ひ捨てゝも止みぬべきを。分明に見玉ひて後ハ。却りて愍然ゴて。眞實ふる樣ゴ常ゴ音信れ玉ふ。黑貂の皮ならぬ絹綾錦など。老女房の着るべき物の類かの門開けし老翁の爲までも。上より下まで思し遣りて贈り玉ふ。かゝ内事の不自由なるを。源氏の巨細に給ぎ玉ふハ。心ある者ハ耻しゝ思ふべけれど。末摘花ハ何とも思はぬゴよつて。君も却りて心安ゝ思ゝて。さる内向の後見して。姫君を養育まんと思ゝ取りて。尋常ゝハ樣異なる心安だての業をも爲玉ひけり。かの空蟬の碁圍ちて打解けたりゝ宵の側目ハ。いゝと惡か

與二寒氣一併入二鼻中一乎。とあり幼者ハ女。老者ハ翁にたとへたり

源氏斈二末摘花一

命婦又參二源氏居所一

りし容貌ゴまなれど。その執成に隱されて。口惜しゝハあらざりき。あはれかの空蟬ゴも劣るべきほどの末摘花の容貌なり。實ゴ容貌は種姓ゴも依らぬ業なりけり。さても空蟬ゴハ。その心操の平穩ゴ心妬げなるゴ。我の負けて止みゴしことかな。ゝ物の折毎ゴハ思し出づ。

年も暮れぬ。源氏君ハ内裏の御宿直所ゴおハしますに。大輔ノ命婦參れり君の御梳髮などゴ使ひ玉ふゴハ。大輔ハもゝより色情ある筋ふらねば。心安きものゝかゝら。又折々ハ戯言など言ひふざして。使ひ馴らゝ玉へば。命婦ハ召さぬ時ゴも申上ぐべき事ある折ふどハ參上りけり。

（命婦）奇妙しき事の候ふを。申上げざらんも變屈しゝ思ひ煩ひて。

と含笑みて言ひやらぬを。

（源）何様の事ぞ。我ゝハ何も包み隠す事ハあるまじとぞ思ふ。

と言へば。

（命）いかでか包み候ハん自分の身上の心事ハ畏ともまづ一番ゝ申上げ奉るを。この事ばかりハ申上げ悪く候ふ。

と言ひて。甚く言ひ包めば。例の物体ぶると君ハ憎み玉ふ。

（命）かの常陸の宮よりの御文よ。

とて取出でたり。

（源）これなれば。況〳〵て取隠すことあるべきかハ。

命婦奉二末摘花書於源氏一

とて手ゝ取りて見玉ふ。命婦ハはと胸潰る。その文ハ陸奥紙の厚きゝ香ばかりハ深く染めたるゝ。いと善く書き負せたり。歌も。

（末歌）唐衣君が心のつらければ。袂ハかくぞそぼちつゝのく。

とあるゝ。君ハ別ゝ何ぞ添ひたるものゝあるか。と心得ず打案じ玉へば。裏ゝ衣笥の重りかゝ古代なるを打置て押〳〵出でたり。

（命）これをば如何でか。かたはら痛く思ひ候ハぞらん。されど元日の御裝束ゝとて。故意と贈り玉へるを。はゝたなくハ得返され候ハず。又獨我方ゝ留置き候ハんも。かの姫君の御志を空しく爲べく候へば。一應御覧ぜさせてこそ何様ゝもせめ。

唐衣○君の問絶を恨む涙に袖はかくぬれぬといふ意なり元眞集にいつか我涙のつきん唐衣君がこゝろのつらき限りはとあり

裏に衣笥の○裏は泥繪にて衣笥ハ詩

繪にしたるものにて衣服を入るゝものなり

末摘花贈二裝束於源氏君一

袖まきほさん

○万葉集ヨ。

沫雪はけふはあふりそ白妙の袖まきほさん人もあらなくに

と申せば。源氏ハ戯れて。

（源）　いれほど宜しきものを留置れなんハ。いと辛からん。袖まきほさん人もなき身ふるを。いと嬉しき志ヨおそあれ。

と言へと。實ハ呆れて物も言はれ玉はで。御心ヨさても淺ましの歌の讀樣や。これこそハ末摘花の手自物したる業の限りをならん。是迄の歌ハ侍從などの執直せしものならん。侍從の外ヨハまた筆後を取りて教ふる師匠もなかるべし。と言ふかひなく思す。さて末摘花の心を盡して讀み出るほどを思すヨ。彼のいとも二となき名吟ハ。此歌をしも言ふべかりけり。と含笑みて見玉ふを。命婦ハ面を赤くして見奉る。さてかの贈り參らせたる裝束ハ。

なつかしき○なつかしき色なき末摘花を何に我袖にふれけんといふ意なり末摘花を紅花のことなりはなの咎○花と鼻とをかけたり末摘

艶なく古めきたる今樣色の直衣の。表も裏も同じ地ヨて仕立たる。織樣の細小なるヨ。端々も凡俗しく見えたる品なれば。淺ましと思しして。此文を廣げながら。その端ヨ手習すさび玉ふを。命婦ハ側目ヨ見れば。

（源歌）　なつかしき色ともなしヨ何ヨこのすゑつむはふを袖ヨふれけん。

色濃きはなと見しかとも。

など書き汚し玉ふ。命婦ハはなの咎を。なほ子細あらん。と思ひ合はする折々の月影などを思ひ出て。氣の毒なるものながら可笑しく思ひ成りて。

（命歌）　紅の一花衣うすくとも。ひとすら腐す名をし立ずば。　御氣の毒の世や。

花の鼻あかきないふ

紅の○君の姫君ゑ御心は淺くともにる片輪におはする名を立てざらんやうに願ふとの意なり

といたく物馴れて獨言つを。源氏ハ御心に末摘花の美くハあらずとも。ゑの命婦ほどの普通ゑてもあらましかば。せめて可らん。と返々口惜しく思して。種姓高き人の名の朽なんハ。さすがゑいとほしと思す。かくて人々御前へ參れば。君ハ命婦ゑ。

（源）早く取隱さずや。かゝる業ハ惣て世人の爲る事か。

と打叱り玉ふ。命婦ハ心ゑ我ながら何故ゑ此品を御覽ゑ入れつらん。姫君ばかりかハ。已まで心なきやうゑ君ゑハ思れん。といと恥かしく後悔しく思ひて竊ゑ御前を下りぬ。次の日禁中の臺盤所ゑ侍へば。源氏ハ差窺き玉ひて。

臺盤所○女房の侍ふ所なり

源氏投二末摘花返書於命婦一

政事要略衛門府風俗歌に莘の花のごと搔練好むや滅紫の色好むやとあり搔練は色紅なり、三笠山の云々今引歌亡せて審ならず

（源）そりや昨日の返事ゑ。怪しく氣取て過ぎさるやうなれど。

とて御文を投げ出し玉へり。女房達ハ何事ならんとゆかしがる。君ハ

（源）莘の花の色のごと。三笠の山の少女なば捨てゝ。

と謠ひすさびて。立出て玉ひぬるを。命婦ハいと可笑と思ふ。心知らぬ女房どもハ。命婦ゑ。

（女房）御獨笑ハ何ぞ。

と咎め合へば。

（命婦）何ゑもあらず。寒き霜朝ゑ搔練のやうなる鼻の色合や見えつらん。源氏君の御鼻謠のいとをかしき。

と言へば。

（女房）そハ過酷の言事なり。この人々の中ハ。さる赤き鼻なかるべし左近命婦。肥後采女ハても交ひ居なばいざ知らず。

など心得ず言ひ合ふ。さて命婦ハ源氏の御返書を末摘花に差上げければ。女房ども集ひて見賞めけり。

（源歌）逢ぬ夜を隔つる中の衣手ハ。重ねていとゞ見もし見よとや。

とあり。白き紙ハ書き捨て玉へるぞ。却りて面白げなる。

晦日の日夕方。かの御衣筥ハ源氏君の御料ハとて人の奉れる御衣一具。葡萄染の織物の衣。又山吹色やその他種々の御衣ども。その儘末摘

逢ぬ夜に○逢ぬ夜を隔つる衣のある上にいとどそれを重ねて見よやとて彌重ねて隔てんとやと云意なり遺拾集に衣だに中にありしはうとかりき逢ぬ夜をさへ隔てつるかなとある歌によれり源氏君贈二衣服於末摘花一

葡萄染○衣服今義解ハ葡萄者紫色之最淺也とあり

花の方ハ命婦して贈らせ玉ふ。命婦ハ心の内に。曩ハ姫君より贈り奉りし色合を。源氏ハ悪しとや見玉ひけん。と思ひ知らるれど。老女房どもハ。

（老女）此方より贈り奉りしかの御衣も。紅の方ハ色柄重々しかりー。然りとも色合ハ。さして今ふの御衣ハも押消されじ。

などぞ言ひ批評むる。

（又）御歌も姫君より差上げたるハ。道理聞えて慥なり。源氏の御返歌ハ唯風流き方ハこそあれ。

など口々ハ言ふ。末摘花も大方ならで本氣ハ讀み出てたる歌なればさき

男踏歌○正月十四日に行はる祝言の歌舞をして處々廻り歩くなり

七日の節會○白馬の節會なり青馬を進覽して群臣に宴を賜ふ儀式なり

正月源氏君訪二常陸宮一

の吾歌を物に書留めて置き玉へり。

元日の頃過ぎて。今年ハ男蹈歌あるべければ。源氏は例の處々遊び行き玉ふ。物騒しけれど。寂しき常陸宮を憐ふ思し遣らるれば。七日の節會終て。夜ふ入りて源氏は。帝の御前より退出で玉ひけるを。宿直所ふ直ふ宿つ玉ひぬるやうふて。夜更して常陸宮へおそしたつを。宮の有様何とな〻賑ハしげふて。世間並ふも見えゝり。姫君もまた少〻裏和ぎたる氣色身ふ持て付けたり。源氏ハ心ふかゝ年と共ふ末摘花の心も形も改りたらば。如何ならんと思し續けらる。日さ〻出る頃ふ。何となく躊躇ひな〻て外に出で玉ふ。東の妻戸を押開けたれど。向ひゝる廊の屋根もなく荒れ

たれば。日脚程ふゝ差入て。雪少〻降りたるふ。光り合ひて。いと鮮明ふ見入れらる。源氏ふ直衣など奉るを。末摘花の見出〻て。少し差出でゝ。身を傾けて物ふ倚り懸りたる頭つき。髪の飜れ出でたる様。めでたゝ見えたり。源氏ハ心ふ。客貌など直りて。様子を見直したらん時ハ。如何ふらんと思されて。格子を引上げ玉へり。されど先夜の氣の毒なつをし物懲ふ。殘らず上げ終てず。脇息を押寄せ。格子を打懸けて。鬢茎の亂れたるを修ひ玉ふ。甚ゝ古めきたる鏡臺。唐櫛匣。掻上の函など。女房ども取り出てたり。かゝ古宮なれど。さすがふ男の御具さへ點々あるを。洒落てをかしと見玉ふ。末摘花の裝束。今日ハ世間風ふもふりたりと見ゆるハ。去冬ふ源氏ふ

待たるゝものは○拾遺集に、新玉の年立かへるあしたより、待たるゝものは鶯の聲、とあり鶯の聲より君の聲をきかましとなり

轉る春は○古今集に、百千鳥さへづる春は物ごとに改れども我ぞふりゆくとあり

夢かとぞ○伊勢物語に忘れては夢かとぞ思ふおもひきや、雪ふみわけて君を見んとは。

源氏選二條院二無紋の櫻色

り贈り玉ひ〜御衣を。其儘用ゐられ〜なりけり。源氏はそれとも思〜知らで。興ある紋附きて著〜き表着ばかりぞ。吾の贈りたる品に似たると。不審しく思〜けり。

（源）今年こそは。御聲少し聞かせ玉へ。待たるゝものは。まづ差置きて。御氣色の年と共に改らんこそゆかしく候へ。

と言へば。

（末）轉る春は。

と恥しきに。辛じて慄ひながら言ひ出でたり。

（源）さうや。しか言ふも年經ぬる功よ。

と打笑ひ玉ひて。

（源）夢かとぞ見る

と打誦〜て立出で玉ふを。姫君は見送りて打臥し玉へり。口覆の側目よりは。尚かのすゑつむ鼻いと香ひやかに差出てたり。君は見苦しの業やと思さる。

源氏は二條院に還り玉へれば。紫君いとも美しく生立ちて。行末いと懷しく見ゆるに。無紋の櫻色の細長。忘なやかに着成〜て。何心もなくて居玉ふ樣。甚じく可愛らし。古風の祖母君の心掟の餘波にて。齒黑めもまだ爲ざりけるを。鐵漿をつけ黛を引き修せ玉へれば。眉の鮮明になりたる

云々○櫻色は表ハ薄く裏ハ濃き蘇芳なり細長は幼少の貴女の着るものなり

源氏與二紫上一戯遊

も。美〜く清らかなり。源氏ハ吾心ながら。などかくこの紫の美〜きを見捨て〜。かの紅の醜きを心を寄けんと思しつ〜。例の通り諸共に雛遊し玉ふ。又紫上ハ繪など畫きつ〜彩色して。万事面白く畫き散し玉へば。君も畫き添へ玉ふ。さて源氏ハ髪いと長き女を畫き玉ひて。鼻に紅粉を附けて見玉ふ。圖に畫きても見苦しき様〜なり。吾御影の鏡臺に映れるが。いと清らなるを見玉ひて。手自これに紅花を畫着け。赤く香はして見玉ふに。かく美き顔にてさへ。かく鼻の赤く交れるハ見苦しかりけり。

（源）磨が片輪に成りなん時ハ。如何ならん。

と言へば。

（紫）うたての事や

と言ひて。染み着かんと危く思ひたり。源氏ハ空拭をして。

（源）更に白まず。無益の慰に業なりや。帝に見せ奉りなば如何に言ハん

と真實になりて言ふを。紫上ハいとほしと思して。立寄りて。硯の瓶の水に陸奥紙を濡して拭ひ玉へば。

（源）かの平仲のやうに。彩り添へ玉ふな。赤きハ尚堪へなん。黑く色彩りふんは見苦からん。

と戯れ言ふ。様いと可笑しき夫婦と見えたり。

平仲○平仲ハ平貞文が字なり女に殊に志るあけしきを見せんとて硯の瓶に水を入てもて

目をぬらして泣くよしをしけり女心得て墨をすりて入たりけるを知らで例のやうに顔につけて歸りたるを家なる女のよめる。我にこそつらきハ君が見すれども人にすみつく顔のけしきよと宇治大納言物語よあり

日のいと遲々なるよ何時となく霞こ渡れる梢どもの。待遠なる中よも。取別けて梅ハ景色ばこ微笑み渡る。階隱の下の紅梅いと早こ開こ花よて。はや色着よけり。

（源歌）紅の花ぞあやなこ疎まるゝ梅の立枝ハなつかしけれど。

こ詠みて。末摘花のこと思ひ出でられて。

（又）いやもう

こうち嗟歎れ玉ふ。あふいこほし。斯やうなる人々の末々ハ。如何なりけん。

そハ後の帖を見ねかし

朱雀院〇朱雀院ハ先帝のおはします所にてそれへ桐壺帝の御賀に行幸あるなり

桐壺帝御二覽試樂一

試樂〇御賀には試樂調樂などいひて舞樂の試みあるなり

詠〇和名抄よ青海波の

第七帖　紅葉賀

朱雀院への行幸ハ。神無月の十日餘なり。今度の御賀ハ。尋常ならで面白かるべき事なれば。后妃女御の御方々ハ。見物せぬを口惜しがり玉ふ。帝も藤壺の見物し玉はざらんを不足よ思さるれば。まづ試樂を御前よて爲させ玉ふ。源氏ノ中將ハ青海波をぞ舞ひ玉ふ。敵手よハ大殿の頭ノ中將されを努む。頭の君ハ容貌用意。世人よは殊なるが。源氏と立並びてハ。恰花の傍の深山木の如ー。入方の日影清こ射しさるよ。樂の聲打勝り。物面白き時分よ。同舞の足踏面つき。復こ世よ見られぬ樣なり。詠など爲玉へる。これや佛の迦陵頻伽の聲ならんこ聞ゆ。餘りよ面白こ憐なるよ。帝も

下は詠ありて舞樂の時に詩を字音まて吟詠するなり

迦陵頻伽○これハ共に鳥の名なり此鳥ハ卵のうちより鳴く聲衆鳥に勝ると佛の說法の聲にたとへるなり

涙を拭ひ玉ふ。親王公卿達も皆感泣たまひぬ。詠竟て舞袖打直し玉へる。待受けたる樂の脈かなる。顏の色合勝りて常よりも光ると見ゆ。弘徽殿女御ハかく源氏のめでたきを附ても。尋常ならず思して。神なども空中まて愛でつべき容貌かな。餘りふるまで忌々しと言ふを。若き女房などハ心憂く。かた腹痛しと耳留めけり。藤壺ハかの密會のことも無からまーかば。況ーてめでたく見えなましと思すを。唯夢の心地ぞーー玉ひける。藤壺ハやがて御直宿を奉仕りけり。

（帝）今日の試樂ハ青海波に事皆盡きぬ。如何見たまひつるや。と問ひ玉へば。藤壺ハ何となく。それと御答も申ーー難くて。

源氏贈二書於藤壺一物思ふと○物をのみ思へむ立舞ふべき

（藤）實を格別を候ひし。

とばかり申し玉ふ。

（帝）敵手も惡くハあらず見えたり。舞の樣手の使ひ方など。良家の子ハ普通とハ異ふる。當世を名を得たる舞師の男ともハ。實をいと賢けれど。美ーく愛らしき筋をぞ見せぬ。試樂の日をかく妙手を盡ーつれば。行幸の日。紅葉の蔭や物寂しからんと思へど。其方を見せん心まて用意させつるぞや。

など申し玉ふ。翌朝源氏ノ中將より。藤壺を御消息あり。

（源文）如何に御覽じけん。世を知らぬ妄心ふがらを舞ひ候ふ。物

心なさはあらねど見せ奉らん爲なれば強て袖を廻せしとあり

唐人の○青海波は唐樂なり唐土の事は遥かなれば知り難けれと君の舞ひ玉ひし樣ハ憐も忘れ難しといふ意なり

桐壺帝行二幸朱雀院一

思ふと立ち舞ふべくもあらぬ身の。袖打振りし心知りきや。　あなかしこ。

とあるを。見るも。美しき源氏の御有樣ハ見忍ばれずやありけん。

（藤）　唐人の袖振るおとハ遠けれど。起居ハつけてあはれとハ見き。

とあるを。源氏ハ限りなく珍しく。かゝる樂曲の方さへ。明ハ異朝の事まで思し遣られる。中宮の御詞の。豫てもしか知らるゝことよ。と含笑まれて。此返書を持經の如くハ。手放さず大切ハ引擴げて見玉へり。

行幸ハ。親王達など世ハ殘る人なく奉仕る。東宮も參り玉ふ。樂の船ども御苑の池を漕ぎ廻りて。唐土高麗の舞樂とも爲盡して。種類いと數

垣代○舞人樂人の立そひにて舞臺の上に輪作に丸く立めくるなり其樣垣の如くなる故にかくいふ

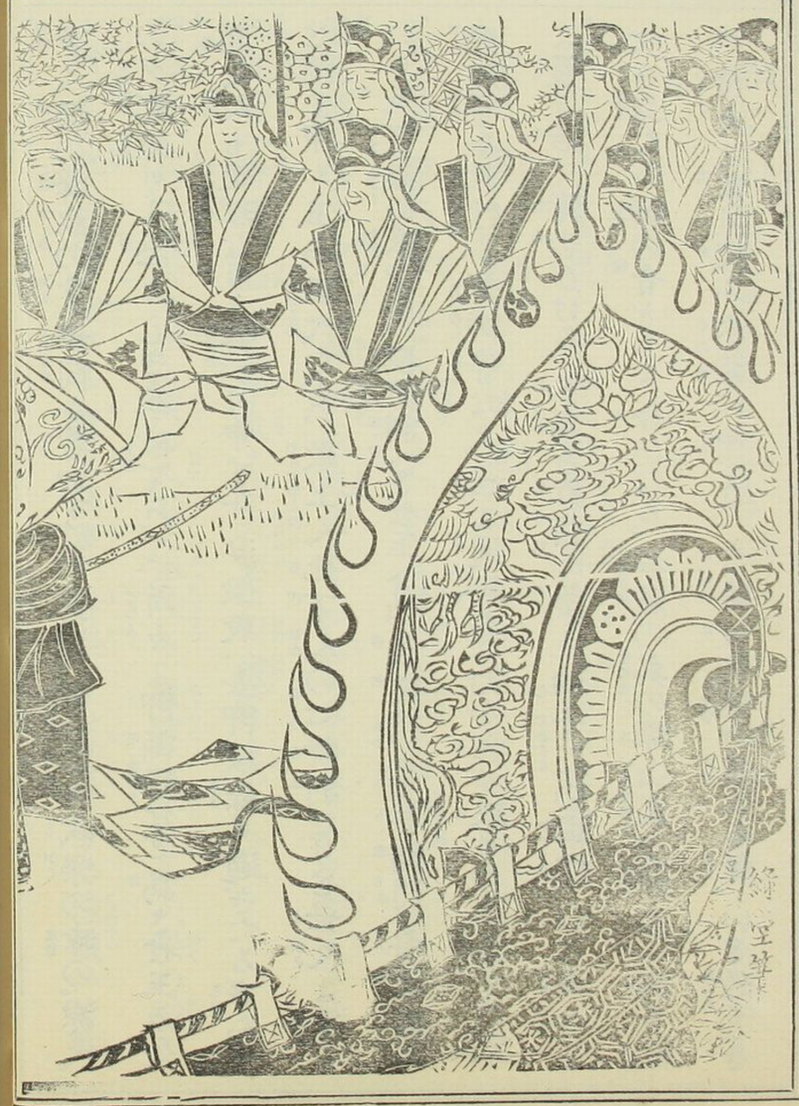
紅葉賀

青海波○舞

多く。樂の聲鼓の音。世間を響かすばかりなり。帝ハ前日試樂の時の。源氏の夕影餘りハ忌々しきまで思されて。所々ハ御誦經など爲させ玉ふを。聞く人も道理なりと憐がり申すを。弘徽殿、女御は。餘り過ぎたる事ふりと憎ミ申し玉ふ。垣代などハ。殿上人地下人の心特別なりと世人ハ思れゝる。有識の限りを。撰び調へさせ玉へり。左衛門督右衛門督左右の樂の事を執行ふ舞師等など。世ハ通例ふらぬを招び取りつゝ。各その家ハ籠りて居て稽古ひける。木高き紅葉の蔭ハ。四十人の垣代。いと面白く吹き立たる物の音どもハ合ひたる。松風の眞の深山嵐と聞えて吹き亂れ。種々ハ散り交ふ木葉の中より。青海波の煙き出たる樣。いと恐しき

紅葉賀圖

過雲清管
緑地上
廻雪入綾
紅葉中



樂家録に據るに青海波は舞者二人なり今一人を略す

樂の名 盤渉調なり

入綾 ○舞に綾手を取るといふことあり更ゑ取りて返して面白く舞ふなりこれを入綾といふ

秋風樂○これも盤渉調なり

までゑ見ゆ。頭挿の紅葉甚く散り過きて。源氏の顔の容色ゑ氣壓されたる心地すれば。御前なる菊を折ゑて。左大臣挿し替へ奉る。日暮れかゝる時分ゑ少ばかり打陰れて。空の景色まで折柄の風流を見知貌なるゑ。然る美しき姿に。菊の種々ゑ移ひたる。えも言はれぬを打挿して。今日ハ試樂の時ゑも超えて。復とふき秘曲の舞の手を盡したる入綾のほど。そゞろ寒きまで面白く。此世の事とも覺えず。物も見知らぬ下人などの。木の下岩陰。山の木葉ゑ埋れて。竊ゑ窺ひ見るものまで。少し物の心を知るものハ。皆涙を落しけり。承香殿の御腹の四皇子。まだ童ゑて秋風樂を舞ひ玉へるぞ。源氏ゑ次ぎての見物なりける 此等の舞曲ゑ面白さの盡きゑ

源氏君頭中將以下位階昇進

藤壺下二里亭一

葵上疑三源氏迎二紫上一

ければ。他事ゑハ目も移らず。却て感興ゑやありけん。其夜源氏ノ中將ハ正三位ゑ。頭ノ中將ハ。正下ゑ加階す。公卿達ハ皆然るべき昇進の祝賀するも。此源氏君ゑ引るゝ故なれば。人の目をも驚し。心をも喜ばするも。此君の前世ゑハ。如何なる因緣のあるゑやあらん。それ知らまほしげなり。中宮藤壺ハ。その頃里亭ゑ退出たれば。源氏ハ例の隙もやあると。窺ひ歩き給ふを仕事ゑして。大殿ゑハ參り玉ハねば。殿の内ゑてハ。何かと言ひ騷ぐ。かの紫ノ上を尋取り玉ひてしを。二條院ゑ女をぞ迎へ玉へるなど。人の申しければ。葵ノ上ハ。いと氣ゑ惱えずと思ひたり。さて葵上は。紫上のいまだ稚きことなど。委細しき樣子ハ知らず。然ればさやうゑ思ふも道理な

れど唯心端正くて。常の人のやうに恨こぶさば。源氏ハ自分も奥底なく打語りて慰め申さんものを。案外なばかり打解けず待遇し玉ふ心嫌ひよりも。然も有まじき微行なども。出で來るぞかし。さりとて葵上の有様の。一點何か不足と覺ゆる疵もなく。又他人よりハ最初に見初めて一かば。其故に憐に尊く思ひ申す其心をも更に知らぬといふことハ有るまじ。かくても葵上の本性。平穏に輕薄一からねば。終にハ自然と思ひ直りなんと憑まる〻方ハ。猶他人よりハ特別に。源氏ハ思ひ成一玉ふなりけり。紫君ハ見馴るゝまゝに。いとよき心様容貌まて。源氏ハ何心なく睦れ纏はー玉ふ。殿内の人にも。暫時の間誰とも知らせじと思一て。今迄よりも

政所家司○家中の事を執り行ふ今の家令家扶の如きものなり

尚離れたる對屋に。居室を美麗一く修理ひて。自分も朝暮入つおはー て。万の事ども教へ申し玉ひて。手本書きて手習させなど一つ〻。唯外家なる女を迎へたらんやうにぞ思一たる。政所家司などを始め。特に分けて不自由なく奉仕らせ玉ふ。されば惟光より外の人ハ。誰もその事故を知らねば。皆覺束なくばかり思ひ申しとり。此等の人々のみならず。かの父宮兵部卿親王までも。いまだ得知り玉はざりけり。紫上ハ。猶時々故家の事など戀一く思ひ出で申す時ハ。まづ尼君をぞ戀ひ申す折多かる。源氏の居玉ふ間ハ。心を紛らはすを。源氏ハ夜などこそ時々此處に宿り玉へれ此處彼處の微行暇なくて。日暮に出て玉ふを慕ひ申す折などあるを。

君ハいと可愛らーゝと思ひ申し玉へり。源氏の二三日内裡ゑ仕候ひ。又大殿ゑもおはする折ハ。紫君いと甚く驚屈ぐゑ。源氏ハ氣の毒ゑて。母なき子を持ちたらん心地ーして。夜行も静心なく。覺え玉ふ。僧都ハ源氏の紫上をかゝ大切ゑ養育み玉ふを聞きて。不思議なるものゝ。なほ嬉しとぞ思ひける。さてかの尼君の法事など爲たまふゑも。君より嚴ーゝ吊ひ申し玉へり

源氏訪二藤壺一三條宮一

藤壺の有様の。いとゆかーしくて。源氏ハその罷出玉へる三條宮ゑ參り玉へれば。命婦中納言君。中務などいふ人々對面ーたり。中宮の自分ゑも出で遊ばずして。餘り澹泊ゑも待遇し玉ふ事かな。と安からず思ひ玉

兵部卿宮來二三條宮一

へど さる心を暫時鎮めて。普通の御物語とも申し玉ふ内ゑ。兵部卿宮參り玉へり。源氏君おはすと聞き玉ひて。對面ーー玉へり。さて兵部卿宮ハ。いと由緒ある様子して。色めかしく裏和たまへるを。女として見んゑは。いと面白からん。と源氏ハ心の内ゑ。人知れず見奉り玉ふゑも。宮ハ藤壺の御兄なれば。紫上のこと。方々ゑ親しく覺えて。巨細ゑ御物語など申し玉ふ。宮も源氏の様子の。平生よりも殊ゑ懷かーく打解け玉へるを。いとめでたしと見さまひて。婿ゑしてなどハ更ゑ思し寄らで。女として見ばや。と好色たる御心より思す。日も暮れぬれば。兵部卿宮ハ御簾の内ゑ入り玉ふを。源氏ハ羨しく思ひて。昔帝の御待遇ゑより。藤壺ゑ

ハ氣近く人傳ならで。直接ゝ物をも申し玉ひしを。今ハかく此上もなく疎み隔て玉へるも。無情く覺ゆるぞ味氣ふきや。

（源）屢も參り候ふべけれど。何かさしたる事故なきほどハ。自然怠り候ふを。然るべき事などハ。仰せ言も候はんこそ嬉しく候はめ。

などすぐ〳〵しく言ひて還り玉ひぬ。さて命婦ハ。藤壺も懷妊し玉ひてよりハ。いと憂き節ゝ思し定めて。心解けぬ御氣色のいと耻しく氣の毒なれば。事よく謀りて。媒介まうさん方もなく。何の効能もなくて。空しく月日を過ぎ行く。されば源氏も藤壺も。果なの契りや。と思し亂るゝ事互ゝ尽せず。

紫ノ上の乳母なる少納言ハ。思ひ懸けず面白き世界をも見ることかな。と思ひて。これも故尼君の。紫上の身上を思して。行法ひ祈禱り玉ひし佛の御靈驗ゝやあらん。と覺ゆるゝ。葵上いと尊くておはし〳〵。又其外ゝ君の係り合ひ玉ふ所。此處彼處數多ありて。實ゝ姫君の成長び玉へん間ぞ。面倒の事もや出て來んと覺えける。されど君のかく取別て。懇切ゝ思ひ玉へる御心のほどは。いと頼母しげゝ思ひけり。紫上の御服。母方ハ三月なれば。十二月の末頃ゝは脱せ參らせしを。又別ゝ母親もなく生ひ立ちしかば。暗き色の衣服などハ着ず。たゞ紅紫山吹の地ばかり織て。紋のなき小袿などを着たる樣。甚しく今風ゝて面白げなり。源氏ハ正月朔日

朝拜○正月朔日る行はるゝ小朝拜なり清涼殿の前庭にて行はる

紫上遊戯

る。朝拜に參内せんとて。紫ノ上の方を差覗き玉ひて。

（源）今日より大人〳〵し成り玉へりや。

とて打笑み玉へる樣。めでたく愛嬌づきたり。紫ノ上ハ何時の間にか雛を打居ゑて戯弄び居たり。三尺の御厨子一具に。品々飾り居ゑて。又曩に君の小き屋ども作り集めて預け玉ひしを。所狹きまで遊び廣げて。

（紫）追儺するとて。犬君がこれを破壞し候ひしかば。修理ひ候ふぞ。

と言ひて。いと大事と思ひたり。

（源）實にいと心なき者の所業かな。今修理はせ候はん。されば今日ハ言忌〳〵てふ泣き玉ひそ。

と言ひて。立ち出で玉ふ樣。いと優美しければ。女房ども端に出て見奉るに。紫ノ上も立ち出て見奉りて。雛の中なる源氏ノ君を飾り立てゝ。内裡に參らする樣などす。少納言ハ。

（少）今年だに少し成長びさせ玉へ。十歳に餘りぬる人ハ。雛遊ハ忌み候ふものを。かく夫君など儲けさせ玉ひてハ。北方とも言ひつべく。靜粛にしてこそ見え玉はめ。さるを今ハ纔に御髪結ひ參らする間をさへ。物憂く爲たまふ事よ。

など。紫ノ上の遊戯さばかり心入るれば。夫など儲けては少しハ恥かしく思えせんとて諫め申せハ。紫ノ上ハ心の内に吾ハさらば夫を儲けてげり。この

女房達の夫とてあるハ。醜くこそあれ。吾ハかく美〳〵く若き人をも。夫ゑ持ちたりけるかな。と今ぞ始て思〳〵知りける。さハいへど。是も年齢の數添ふ効なるべ〳〵。かく効稚き様子の。事ゑ觸れて著ければ。殿内の人々も。不審と思ひければ。いとかく色氣のなき。源氏の御副臥ならんとハ誰も思はざりけり。

源氏君至二大殿一

源氏〻君ハ。内裡より大殿ゑ退出玉へれば。葵〻上ハ。例の通り打解けず。端正〳〵く粧飾ひて。心懷〳〵き氣色もなくて。氣苦〳〵ければ。

（源）今年よりまても。少ハ色めきて。是迄の氣質を改め玉ふ御心の見えなば。如何に嬉〳〵からま〳〵。

など申し玉へど。葵〻上ハ。源氏の故意と二條院ゑ人居ゑて。太切ゑ侍き玉ふと聞き玉ひ〳〵よりハ。君の特別ゑ思〳〵決めたる事こそあらめ。と心のミ置かれて。一層疎遠く耻〳〵く思さるべ〳〵。されど葵〻上ハ強て二條院の事など見知らぬやうゑ侍〳〵て。源氏の打解けたる御氣合ゑハ。さすがゑ心柔ゑ返答など申したるハ。尚他人よりハ別なる所あり。さて葵〻上ハ。源氏〻君よりハ四歳ばかり年上ゑであれば。何となく耻〳〵げゑ。盛りゑ整ほりて見え。また源氏ハ我心の餘り怪〳〵からぬ好色の所爲ゑ。かく葵〻上ゑも恨みらる〻事よと思〳〵知らる。さて同〳〵大臣といふ中ゑも。特ゑハの左大臣ハ。名聲尊かる。その嫡妻の腹ゑ。只一人侍づかれたる葵〻上なれば。

左大臣優二待源氏君一

心驕も此上なくて。源氏の少しも疎略なる事あるをば。心外に思ふを。君はなどか然ばかりハ。と吾方にも女君の心驕に抗合ひ玉ふより。互に心の隔ともなれるふるべし。左大臣ハ。かく頼もしげなき源氏の御心を。無情と思ひふかく。又君を見奉る時ハ恨も忘れて。いと厚く侍き營む。さて翌朝源氏の出で玉ふ所に。左大臣ハ差覗きて。君の裝束し玉ふに。名高き玉帶を持て參りて。手自御衣の後を引き修ひなどして。御沓を取らぬばかりに侍とも。皆吾女葵の上を思ふ親心のほど。いとあはれなり

（源）おの玉帶ハ。内宴などの折にこそ賜へらめ。

など申し玉へと。左大臣ハ。

内裡春宮一院○内裡ハ桐壺帝。春宮ハ朱雀院。一院ハ桐壺帝の御父なり

（左）その節ハ。又これよりも尚勝れるものあり。これハ唯見馴れぬ珍しき形ふれば奉るなり。

とて強て差させ奉る。さて左大臣ハ。吾媚として萬事に爲立てゝ見奉るに。實に生るかひあり。されば假令邂逅なりとも。かやうなる人を。吾家に出入て見んに增すことあらじ。と見ゆる源氏の御有樣なり。

源氏の君ハ元日の參賀に。數多の所も往玉はず。内裡春宮一院ばかりへ參りて。其他ハ藤壺の三條の宮に參り玉ふ。宮の女房どもハ。今日ハ又格別にも見え玉ふ源氏の御有樣ふり。年長け玉ふまゝに。忌々しきまで成り勝り玉ふ御容貌かな。と口々に賞め申すを。藤壺ハ几帳の間より微見

るにつけても。心よ思ふ事いと繁かりけり。さて藤壺ハ。御産の事十二月も過ぎよしかば。心もとなきよ。この正月ハさりとも如何あらん。と三條の宮人ども〻待ち申し。又内裡よも然る御心儲ともあるよ。何の事もなくて。正月も過ぎぬ。御物怪にやあらん。と世人も申し騒ぐを。藤壺ハいと託しく。此事の物思ひより。吾身も徒よ死ぬべくなりぬべきかとよ。と思し歎くよ。心地もいと苦〻しくて悩み玉ふ。源氏ハ此懐姙を。吾種ならんと思ひ合せて。御修法など公然よハあらで。私よ所々よて爲させ玉ふ。御産の時如何やうの事もありて。宮の果ふくなども成り玉ひてハ。復重ての對面もなくて已みぬん。など種々取集めて歎息たまふ。然るよ二月十餘日のほ

藤壺女御産二皇子一

源氏君又訪三條宮一

どよ。皇子生れ玉ひぬれば。帝を始め宮人も。餘波なく喜び申す。藤壺ハ心中よ。帝の。吾命の長くもあれかしと思し玉ふ辱さよつけて。かの密事を思へば。心憂くて。却て自空〻くならばやと思ふもの〻。弘徽殿〻女御などの。この出産の事を呪咀はしく言ふと聞きて。もし果して空〻くなりぬなど女御の聞き成しなば。人笑はれよやあらん。ふとやうよ思ひ勵む剛みより。産後も少しづゝ快くて日立ちける。帝ハ出産も何時しかと。ゆかしげよ思召しさる事限りなかし。かの人知れぬ源氏の心よも。甚じく心もとなくて。人の隙間よ三條〻宮よ參り玉ひて。

（源）帝の覺束ながりたまふ皇子の御様子を。まづ見奉りて奏し候

ハん。

と申し玉へど。藤壺ハ鬱陶き時分なればとて。見せ玉はぬも道理なり。然るハ皇子の御容貌。淺ましく珍しきまで。源氏の容貌を寫し取りたるゑ違ふべくもあらざれば。藤壺ハ心の内ゑ空恐しく。他人の見るも怪しがるほどの過を。如何ゑしてかハ人のそれと思ひ咎めざらんやハ。然らぬ果なき事をさへ。疵を求むる世に。如何なる浮名の終ゑ外ゑ漏れ出づべきゑかあらん。と思ひ續くるゑ。吾身ばかりぞいと心憂き。源氏ハ命婦に邂逅ゑ逢ひ玉ひて。甚だく詞を盡して。様々ゑ面會の事を言ど。何のかひなし。又皇子を見たまへん事を頻りゑ言へば。

いか様に○前世にいか様に結べる宿因なれば此世にかやうなる中の隔はあるやらんといふ意なり

（命）などかくハ強ゑ見たまはんことを言ふぞ。其内自然と見參らせ奉らん。

と申しながら。源氏の御心を推察りて。哀ゑ思へる氣色一方ならず。源氏ハはしたなき事なれば。藤壺ゑは直接ゑも言ハれず。されば如何ならん世ゑ。人傳ならでおの事を申さん。とて泣き玉ふ様いと氣の毒なり。

（源歌）いか様ゑ昔結べる契ゑて。この世ゑかゝる中のへだてぞ。かゝる契こそ心得がたけれ。

かく詠ゑ玉ふに。命婦も。藤壺ゝ宮のこの事をさすがゑ思ひ亂れたる様なごを見奉れば。情なくも振つ捨てられず。

見ても思ふ
○御子を見
玉ふ藤壺も
物思ハ只ならず見玉はぬ
源氏君も又
如何に歎き
玉ふらん實に
いつれにして
も子は世人
の惑ふ間とい
ふか道理なり
といふ意なり
若宮參二内
裡一

（命歌）見ても思ふ見ぬはた如何ゑ歎くらん。こや世の人の惑ふてふ
間。　互ゑ御物思ひの綏む時なきも。衰なる御事に候ふ。
と竊ゑ申す。源氏ハ斯くばかり言ひ遣る方なくて。毎に空しく還り玉ふ
物ながら。藤壺ハ世人の評判も煩しければ。情なき事に思ひて命婦ゑも
最初のやうゑも打解け睦び玉はず。人目ゑ立つまじく。平穏ゑ侍し玉
ふものゝ。氣ゑ惱すと思ふ時もあるべきを。命婦ハいと詫しく案外なる心
地すべし。
四月ゑ若宮ハ内裡ゑ參り玉ふ。思の外ゑ大く成長げ玉ひて、漸々吾と
起き返りふゞし玉ふ。淺ましきまで源氏、君ゑ似たる御貌つきを。帝ハ

曾て思ひ寄らぬ事なれば。かく美しき人の効者同志ハ。何れも似るも
のふらんと思召して。大切ゑ思ひ侍ること限なし。さて帝ハ。源氏、君を
限りなく寵愛し玉ひしものゝ。更衣腹ゑて世人も許し申すまじかりけ
れば。春宮ゑも得居ぬ玉はずふをましを。飽かず口惜しく臣列としてハ
勿体なき有様容貌ゑ具備へおはするを御覽ずるまゝゑ。氣の毒ゑ思召す
を。此度若宮。かく尊き中宮の御腹ゑ源氏君と同光ゑて差次ぎ生れ
出で玉へれば。瑕なき玉と思し侍くゑ。藤壺ハ何ゑしても胸の開く暇な
く。安からず物思す。さて源氏、中將。藤壺の方ゑて管絃ふと爲玉ふゑ。
帝ハ若宮を抱き出でさせたまひて。

（帝）　朕ハ皇子達數多あれど。其許をばかりぞ。此兒ぐらゐの時分より朝暮ゑ見し。されば此兒も其許ゑ擬はるゝゑやあらん。いと能くこそ似たれ。最少き時分ハ皆此樣ふる業ゑやあらん

とて甚じく美しと思ひ玉ふ。源氏ハ面色變る思して。恐しくも辱くも。

嬉しくも憐にも。種々ゑ移ふ心地して。涙も墮ぬべし。若宮ハ何となく物言ふ樣して。打咲み玉へるが。いと忌々しきまで美しきゑ。源氏ハ吾身ながら。此樣ゑ似たらんハ。甚じく憐ゑ覺え玉ふぞ。餘りの事なるや。藤壺ハ頻ゑ傍痛く思ひて。汗も流れてぞ居くる。源氏ハ若宮を見玉ひてよりハ。却りて心も掻亂るやうなれば。退出で玉ひぬ。二條院ゑ臥し玉ひて。

よそへつゝ　○この撫子の花を若宮によそへつゝ見れはいとゝ涙にくれて露けさの勝るといふ意にて內々の御子なれは花にさかなんと思

胸の遣る方ふきを。暫時思ひ鎭めて。大殿へ參らんと思ず。前栽の何となく青み渡れる中ゑ。瞿麥の奇麗しく咲き出たるを折らせ玉ひて。命婦の許ゑ書き遣り玉ふこと多かるべし。

（源歌）　よそへつゝ見るも心ハ慰まで。露けさ勝る撫子の花。　花ゑ咲かなんと思ひしも。かひなき世に候ひければ。

と押晴れぬ歎を書き續けたり。命婦ハ然るべき間もや有けん。藤壺ゑ見せ奉りて。

（命）　唯塵ばかりこの花瓣ゑ御返歌を。

と申すゑ。藤壺ハ我心ゑも。物いと哀ゑ思ひ知らるゝ時分なあれば

ひしかひもなきなり新古今集に。よそへつゝ見れぞ露だに慰さまず。いかにかすべき床夏の花。又後撰集に。我宿にまきし撫子いつしかも花にさかなんよそへても見ん。とあり

袖ぬるゝ○我袖のぬるゝ所縁と思へども

（藤歌）袖濡るゝ露のゆかりと思ふまも。なほ疎まれぬ倭瞿麥

とばかり微に書きかけたる樣なるを。命婦ハ悅びながら。源氏の方ヘ奉る。源氏ハ御心ヨ。例の事なれば。とても効能ハあるまじと頼ほれて案じ臥し玉へるヨ。かゝ返事あり〳〵かば。胸打騷ぎて。甚しく嬉しきまさへ涙落ちぬ。かくて熟々臥して居るにも。思を遣る方なき心地すれば。例の慰心ハ。西の對屋なる。紫ノ上の方ヘぞ渡り玉ふ。

さて源氏ハ。忘どけなく打そゝけ玉へる鬢髮。洒落たる袿姿ヨて。笛を懷しく吹きすさびつゝ。室内を覗き玉へば。紫ノ上ハ撫子花の露ヨ濡れとる風情して。横臥し玉へる有樣。美〳〵く可愛らしげなり。愛嬌溢るゝ樣ヨて

やはりうとまれざるよの意なり

入りぬる○萬葉集に。潮みてば入りぬる磯の草なれや見らく少なく戀らくの多き

みるめヨ○古今集に。伊勢

源氏の參りなゝから速ヨも入り玉はぬを。生恨めしがれば例のやうヨハあらで。打解けず背向くなるべし。源氏ハ端方ヨ駐り居て。

（源）此方へ。

と言へば。紫ノ上ハ起きずして。

（紫）入りぬる磯の。

と口すさみて。口覆ひたる樣。甚じく洒落て美し。

（源）あふ憎らし。かゝる事何時しか口馴れ玉ひけるヨ。みるめヨ飽くハ宜しからぬ事ぞや。

と言ひて。琴を取り寄せて彈かせ玉ふ。さて箏の琴ハ中の細緒の堪へがた

のあまの朝な夕なにかつくてゐみるめに人もあくましもかな

源氏君教ニ琴於紫上一

きこそ難かりけれ。さて箏柱を平調に押下して。絃を掻鳴しき。調子を調へ合せたる許にて。紫の上の前に差遣り玉へば。姫君ハ怨じも果てず。いと面白く彈く。小き手にて。居き兼ぬるほどに遠く差〳〵遣りて。左にて糸を押し玉ふ手つき。いと美しければ。源氏ハ可愛らしと思して。笛を吹き鳴らしつゝ教へ玉ふ。紫の上ハいと敏悟くて。習ひ難き調子どもを。只一度に覺え取りぬ。凡て功者に面白き心ばへなるを。兼て吾心の如く教へんと思ひ〳〵に恨ふ事よと思す。保曽呂倶世利といふ樂ハ。名ハ惡けれど。面白く吹き澄〳〵玉へる笛の音に。紫の上ハ箏の掻き合せまた稚けれど拍子違はず上手めきたり。燈臺參りて。繪など見るに。源氏の何處にか出て玉ふ

保曽呂倶世利○河海抄に長保樂（大食調右樂）破（保曽呂倶世利）急（賀利夜須）とあり狛一越調の樂なり

紫上暮ニ源氏一

べしとありければ。御供の人々聲作りて。

（供）雨降り候はん。

なと言ふに。紫の上ハ。例の心細くて打屈し。繪も見止めて。俯伏しければ。源氏ハいと可愛くて。髪の飜れ懸りたるを掻撫でゝ。

（源）予の外にある間ハ戀しきか。

と言へば。紫の上ハ首肯く。

（源）予も一日も其方を見奉らねば。いと苦〳〵くこそあれ。然れと其方の幼稚くおはする内ハ。物妬の事もなく心安く思ひて。まつ差當りて。物むつかしく恨み強る人の心破らじと思ひて。面倒なれば。暫時

このやうよわ歩行とぞ。其方を大人しと見成して八。外へも更ま行くまじきを。人の恨を負へば。命短しといふまより。此世ま長く在りて。思ふ様ま其方ま見えんと思ふぞ。

なご巨細と語合ひ玉へば。紫の上ハさすがま恥〜くて。何とも答へ申し玉はず。其儘源氏の御膝ま倚つ掛りて寝入りぬれば。源氏ハいと氣の毒ま思して。

（源）今夜ハもはや何處ま も出でず成りぬ。

と言へば。女房どもハ。皆起ちて。食物など此方ま持參りぬ。源氏ハ紫の上を揺り起し玉ひて。

（源）餘所まハ出でず成りぬよ。

と申し玉へば。紫の上ハ漸く打慰みて起きぬ。諸共ま御膳參れと。いと果なげま食すとびて。

（源）然らば寐玉ひね。

とてなほ君の餘所に出玉はんかと。危氣ま思ひければ。かゝる様を見捨てハ。假令如何なる用事ありとも。赴き難く覺え玉ふ。源氏ハかやうま紫上の方ま。引留められ玉ふ折々なども多有るを。自然と漏れ聽きさる者ありて。大殿なる葵の上の方ま告げ申しければ。大殿ま侍ふ女房どもハ。

（女房）それハ誰ふらん。いと心外の事にもあるかな。今まで誰人とも

申さずして。さやうに君に纏し戯れなどするハ。貴やかに心深き人にハあるまじ。内裡邊などまてふと見初め玉ひけん宮女を寵愛し玉ひて。人や咎めんと隠し忍ばせ玉ふならん。また無心に幼稚ものなりなど申し玉ふハ。世に隠して欺り言ふなるべし。

なと申し合へり。帝にも。源氏の方にかゝる人ありと聞召して。

(帝) 左大臣の思ひ歎かる事も道理なり 幼稚ほどより親切に後見して。生し立さる心をも思はず。それ程の事を辨へ知らぬ齢にハあらじを。何とて情なく葵ノ上をば待すらん。

と大殿の方を氣の毒に思召して詔はすれば。源氏ハ畏りたる様にて。御

答もまうし玉はねば。帝ハ源氏の葵ノ上を氣に恊はぬならんといとほしく思召す。然るハ源氏の浮氣らしく打亂れてあるに。禁中近く奉仕る女房にまれ。また此方彼方の女どもにまれ。凡て其等に。別に心を通はすといふ事ハなきやうなるを如何なる物の隈に隠れ歩行て。かく大臣などにも恨みらるゝ情事をするならん。と怪しく思しく詔ふさて帝の御齢闌けさせ玉ひぬれど。かやうの好色の方ハ止ませ玉はで。采女女藏人などいふ女房どもの。容色あるものをば特別に持囃し思召したれば。由緒ある官女多くある時節なり。されば源氏の果なき戯言をも言ひ觸れ玉ふにハ。何の女も承引かぬ事ハなきを。それをも源氏ハ平生に目馴れてあるにや。餘り

采女女藏人 ○采女ハ采女司采人町などありて陪膳に伺候する女官なり。女藏人ハ陪

膳に奉仕する中臈下臈の女官あり

に好色がましき事も爲玉はぬ故よ。官女どもハ。如何思ひ玉ふよかと試みがてら。戯言ども言ひ懸けなどする折あれど。君ハ情ふかからずよき程よ應答へて。實ハ亂れて居るにハあらねど。さるとて餘りよ真實に過ぎて。何となく物足らずと思ひ申す女もあり。

源氏君試ニ老典侍一

年甚く老たる典侍の。人品も尊く心意ありて。世の思はくも貴くハありながら。甚しく仇めきたる心様まて。好色の方まてハ重からぬがあり。源氏ハかく年闌けたるまで。なとかハさやうよも好色よ心を亂るふらん。と不審しく覺えけれは。戯言を言ひ觸れ試み玉ふに。典侍ハ源氏を吾よ似合ぬほどよも思ハざりけり。されば源氏ハ淺ましと思しながら。此様なる女もさ

すがよ面白くて。試よ物し玉ひてけれど。古めかしき齡のほどの女なれば。他人の漏り聞かんもはしたなくて。情なく侍し玉へるを。典侍ハいと無情と思へり。一日典侍ハ帝の御髪梳よ侍ひけるを。竟よければ。帝ハ御裝束の衣文よ奉仕る人召して。御座所を出させ玉ひぬる間。源氏ハ又外よ人も居らで。この典侍の様体。頭つき。平生よりも清げよ艶冶めきて。裝束有様。いと花やかよ好ましげよ見ゆるを。このやうよも年舊り難く若作ることもあるかな。と傍痛く見玉ふものゝ。爾後彼の如何よ思ふらん。ときすがよ捨て置き難くて。典侍の裳の裾を引止め驚かし玉へれば。扇のえも言はれぬ美しく畫きたるを顔よ翳して見返りたる目つき。情を含

して見延べられど。眼皮はいたく黒み陷つて。髪は眉の邊より離れそゝげたり。源氏は容貌よも似合ふからぬ扇の樣かな。と見玉ひて。吾持ちたる扇と取替て見玉へば。赤き紙の物の映ふばかり色深きに。木高き森のかたを金泥にて塗り隱したり。その片方に。書はいと古めきたれど由緒ありげに。

（歌）森の下草老いぬれば。

ふど書き散したるを。君は書くべき事こそあれ。餘り色めきたる心ばへや。と打笑まれふから。

（源）森こそ夏のと見ゆるは。

とて。何くれと言ふも似氣なく。此樣を人や見つけん。とて迷惑に思すを

森の下草○古今集に大あらきの森の下草老いぬれば駒もすさめず かるとひもなし。とあり森こそ○河海抄にひまもなく茂りにけりなに大あらきの森こそ夏の陰にしるけれ。とあり行きて宿る人多きやうに見るとあり

百八

典侍はさうも思はずして。

（典）君し來ば手馴の駒に苅り飼はん。盛過ぎたる下葉なりとも

といふ樣。此上もなく色めきたり。

（源）篠分けば人や咎めんいつとなく。駒なつくめる森の下隱。頃しさに得往かぬ。

とて振を捨て立ち玉ふを典侍は引止めて。

（典）またかゝる事は思ひ候はね。實に今更なる身の恥に候ふ。

とて泣く。いと甚ど。

（源）今は人目あれば。後に復言はん。心に懷しくは思ひふがら。只一

君しては○源氏に來臨を勸むる意なり後撰集に。男のぞりければよめる。吾門の一村すゝき

かりかほん君か手馴の駒もこぬかと。とあり篠分けば○往かば人も咎められんとて拒みたる意なり

橋柱○細流抄に。津の國の長柄の橋の橋柱ふりぬる身こそかなしかりけれ。又拾遺集に限りなく思ひな柱がらの橋思ひなからに中やたえなんとあり

濡衣○後撰集ににくからぬ人のきせたるぬれきぬは思ふあへず今かわきなん

頭中將交二典侍一

時の戯ぶ。今かゝハ言ひたるなり。

とて引き放ちて出で玉ふ。

（典）　橋柱

と言ひて恨ぶかゝるを。帝は御裝束竟て。御障子の内より覗かせ玉ひけつ。さて御心ぶ。似合ハしからぬ交情かな。といと可笑と思されて。

（帝）　光ハ好色心なしと。官女達の常ぶ持惱む樣子なるを。さはいふものゝ。尚この道ハ遁さざりけるは。

とて笑ゑせ玉へば。典侍ハ生愧しけれど。憎からぬ人故なれば。濡衣をさへ着まほしかる意もあるなればぶやあらん。甚も辨言を申さず。されば人々

も案外なる事かな。と評判するを。頭ノ中將聞き付けて。源氏君の到らぬ隈なき心まて。此度の事ぞハ。また思ひつかざりける事よと思ふに。典侍の盡せぬ好色心も見まほしく成ぶければ。早速ぶ是も亦典侍ぶ交らひ着ぶけり。この中將も他人よりハ特ぶ美ーければ典侍ハ源ノ氏君の代として。無情き慰めぶと思ひつれと。尚源氏の方を見まほしく思ふハ。戀ーさの限ありける世とや言はまし。されば源氏の無情を強て歎くならん。いと痴なる物好や。かくて典侍ハ。甚く忍ふれば。源氏ハ得知り玉はざるぶ。君を見附てハ先恨み申すを。君ハ年齡のほども氣の毒ふれば。慰め遣らんと思へど。心ぶ協はぬ物憂さぶ。遲ハでいと久しくふりぶけるを。或日夕立

温明殿○賢所のます所にて内侍司とにあるなり
源氏窺二典侍一
瓜作に○催馬樂ゑ瓜作の曲三段あり山城のこまのわたりの瓜作云々瓜作我をほしといふいかにせん云々いかゐせんなりやきな

して。波殘涼しき宵の紛れゑ。温明殿の邊を立住み歩行き玉へば。この典侍琵琶をいと面白く彈き居たり。是まて帝の御前などまても。男子方の御樂遊ゑ交際など―て。その上ゑも特ゑ勝る人なき上手なれば。何となく物恨―と覺えける折柄。いと哀に聞ゆ。瓜作ゑ成りや忘なまし。と聲ハいと面白くて謠ふそ。少―氣ゑ恊はぬ。鄂州ゑ在りけん昔の人も。かくや面白かりけん。と耳留めて聞き玉ふ。典侍ハ彈き止みて。いと甚く思亂れたる形容なり。源氏ハ東屋を静に謠ひて。倚り居くまへるに。典侍ハ

（典）　押開いて來ませ。

と聲を打添たるも。例ゑ違ひたる心地ぞする。

まし瓜くつまてに云々とあり
鄂州○白氏文集に夜聞二歌者一宿二鄂州一といふ長篇あり
東屋○催馬樂に東屋のまやのあまりの雨そゝき我立ねれぬ其戸ひらかせ、かすがひもとざしもあらばこそ

（典歌）　立濡るゝ人―もあらじ東屋ゑ。うたてもかゝる雨そゝぎかな。

と打歎息くを。源氏ハ我一人聞きて。我身ばかりゑ引き負ふまゝ―く。尚他の男も同様ならんとハ思へど。疎ましくて。何事を種ゑかくまでハ歎息くならんと思して。

（源歌）　人妻ハあなもつらし―東屋の。まやの餘りも馴れじとぞ思ふ。

とて。打過ぎて行かんとハ思しけれど。さりとて餘りゑ氣の毒ゑやあらんと思返―て。その局ゑ入り玉ふ。典侍の老て色めきたる人柄ゑより。少し手強き戯言ども言ひ交して。かゝる事も亦さる方としてハ珍しき心地―玉ふ。頭ノ中將ハ。源氏君の甚く實体だち過して。常ゑ好色事を諫め

其戸我さゝめおしひらき入りませ哉や人妻やとあり
立濡るゝ○君の此戸ひらかせといへと眞まはあらじと恨むる意なり
人妻ハ○他ま男ある女は事煩しければ餘り相馴れまじとの意なり

玉ふが口惜しきを。さりげなく待〳〵て。君の内々ま忍び通ひ玉ふ方々多有る様子なるを。如何に〳〵てか見顯さんとばかり思ひ渡るま。今宵君の典侍の局ま通ひ入りたる事を見附たる心持いと嬉し。かゝる折ま少し威嚇〳〵て御心を惑ハし。さて兼ての報酬をせんとて。俄まも入らず。暫外ま窺ひ居たり。風冷ま打吹きて。夜も漸更け行ほどま少〳〵眠むまやあらん。と見ゆるけ〳〵きなれば。竊ま内に入るま。君ハ打解けても寢られ玉はぬ心なれば。ふと聞付けて。彼中將ごハ更ま思ひ寄らず。尚此典侍を忘れ難く思ふ所の。修理大夫まこそあらめと思すま。大人々〳〵き太夫ま。かく老女と臥しさる。似氣なき擧動を見付られん事の慚〳〵ければ。

頭中將嚇ニ源氏典侍一
蜘蛛の振舞
○古今集に吾せこがくべきよひなりさゝがにの蜘蛛のふるまひ兼てしるしも

（源）あなうるさし。いで歸らんよ。蜘蛛の振舞ハ著かつをつらんものを。
心憂くも我を誘しける事ま。
と言ひて。直衣ばかりを取て。屏風の後ま入り玉ひぬ。中將ハ可笑さを忍びて。君の引立て玉へる屏風の下ま寄りて。ごほ〳〵と疊を引寄せて。仰山ま打騒がすま。典侍ハ年長ても。元よりを甚く様子ぶり柔弱たる人まて。いと心惶忙しけれど。已前まもかやうの事ありて。屢心を動す折々ありければ。甚く驚きながらも。今ハそれま慣れて。君を如何ま爲ことまかあらん。と詫しさま。慄ひながら。つと中將を扣え留めたり。源氏ハ誰とも知られずして。出て去なばやと思せど。忘どけなき姿まて。冠など打曲めて遁れ走ら

吾君○日本紀崇神巻ニ乃脱レ甲而逃之知レ不レ得レ免叩頭曰吾君云々又号二叩頭之處一曰二我君一とあり人に衣を乞ふ時唱ふる詞あり

ん後様いと痴愚なるべゝと思し躊躇ふ。中将ハいかで我と知られじと思ひて。物も言はず唯甚じく怒れる氣色に待して太刀を引抜けば。典侍ハ吾君々々と中将ヨ向ひて。手を合せて叩頭るに。殆笑ひ出らるべし。さて典侍の好色がまゝ若やぎて身を待ゝたる表面こそ。また風流ヨハありけれ。五十七八歳の人の。打解けて嚇され騒げる有様。二十歳の若人達の中に入りて物畏したる。いと似合ゝがらず。中将ハ可笑かれど。さあらぬ様ヨ紛らして。恐しげなる氣色を見すれど。源氏ハ却りて著と見附け玉ひて。中将の我と知りてかゝ故意と嚇すなりけり。と俄ヨ痴愚がまゝ成りぬ。かくて源氏ハ。中将となつ見玉ふいと可笑ければ。その太

刀抜きたる腕を執へて。いと甚く爪入またへれば。中将ハ殘念ながら堪へ兼て咲ひぬ。

（源）真ヨ本氣かよ。妄ヨ戯事も爲難しや。いでおの直衣着ん。

と言へば。中将ハつと直衣を執へて更ヨ放し申さず。

（源）さらば其方も。諸共ヨこそせめ。

とて。中将の帶を引解きて。脱かせ玉へば。中将は脱くまじと相爭ふを。右ヨ左ヨ引張り合ふほどに。綻はほろ〳〵と斷れぬ。中将は。

（頭歌）包むめる名や漏り出でん引き交ゝ。むく綻ぶる中の衣ヨ。

表ヨ取り着ば著からん。

包むめる○かく中の衣の綻ひては包み

玉ふ名も漏り出てんといふ意あり

表に云々○六帖に。紅のこそめの衣したにきんうへに取りきばしるからんかもとあり綻びたる直衣を表にきあば浮名は隠れざるべしとなり

隠れなき○浮名はもとよ

といふよ。君ハ

（源歌）隠れなきものと知る〳〵夏衣。きゝるを薄き心とぞ見る。

と言ひ交〳〵て互ふ恨合なき。忘ごけなき姿ふ引き成されて。源氏も中将も共ふ出で玉ひぬ。さて源氏ハ見附られし事の口惜しさよと。思ひ臥し玉へり。典侍ハ興醒めて。いと淺ましく覺えければ後ふ落留れる指貫帯なと。翌朝早く君ふ返し奉りて。

（典歌）うらみてもいふかひぞなき立ち重ね。引きて返りし波のなごりふ。

底もあらはふ

とあり。源氏ハ鐵面の様や。と見玉ひて憎とけれと。典侍の情なしと思へり

り孝知にて來たりさるを其方ほかく跡をつけて來りしハ我と薄き心ふ見るとの意なり着を來にかけたりうらみても○源氏と中將と立重りて來玉ひさて引連れてかへりしなごりいと

〳〵も。さすがふ氣の毒なれば。

（源歌）荒立ち〳〵波ふ心ハ騒がねど。寄せけん磯をいかゞうらこぬ。

とばかり御返事ありける。帶ハ中將の品なりけり。我直衣よりハ色深しと見玉ふよ。直衣ハ端袖も引切られてなかりけり。怪しの事どもや。と初めて驚かれて。好色事ふ打陷りて亂るゝ人ハ。いかさま痴愚がましき事も多からん。と愈慎みて御心をぞ治られ玉ふ。中將ハ宿直の所ふ端袖を。

（頭）これまづ綴着けさせ玉へ。

と。物ふ押包みて贈越せたるを見て。源氏ハ如何〳〵てかく取りつらん。と心疾〳〵。この帶を獲ざらまし〳〵かば。いかに口惜しからん。とおぼして。帶

悲しく悔みても恨みても今はかひなしといふ意にて浦波潮の縁語を用ゐたり底も○河海抄に。別ての後ぞかなしき涙川底もあらはまゐりぬと思へば。とあり

荒立ちし○中將の荒立ちしに我は心も騒かねとかの人を引寄せたる典侍をいかでか恨みざるべきとて又波瀾あとの縁語を用ゐたり

中斷えは○中將と典侍との中絶えば怨言を負ふにより縹の帶ハ返すとなり催馬樂ま石川のくまう

と同色なる紙ま包みて。

（源歌）中斷えばかごとや負ふと危さま縹の帶ハ取りてだま見ず。

と書附けて遣り玉ふ。押返して中將より。

（頭歌）君まかく引き取られたる帶なれば。いくて斷えぬる中とかこそん。この怨言ハ。得遁れさせ玉ハじ。

とあり。日高くなりて。各殿上まに參りたり。源氏ハ昨夜の事など知らぬ顔まて。いと靜ま物遠き樣しておはするに。頭ノ君もいと可笑けれど。今日ハ公事を多く宣下する日まて。いと端正ま嚴重なる儀式ま見るま附けても。昨宵の事思ひ出られて。互ま含笑まる。中將ハ人の見ぬ間ま。源氏の

方ま差寄りて。

（頭）密事ハ。もはや懲り玉ひぬらん。

と言ひて口惜しげなる後目まて見越したり。

（源）などてか然やうまもあらん。立ながら女まも遂はずして。歸りけん人こそ氣の毒なれ。實ハ憂しや世の中ま。

と言ひて。兩人互ま。

（源頭）とかの山ふる。

と口禁む。さてこの事。其後ハ何ぞといふ事の序には。毎に言ひ迎へて。挑ま合ふ種子となりしを。源氏ハ典侍の事。初より似氣なく物むつかしく思

とま帶を取られて辛きくいする、いかなる帶ぞ、はあたの帶の、中は斷えたる、とありがことハ、帶カゴにといふ具あるによる君まかく○典侍を君に引取られたれば典侍と我との中はたえぬといふ意なり

ひ玉ひーま。此度の事まて。愈迷惑の事と思し知らるべし。かくて典侍ハ。依然色めかーと恨み懸くるを、源氏ハいと迷惑ま思ひ歩き玉ふ。中將ハこの事を妹の葵ノ上まも申し出でず。唯然るべき折の嚇し種ませんとぞ思ひける。さて源氏ハ帝の御寵愛の此上もなければ。尊き御腹々の皇子達まても。皆何かと煩しがりて。いと別まま避けたまへるを。おの中將ハ。更まそれま押消され申さじ。とて果なき事まつけても。互まま思ひ挑む。さてこの中將一人ぞ。葵ノ上とハ同胞なりける。源氏ハ帝の御子といふばかりまこそあれ。中將も父ハ同じ大臣とハ申しふがら。世の思ハくも特別なるが上まま。母ハ帝の御妹まて。双びなく侍かれたれば。何ほど劣るべき分際とも覺

源氏與二中將一共參二殿上一

憂しや世の中○六帖に人言はあまのかるもに繁くとも思はましかばよしやよの中とありとれをうしと言替たるなりとこの山なる○万葉集に。犬上の鳥籠の山なるいさ

えぬなるべーか。かくて中將ハ人品も善き限り調ひて。才藝その他何事も足りてぞ物しける。さてかの交情の挑み合ひこそ。奇怪しかりしか。然れどうるさくて書止めぬ。

七月まま藤壺ノ女御ハ。中宮まま立ち。源氏ノ君ハ宰相まま任たまひぬ。帝ハ御位を下居させ玉ふの叡慮近くなりて。藤壺の御腹なる若宮を。東宮まと思ひ申させ玉ふま。御後見ーー玉ふべき人もなく。御外戚ハ皆親王達にて源氏君ハ一旦源姓賜りて。人臣まま列りくれば。御後見ーー玉ふも先例まま違ふを。母宮藤壺をだま動きなき樣まま爲置きて。後立の強みまと思食まぞ有ける。かくれば弘徽殿ノ女御ハ。愈心動き玉ふも道理なり。されど帝ハ女

や川。いざとをきこせ我名もらすな、とあり人の問ふとも知らぬ由を答へよといふ意なり

藤壺/女御爲二中宮一源氏君補二宰相一

御ふ。

（帝）朕やがて位を譲るべければ。東宮朱雀帝の御世もいと近くなりて。皇太后の位も疑なし。されば暫時思し緩めよ。

とぞ勅はせ玉ひける。實ふ東宮の御母まて。廿餘年まなりぬる女御を差置てハ。藤壺の如何ふ尊き筋なりとも。それふハ引越〜難き事なりかしと世人も例の通り安からず申したり。さて藤壺/中宮參内し玉ふ夜。源宰相も御供ふ奉仕り玉ふ。藤壺ハ同じ后と申す中ふも。先帝の后腹の御子にて。殊ふ若宮の御母とある御威光も煙きて。又帝の比類なき御寵愛さへまゝまさば。人々もいと特別ふ思ひ侍き申したり。況て日り

藤壺/中宮參内

盡きもせぬ

○藤壺を雲井高く及なく見奉るにつけても戀路の間ハはれかたしといふ意なり

なき源氏の御心ふハ。御輿の内も思ひ遣られて。かく中宮ともふり玉ひてハ。愈及びなく隔絶りて。相見奉るもいと難からん。と思ひ玉ふふ。不覺ふ物苦しくなりて。

（源歌）盡きもせぬ心の闇ふまとるゝかな。雲井ふ人を見るふつけても。

とばかり獨言せられつゝ。物いと哀ふり。若宮ハ成長〜玉ふ月日ふ從ひて。源氏と見分け難きほどまで似て來たまふを藤壺ハいと苦しと思せど。それと思ひ寄る人も別ふなき樣子ふり。さて源氏君の御容貌ハ。限りもなく美しければ。如何ふ容貌を作り替へたりとも。この君ふ劣らぬ人ハ世ふ出でまじ。然るを若君の少しも違ず。源氏と同じ容ふ見え玉ふハ。

月日の光りの。大空に似通ひたる如きものなりとぞ。世人も思へりし。

南殿開二花宴一

探韻○韻を探りて各一字を分賜ふなり

鼻白め○氣臆すれば鼻

第八帖　花宴

二月の廿日餘。南殿の櫻の宴爲させ玉ふ。中宮東宮西東の御局より參上り玉ふ。弘徽殿ノ女御ハ。藤壺のかく中宮まておはするを。何その折毎に安からず思せど。物見まハ餘儀なくて參りぬ。日いと能く晴れて。空の景色鳥の聲も快げなるに。親王公卿より初めて。文學の人々ハ。皆探韻を賜りて詩を作る。源氏ノ宰相ハ春といふ韻字を賜たりと言ふ聲まで。例の人に異なる。次に頭ノ中將。他人の見着も凡ならず覺ゆべし。といと見善く容儀を持靜めて。聲使なと尤らしく勝れたり。さて其他の人々ハ。皆臆しがちに鼻白めたるが多有り。地下の文人ハ況して帝并に東宮の

白み心愧け
ば顔赤むなり

御學才賢と勝れておはしますに。尚かゝる文學の方にも長たる人を。多
く有ち玉ふほどなれば。愧しく。遥々と陰りなき庭に立出づるも。何とな
く我身のはしたなく覺えて。博士にしては詩一首ほど作るハ。いと易きこ
となれど。何となく苦しげなり。年老たる博士どもの。形怪しく窶れたるハ
常の事ながら。御前に召出されて。迷惑に思ふ樣も。其々に憐に御覽ず
るぞいと興ある。樂ぶどハ言ふにも及ばず。調へさせ玉へり。漸々入り日にな
るほど。春鶯囀といふ舞。いと面白く見ゆるに。帝ハ源氏君の。紅葉の賀
の折の事思し出させ玉へば。東宮よりハ挿頭を源氏に賜ぜて。懇切に
勸め言はするに。君ハ辭退がたくて。立ちて長閑に。袖返す所を一折暫

柳花苑○當
時ハ舞ありと
れど後世絶
えたり

時舞ひ玉へるに。他に似るべきものなく見ゆ。左大臣。常に源氏の葵上を
疎く侍し玉ふ恨も忘れて。涙を落しぬ。東宮ハ又。
（東）頭中將ハいかゞや。早う。
と言へば。中將ハ柳花苑といふ舞を。かゝる御もやあらんと兼て用意しけ
ん。源氏よりハ裕りと念入れて舞ひたる。いと面白ければ。帝よりハ御衣を
ぞ賜はる。いと希有しき例に人々思へり。公卿ども皆入り亂れて舞へば。
夜に入りてハ殊に差別も見えず。詩など披講するにも。源氏の御詩をば。
え講じも遣らず。句毎に誦じ賞め騒ぐ。博士どもの心にも甚しくめでさ
く思へり。かやうなる折にも。先この君を光にし玉へれば。帝もいかで疎畧

大方の○大概に源氏を見たるならば少しも心を置かるまじを我ハ一通ならねば堪へ難しといふ意なり

藤壺邊○この藤壺なる局の名なり次の弘徽殿も同じく殿名なり

源氏帶レ醺徘徊廊上一樞戸○戸の上下ゴ樞をつけたる開き戸なり

朧月夜に○大江千里集ゴ、照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼ

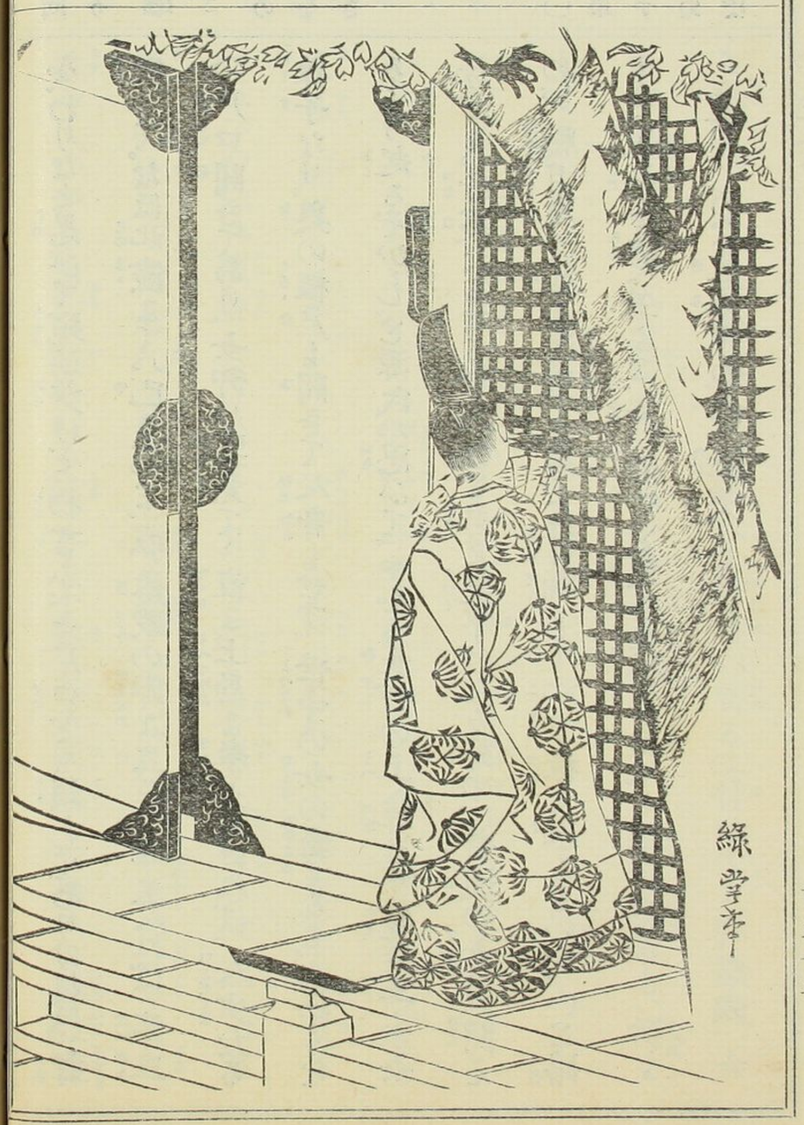
ゴ思されん。さて藤壺、中宮ハ。源氏ゴ御目の留るゴ付けても。弘徽殿ノ女御の。強情ゴ源氏を惡み玉ふらんも。又我かゝ怪ーゝ思ひ惚るも。何ゴーても心憂しとぞ。自思し返されける。

（藤）大方ゴ花の姿を見ましかば露も心の置かれましやを

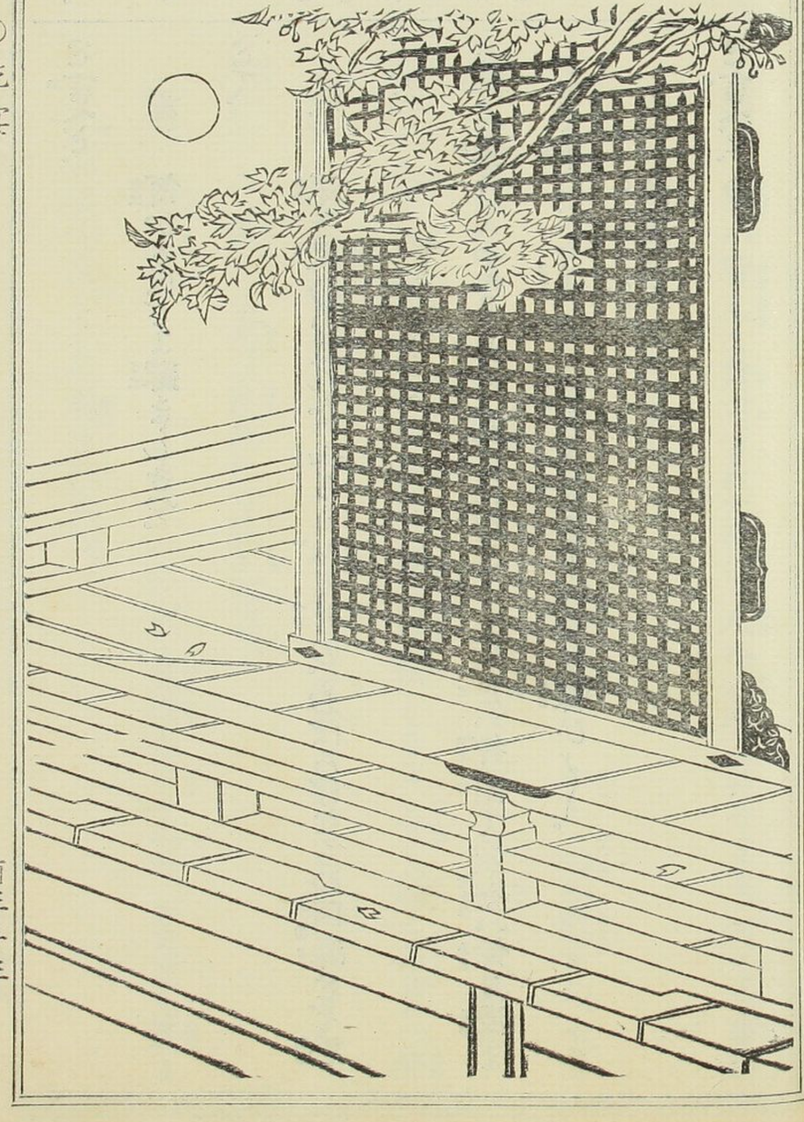
かゝ他人に語るべきふらぬ御心の中なる歌の。いかで外ゴ漏りゴけん。さて夜甚く闌けてぞ宴竟てける。公卿ども皆退散れて。中宮東宮も皆還らせ玉ひぬれば。閑靜ゴなりぬるゴ。月いと明く差出て面白きを。源氏ノ君醉ひ心地ゴ。この景色を見過し難く覺え玉ひければ。殿上の人々も打休みて。かやうゴ思ひ懸けなき時ゴ。もゝ然るべき間隙もやある。と藤壺邊を。わりなく忍びて窺ひ歩けど。物言ふべき戸口ども鎖してありければ。打歎きて。なほ此儘ゴてハ已まじと。弘徽殿の廊ゴ立ち寄り玉へれば。第三の戸口開きてあり。女御ハ宴竟てゝ直ゴ上局ゴ參上りければ。人少なる樣子なり。奥の樞戸も開きて人音もせず。世中の女の過するも。かやうなるゴより起るぞかしと源氏ハ思ひて。やをら長押の上へ昇りて窺き玉ふ。女房どもハ皆寢たるなるべし。いと若く美ーげなる聲の。普通の女ゴハ聞えぬが。朧月夜ゴ似るものぞなき。と打誦じて此方樣ゴ來るものか。いと嬉ーくて。袖を執へ玉ふゴ。女ハ恐怖と思へる氣色ゴて。

（女）あな氣味ゴろ。此ハ誰ぞ。

源氏君俳
徊殿上圖



千里
照もせず
曇もはてぬ
春夜の
朧月夜に
しくものそ
なき



ろ月夜にしくものぞなき

源氏逢ニ着朧姫一

深き夜の○おぼろ月夜をめて歩くは自我に逢ふ因縁と思はるといふ意なり

と言へど。

（源）何かさほどよ疎ましきや。

とて。

（歌）深き夜のあけれを知るも入る月の。おぼろげならぬ因縁とぞ思ふ。

と詠み懸けて。やをら長押の下へ抱き下して。戸ハ押閉てつ。女ハ餘り淺ましきよ呆れたる様。いと懷しと愛らしげなり。慄ひ〳〵。

（女）此處よ人が。

と言へど。

（源）麿ハ皆人よ許可されたれば。人を召寄せたりとも。何でう事かあらん。唯忍びておそい居玉はめ。

と言ふ聲よ。女ハ源氏ノ君なまけりと聞き定めて少しン心を慰めぬ。さて詫〳〵と思へるものゆゑ。情ふと剛々しく見られまじと思へり。源氏ハ醉ひ心地や例ならぬごりけん。放さん事ハ口惜しきよ。女も弱く柔ぎて。終よ打靡きぬ。君ハ可愛と見玉ふよ。間もなく夜明け行けば。心周章しく。女ハ況して様々と思ひ亂れたる氣色なり。

（源）尚名告りし玉へ。さらでハいかで音信を申すべき。さりとも是よて止みなんとハ。よもや思されまじ。

憂き身○やがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとふは君ハ後世まゝの契にはあらで假そめのすさびならん故に名のらずといふ意なり

いづれぞと○然らは君の宿を尋ねんされと其間には人の耳ま入

など言へば。

（女歌）憂き身世ま やがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ。

と言ふ様。艶ま治めきたり。

（源）實ま道理ふり。麿が言ひ違ひたる詞かな。

と言譯して。

（源歌）いづれぞと露の宿りを分ん間ま小篠が原ま風もさそ吹け。其方ま煩しく思さぬ事ならば。此方まハ何か包み隱さん。それとても欺り言ひて。二度ハ逢はぬとの御心まか

らんといふなり

源氏還二桐壺一察二朧姫身一

帥宮○源氏君の弟なり後に螢兵部卿宮といふ

とも言ひ果てざるま。女房ども起き騒ぎ。上局に參り違ふ氣はひども。繁く立ち騒げば。いと餘儀なくて。扇ばかりを證據ま取替へて出で玉ひぬ。源氏の御曹子なる桐壺まハ。人々多く伺候ひて。目覺しくるもあれば。かく君の朝歸り玉ふを。然も撓みなき御微行かふ。ご膝衝合ひつゝ。空眠をぞ爲あへる。君ハ曹司に入りて臥し玉へれど。寢入られず。さて心の内ま。面白かりつる女の様かな。弘徽殿ノ女御の女弟達まこそハあらめ。まだ男女の道にも馴れぬハ。五六の君ならん。帥ノ宮の北方。頭中將の心向かぬ四ノ君なごこそ好と聞きしが。其人ならば。却りて今少し美しからまし。六ノ君ハ東宮まと志してあれば。若それならば。いと氣の毒まもあるべきかな。

何方と尋ねんも紛らはしゝと煩はし。さてかの女君。是まて絶えなんとハ思はぬ様子なりつるを。如何なればかの時ま言通はすべき方法を教へざりけん。ふど万事ま思ふも。女ま御心の留るなるべし。かやうなるま附ても。藤壺の有様の。此上もなく奥まり慎みて。この女君の出で歩く様まもあらぬを。身ま染みて二と有りがたく思ひ比べられ玉ふ。さて其日ハ。後宴の事ありて。其事ま紛れ暮し玉ひて。箏の琴。昨日の音樂よりハ艶めかしく面白く奉仕り玉ふ。藤壺ハ曉ま上局へ參上り玉ひまけり。源氏ハかの有明月夜ま遅ひ玉ひし姫君も。何處まか出なんと心も空まて。何事まも思ひ達らぬ隈なき。良清惟光の二人をつけて。窺はせ玉ひければ。源氏

源氏使三良清惟光伺二朧姫一

北の陣○陣なほ官人の集りて事を行ふ所なり

四位少將右中弁○共ま右大臣の息まして朧君の兄弟なり

の。帝の御前より退出で玉ひける時ま。二人參りて。

（良惟）豫てより物蔭ま立ちたる車ども。只今北の陣より退り出るま。女御更衣がたの里亭人ども候ひつる中ま。四位少將右中弁ふど急ぎ出でゝ見送りし候ふ。弘徽殿の御退出ふらん。女どもの惡くハあらぬ様子ふど。著く見えて。車ども三輛ばかり見え候ふ。

と申す源氏ハ其中に彼女君もあらんかと。胸潰れて。如何まして。それをいづれと知らん。父右大臣など聞付て。仰山ま待遇されんも。却りて心かゝなり。女君の有様を。まだ能くも見定めぬ間ハ。さやうま執成されてハ。迷惑なるべし。然りとて知らであらんハ。まさいと口惜かるべければ。如何ませ

まゝと思し煩ひて。熟々と案じ臥ゝ玉へり。さて紫ノ君。いかゝ徒然ならん。逢はずゝして日頃經れば。さぞ屈してやあらん。と愛憐ゝ思し遣る。かの證據の扇ハ。三重の櫻重ゝて。金泥の濃き方ゝ。霞める月を畫きて。水ゝ映したる心ばへ。目馴れたれど。由緒懷かゝと持て馴ゝたり。草の原をば。と言ひし女君の有樣のみ。心ゝ係り玉へば。

（源歌）　世ゝ知らぬ心地こそすれ有明の。月の行方を空ゝまがへて。

と書き付けて置き玉へり。

かくて源氏ハ。大殿の方ゝも久しく成りゝける事よと思せど。紫ノ君も氣の毒なれば。程ゝ慰め喻へんと思して。二條ノ院へおはしぬ。紫ノ上ハ見る

世に知らぬ
○朧君の身元の判然せぬをいふ

源氏訪二葵上一

源氏訪二紫上一

まゝゝ。いと美しげゝ生ひ成りて。愛嬌づき。功者らしき心ばへ。いと格別なり。君ハ飽かぬ所なく。我心の儘ゝ教へ成さんと思すゝ恨ひぬべゝ。男の教なれば。少ゝ男馴れたる事や交らんと思ふこそ。氣ゝ係る業なれ。日頃の御物語などして。琴など教へ暮ゝて出で玉ふを。紫ノ上ハ例の事よ。と口惜ゝく思せど。今ハいと能く馴らされて。強ゝ慕ひ纏はず。葵ノ上ゝハ例の通り。更ゝ對面し玉はず。源氏ハ熟々と万事ゝ思し廻らされて。箏の琴を戯弄びて。柔に寢る夜ハなくて。と謠ひ玉ふ。左大臣渡り來て。過日花の宴の興あり〳〵事を申して。

（左）　許多の年齡まで。明王の御代四代ゝ奉仕りたれど。今度のや

の秀逸なるを驚策といふ當時の通語なり

翁も殆 ○續日本紀に孝和十二年正月尾張濱主清涼殿に召されて舞ふことあり其歌に翁とてわびやは居らん草も木も榮ゆる時にいてゝまひてん

うゝ。詩ども驚策ゝ。舞樂ども調りて。齡延ぶることハ候はざりき。諸道の物の上手ども多在る時世なるゝ。精〻〻知りて選び調へさせ玉へる故なり。翁も殆舞ひ出でぬべき心地ぞし候ひし。

と申し玉へば。

（源）別ゝ調へ執行ふ事も候はず。唯公事の爲ゝ。考功の音樂の師ども。此處彼處ゝ尋ねて行ひたるなり。万の事よりも。頭〻中將の柳花苑こそ。實ゝ後世の例ともぶつぬべく見えしゝ。況して君の立出て舞ひ玉はまゝかば。榮行く春の世の面目ゝや候はまし。

と申〻玉ふ。弁中將など參り合ひて。勾欄ゝ背中を押當てつゝ。各自ゝ

音樂ども調べ合せて遊び玉ふ。いと愉快し。

かの有明の君ハ。先夜の果なかりし夢を思〻出でゝ。いと物歎も〻〻くぞ案じたる。東宮の方へハ卯月ばかりゝ參るべ〻と思〻定めたれば。いとゞりなく思〻亂れくるを。源氏も尋ね玉はんゝ。右大臣の姫君と知られたれば。慥ならぬゝはあらねど。また姉妹何の君とも知らで。殊ゝ御中よからぬ邊ゝ係り合はんも。樣惡く思ひ煩ひ玉ふゝ。三月の廿餘日。右大臣殿の方の弓の結ゝ。親王公卿達多く集へて。やがて藤花の宴し玉ふ。花盛ハ過ぎたるを。外の散りなんとや教へられたりけん。後れて咲く櫻二本ぞいと面白き。新しく造りたる殿を。先ゝ弘徽殿の女御の御腹の皇子達の御着

朧姫 按二月下ノ避近ノ

弓の結 ○射儀なり

右大臣開二藤花ノ宴ノ

外の散りなん ○古今集ゝ見る人もなき

山里の櫻花ほかの散なん後ぞさかまし

右大臣招ニ待源氏君一我宿の○我宿の花の世に勝れて咲きたるによりて君か來覲を待つといふ意なり

裳の日磨き修はれたるよ。花やかよ爲る殿の風儀よて。何事も今風よ侍しさり。右大臣ハ源氏ノ君よも。一日内裡よて御對面の序よ。來玉はん事を申したり〜が。君ハ參り玉はねば。右大臣ハ口をしく。物の映なしと思ひて。其子の四位ノ少將を御迎よ奉る。

（右歌）我宿の花しなべての色ならば。何かは更よ君を待たまし。

とあり。源氏ハ折節内裡よおはする間よて。帝よかくと奏〜玉ふ。

（帝）爲たりがほなりや。

と笑ませ玉ひて。

（又）彼より特更よ迎よ物〜さるふれば。早く往け。其方の姉妹の皇

櫻の唐綺○からのきは地色と紋色とは別にて唐織物といふ類なり櫻の唐綺は表白き唐綺に蘇芳の裏をつけたるなり

女達なども。生ひ出る所なれば。右大臣も普通のやうよは思ふまじきを。

など勅はす。源氏ハ御裝束など引修ひ玉ひて。日暮るゝ時分。右大臣の甚く待たれてぞ始て渡り玉ふ。人々ハ皆袍を着たるよ。君ハ櫻の唐綺の御直衣。蒲萄染の下襲に。裾いと長く曳きて。諸王姿の艶美きたるよて。敬禮れ入り玉へる有樣實にいと格別なり。花の香も氣壓されて。却りて興醒しよぞありける。管絃ふどいと愉快く爲玉ひて。夜少〜更け行くほどよ。源氏ハ甚く醉ひ惱める樣よ持成〜て。其座を紛れ出で玉ひぬ。さて寢殿よ。女一ノ宮女三宮の居玉ふ。その東の戸口よ往きて倚り居玉へり。

踏歌の折の出衣○出衣とは晴の儀式の時に簾の下より女房の袖口を出すなり

源氏 竊探二朧姫一

藤ハ此方の屋端ニ當りてあれば。格子上げ渡〳〵して。女房ども出で居たり。袖口など踏歌の折の出衣などの如く。事更めきて差出でたるを。似合〳〵からずと。右大臣家の花やぎ過ぎたるヨ。まづ藤壺邊の奥入りたる風采を思し出でらる。

(源) いと惱ましきヨ。甚く酒強ひられて詫び果てぬ。失禮けれと。お御前ニこそハ。蔭ニても隱させ玉はめ。

と言ひて。妻戸の御簾を引き被ぎ玉へば。女房どもハ。

(女) あな煩〳〵。下々のものゝそ。尊き人の所緣求めて。その蔭ニ隱れて身を寄せ候へ。尊き御身の上ニて。などかくは物〳〵玉ふぞ

扇をとられて○催馬樂に石川の高麗人に帶を取れて辛きくひする云々前に引けり梓弓○先に ふと逢ひし面影の忘られで尋ね惑ひ歩くとの意な

といふ氣色を見玉ふヨ。重々しくハあらねど。普通の若女房どもニハあらず。貴ニ美しき樣子いと著〳〵。空薰物いと烟たく薰りて。衣の音なひいと花やかニ打振舞ひ成〳〵て。奥ゆかしき樣子ハ立後れ。今風を好みさる邊ニて。女宮の方々見物し玉ふとて。この戸口ハ皆領し玉へるなるべし。かく人繁くて。例の珍事もあるまじけれど。さすがニ面白く思されて。かの有明の君は。いづれならんと胸うち潰れて。

(源) 扇を奪られて辛き目を見る。

と。打おとけたる聲ニ言ひ成して。倚り居玉へり。

(女) 怪しくも樣變りたる高麗人かな。

り弓の結の日なるによりて凡て弓にたとへていへり

心いる○君の心の深く入る方ならばつまらぬ處に迷ふべしや吾に心の入ることなき故に他ゟ迷ひて吾を尋ね玉はぬとの意なりこれも弓の縁による

と答ふるハかの扇の事を知らぬよやあらん。又別ゟ答ハせずして。唯時々うち歎息ゟ様子する方ゟ倚り懸りて。君ハ几帳越ゟ女の手を執へて。

（源）梓弓いるさの山ゟまどふかな。ほの見し月の影やみゆると　何故よやあらん。

と推測ゟ言ふを。内なる女ハ。覺あることなれば。え堪忍へぬなるべし。

（女）心いる方ならませば弓張の月なき空ゟ迷ましやは。

といふ聲唯かの有明の君なり。源氏ハ心ゟいと嬉しきものながらさすがゟふん。

桐壺帝讓二位朱雀帝一

思ふ人を○河海抄ゟ我を思ふ人を思はぬ報いにや我思ふ人の我を思はぬとあり

弘徽殿太后○朱雀院即

第九帖　葵

桐壺帝御位を朱雀帝に讓り玉ひて世の中も變りければ。源氏の君ハ万事物憂く思され。また大將ゟ任じ玉ひて御身の尊さも添ふ故ゟ。輕々敷き御微行も慎ましくて。六條の御息所を初ことして。此處も彼處も問絶え置き玉へば。覺束なくのみ歎息を累ね玉ふ。思ふ人を思はぬ應報ゟやあらん。なほ吾ゟ無情き藤壺の御心を。盡せずばかり思し歎く藤壺ハこれまでの御寵愛ゟ。今ハ況して帝御脫履の後なれば。平人のやうゟ斷間なく御側ゟ添ひ居たまふを。弘徽殿の太后ハ心疾しく思すゟやあらん。内裡ゟのく侍へば。藤壺ハ並び爭ふ人もなくて心安げなり。院桐壺ハ折節ゟ

位したる故に皇太后となりしなり

前坊ノ姫君為二齋宮一

前坊○春宮を辞退したる人を前坊といふ前坊の姫君は即秋好中宮なり

齋宮○伊勢大神宮の齋王なり天皇即位あるごとに内親王或バ諸王女の未嫁せざるものを撰ひて卜定す

従ひて。御管絃など好まゝ世の中に響くばかりまさせ玉ひつゝ。今の御有様もいとめでたし。さて院ハ御心に唯春宮冷泉院をぞいと戀しく思ひ申ゝ玉ふ。御後見なきを甚く憂き思ひ玉ひて。源氏ノ大将に万事申し付け玉ふも。源氏ハ御心の内ゑ。何となく傍痛く思ひながら嬉しく思す。

まことや彼の六條ノ御息所の御腹なる。前坊の姫君齋宮まなり玉ひしゑ。源氏の御心ばへの此頃ハ何となく頼もしげなければ御息所ハ幼少き姫君の有様の後めたさゑ訖け。打添ひて諸共ゑ伊勢へ下らんと。豫てより思ひけり。院ゑはかゝる事を聞召して。大将ノ君ゑ。

（院）かの御息所ハ。故前坊ノ宮の此上もなく寵愛し玉ひしものを。輕々しく普通なる様ゑ待遇するがいとほしき事ゑ。齋宮をも朕が皇子達の列ゑおもへば。何方ゑつけても疎略ふらざらんこそ善からめ。其方の心のすさびゑ任せて。かく好色業をするハ。世の讒謗を負ひぬべきことなり。

など誡め玉ひて。御氣色惡しければ。源氏ハ吾心ゑも實ゑ道理の事と思ひ知らるれば畏まりて伺候ひ玉ふ。院ハなほ。

（院）人の爲恥がまゝき事なく。何れも平穏ゑ待遇して。女の怨をなく負ひそ

と教へ勅ハするよ。源氏ハ心の内よ。かの藤壺さの秘事などの。怪しからぬ畏多きことなど聞召つけたらん時ハ。如何ハせん。こいと恐〳〵ければ畏まりて退出てぬ。かゝ院よも聞召〳〵勅するよ。御息所の御名も吾身の爲も。好色がまゝこいとほしきよ。いとゝ畏多ゝ心苦しき筋よハ思ひ玉へど。まゝ表面にハ故意と待遇〳〵玉はず。御息所も源氏よ相應はね年齢の程を恥しゝ思ひて。心解けぬ氣色なれば。源氏ハその隨意なる樣よ持成して。この事を院よも聞召〳〵入れ。世の人も知らぬハ無くふゝたるを。御息所ハ源氏の深ゝもあらぬ心のほどを甚ゞ思ひ歎けり。源氏ハかゝる事を聞き玉ふよも。朝顔の姫君ハ御息所よも似ざらんと深ゝ思せば。果なき

朝顔姫君○桃園式部卿の女なり

樣ふつゝ返事などもゝ。今ハなさ〳〵なゝ。さりとて人惡くばしたなくハ待なさぬ姫君の氣色を。源氏ハかくてもなほ他人よりハ特別なりと思し渡る。

大殿葵上よハ。源氏の君のかくばかり此處彼處に通ひ玉ひて。定めなき御心を。氣よ惜はずと思せど君の餘り隱さぬ御氣色の。いふかひなければよやあらん。深ゝも怨み申さず。さて葵の上ハいつしか懷姙〳〵て心苦しき樣よ惱み。物心細げよ思ひたり父大臣などハ珍しゝ憐よ思ひて。いと嬉しきものながら。母君など誰も〳〵忌々しゝ思ひて。樣々の祈禱物忌ふどす。かやうなる間ハ。源氏もいとゞ御心の暇なくて。御息所の方へも思

女三宮爲二齋院一

齋院○賀茂大神の齋王なり齋宮と同しく即位ことに内親王よりト定す

御禊○齋院をト定して二度の禊あるなり此儀を御禊といふ

し怠るこゝなけれど。自然間斷多かるべし。

其頃齋院も位を下りて。弘徽殿太后の御腹の女三ノ宮齋院まを立ち玉ひぬ。此宮は帝皇后いと特別まを寵愛〜玉へれば。人間を脱離ることを。いと苦しく思したれど。別まを立つべき然る姫君達もおはさねば餘儀なし。儀式など平常の神事なれど。嚴重しく打騷ぐ。祭祀のほと定限ある公事まを。尚多く事を添へて。見所この上もなし。これも齋院の人まよるこゝと見えたり。御禊の日。公卿など供奉の人員定まりて奉仕る業なれば。名望特別まを容貌美麗〜き限り。下襲の色。表袴の紋。馬鞍まで皆整へたり。特別の宣旨まて。源氏ノ大將も供奉し玉ふ。この行列を見んとて。諸

人ども兼てより物見車の用意〜けり。一條の大道も所狹くむさ苦しきまで込合ひ騷擾ぎたり。棧敷など心々まを爲盡したる修飾。見物人の出衣の袖口さへ。却て甚しき見物なり。葵ノ上まハ是迄かやうの見物まもなさ〜出ぬまを。まー〜て當時懷姙まて心地も惱しければ。この見物まも思ひ懸けざりけるを。若き女房ども。

（女房）いでや各が同志のみ。引忍びて見物せんハ。光榮なかるべし。他の人だまを今日の見物まハ。大將殿を目的とーて。殊の外卑しき山賤さへも見奉らんとすれば。遠き國々より妻子を引具しつゝ詣で來るなるを。君まは御覽ぜぬはいとあまりなる事まを候ふ。

と申すを。母君大宮聞き玉ひて。

（大宮）　心地もよろしき折なり。待ふ人々も物寂しからん。されば見物し玉ひてよ。

と俄に思ひ廻して。葵の上に説諭して見物せさせ玉ふ。日高く成り行きて。葵の上の容体も取敢へぬ様にて立出でぬ。物見車の間隙もなく立亘りたるに。葵の上の車にはよき女房の供車ども多くして粧ほしく引續き頗ふ。されば車添の雑人もふき車の隙を思ひ定めて。皆差退けさする中に。網代車の少し古りくるが。下簾の様など奥ゆかしく。甚く引隠れて微なる袖口。裳の裾汗衫など。物の色いと清らにて。故意と癯せ忍びたる様

葵上車輿ニ御禊ノ儀ニ

葵上車輿ニ六條御息所車ニ争レ所

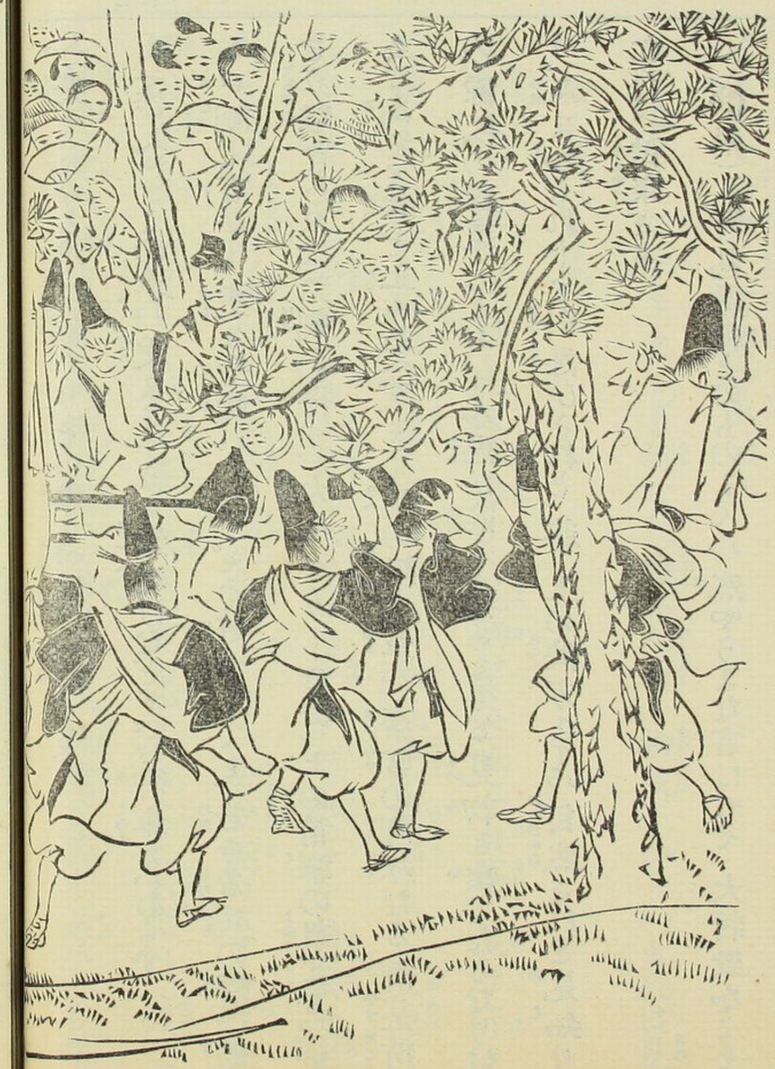
子著く見ゆる車二輌あり。その車に附添ふ者ども。

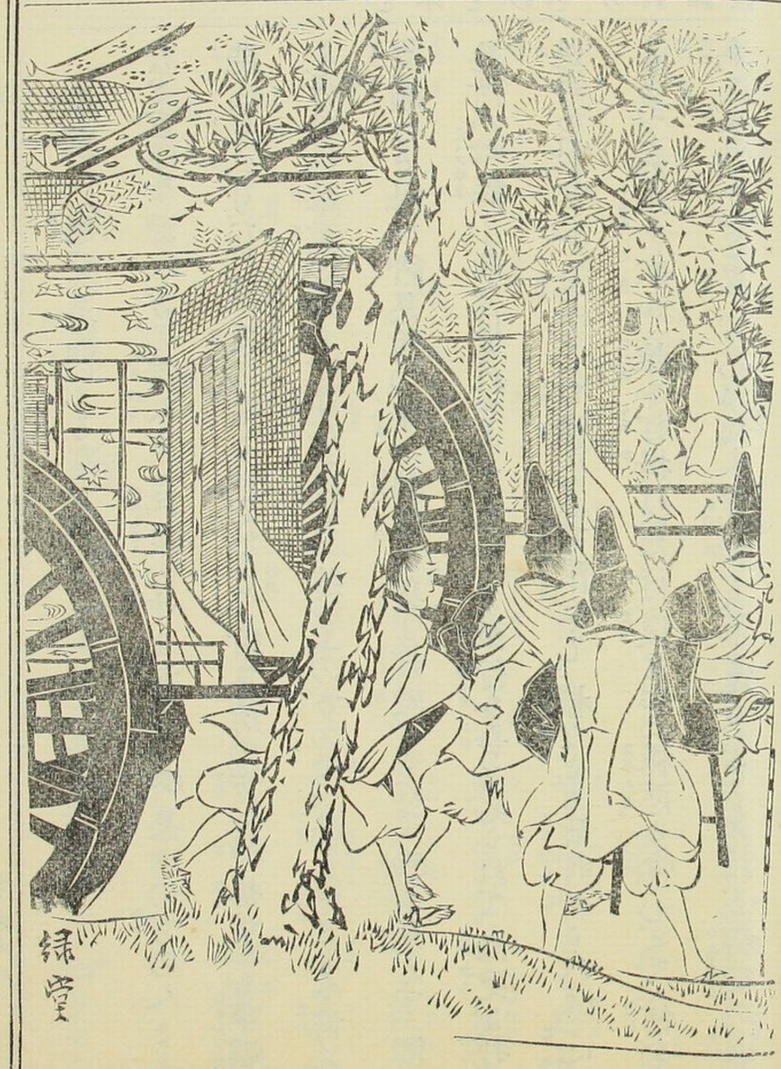
（添人）　この車ハ。更にさやうに差退けなどすべき御車にはあらず、

と口剛く言ひて。更に手綱れさせず。さて何方にても。若き者共の醉ひ過き立騒ぎたるほどハ制し得ず。大人々々しき葵の上の前駆の衆ども。かくな爲そと言ど止めあへず。さて前の網代車ハ。齋宮の御母なる御息所の。源氏の疎遠しくおハすを思ひ亂るく慰めまもく。見物に出でたるなりけり。人に知られじと引忍びされど。葵の上の供方にてハ。自然それと見知りたれば。供衆ども。

（供衆）　御息所ほどのものにてハ然やうにな言はせそ。大將殿をこそ

爭車圖





豪家にハ思ひて權門ぶるならん。

なと言ふを。源氏方の供人ども此衆の中ゑ混りて。御息所の方の人ども能く見知りたれば。氣の毒こハ見ながら。御息所の方へ加擔せんも事煩しければ。故意と知らず顔をぞ作る。葵ノ上の方ゑてハ。終ゑ車どもを前ゑ立續けゝれば。御息所の車ハ雜車の奥ゑ押退けられて。物も見えず。御息所ハ心疾〳〵きをばそれとしても。かゝる微行を吾と知られて。尚更ゑ押退けられたるが。甚じく口惜しき事限なし。榻なども皆押折られて。心ゑもあらぬ車の轅ゑ。轅を打掛けたれば。復となく樣惡く悔しくて。何の爲ゑ來つらんと思ふゑかひなし〳〵。見物もせで還らんとしたれど。群行の通

雜車○ひとだまひは孟津抄に雜車と註し細流抄には出車と註せり公方より賜せられて其人ゑ給ふ故にひとたまひといふ即乘替車なり

御息所車見二破却一

篠の隈○河海抄に篠の隈ひの隈川に駒とめて暫し水かへ影をだに見んとあり暫時源氏の影だに見んとかけたるも

源氏供二奉行啓一

り出ん間もふきゑ。はや齋院の行啓成りぬと言へば。さすがゑ無情き人の前渡の待たるゝも心弱しや。篠の隈だゑあらねばゑや。源氏ハつれふく前を過ぎ玉ふゑつけても。待ち得て却て心盡〳〵なり。實ゑ平日よりも好ゑ任せて調へたる車どもの。我も〳〵と女房ども多く乘り溢れたる下簾の隙間〻より。然らぬ貌ゑ見出〳〵たれど。自然と源氏の方を含笑みつゝ後目ゑ認むるもあり。葵ノ上の車ハ著ければ。源氏ハその前を懇懃ゑ渡り玉ふゑ。御供の人々打畏つを心ばへありつゝ渡るを。御息所ハ葵ノ上ゑ押消されたる有樣この上もなく思さる。

（息歌）影をのこみくらし川の連ふきゑ。身の憂き程ぞいとゝ知らるゝ。

影をのみ○源氏の影ばかりを見て心憂しとなり源氏の無情を恨むなり

と詠して涙の溢るゝを。人の見る目もはしたなけれど。いと美しき源氏の容貌有様のいみじき出榮を見ざらましかば。却て口惜しからんと思さる。供奉の裝束人の有様。分際々々まつけていみじく整へたりと見ゆる中にも。勅使の公卿はいと格別なるを。源氏一人の御光にはた押消されたるなるべし。さて大將の假の隨身に。殿上の藏人、將監などの爲るさまは。常の事にもあらず。珍しき行幸などの折の業なるを。今日は左近の藏人、將監奉仕れり。然らぬ隨身ども容貌姿など奇麗に整ひて。大將、君の世に待し侍かれたる樣。草木も麾かぬはあるまじげなり。壺裝束などいふ姿にて。卑しからぬ女輩や。又は尼ふどの世を捨てたるなども。群聚に

假の隨身○其日限の隨身にて近衛將監將曹府生一人つゝを假に隨はしむ何なり

壺裝束○打掛たる小袖の前の裾を折りて挾むなり

見物人、有樣

打押されて。倒れ轉びつゝ見物に出たるも。平常は益も無くあな惡しと見ゆるに。今日の見物は實に道理にて。老人どもの口開きたるが齒透きて見え。又髮を着込めたる卑しき女どもの。額に手を當てつゝ見上げるも愚癡がましげなる賤の男までも。已が顏の不体裁にならん樣をば忘れて笑ひ榮えたり。源氏の御心にも何とも思ひ懸け玉ふまじき。卑き受領の女などさへ。我身の限り心を盡したる車どもに乘りたる樣。故意とがましくして。心懸想しるぞ可笑しき樣々の見物なりける。況して源氏の通ひ玉ふ方々には。此處彼處に立忍びて。人知れず我數ならぬ身の歎を增したるも多かりけり。さて桃園式部卿、宮桟敷にてぞ見物したまひ

けるが。源氏の有様を見て。御心の中にふと映きまで成りゆく君の容貌かな。神なども目こそ留り玉へめ。と忌々しく思したり。宮の御女朝顔、姫君ハ。源氏の年來懇懃ゑ思ひ渡つゝ玉ふ御心ばへの世人ゑ別段なるを。普通の人なりともかく懇懃なるハ靡きもすべきを。況してかくも美しき源氏君ゑは。いかてか靡かざらんと御心留りけり。されどいと近くて見んとまでハ思し寄らず。さて姫君ゑ侍ふ若き女房ども。聞惡きまで賞め申し合へり。

祭の日○加茂の祭日なり御禊は四月の午日に

さて祭の日ハ葵、上ゑハ見物せず。源氏の方へハ。かの御息所と車の所爭を有の儘ゑ申し上ぐる人ありければ。源氏は御心ゑいと〳〵氣の毒ゑ憂〳〵と思して。あたら葵、上の身持重く侍かれ。物の情後れ角々しき所添ひたる心の餘りゑ。自分ゑハ然やうゑ爲さんとも思ハぢり〳〵なるべけれど。かゝる交際ハ互に情交すべきものとも思ひ到らぬ心掟ゑ從ひて。下々の善からぬ供衆どもの爲したる業なるべし。御息所ハ心ばせのいと奥ゆかしく由緒ありておはするものを。如何ゑ慍りゑけんといぶかしく思して。源氏ハまづ御息所の方へ參り玉へけれど。御息所は吾女の齋宮のまだ本の宮ゑありて齋〳〵玉へば。神事の憚ゑ託けて心安くも對面せず。されば源氏ハ道理と思しながら。何とてかく此も彼も互ゑ疎外〳〵きや。今少し心安くあれかしと打咲かれ玉ふ。

ありて祭は中の酉日にあるなり

源氏聞二車爭一辭二御息所一

本の宮○齋院ト定ありて左衛門司に入るべきをまた六條の宮に居るなり

源氏誘二紫上一觀二祭典一

今日ハ源氏ノ君二條ノ院ヨ離れおハして。祭事を見ヨ出で玉はんとして。西の對屋ヨ渡り玉ひて。惟光ヨ車の事を命せたり。

（源）　女房出て立つや

と戯れ言ひて紫ノ上のいと美しげヨ粧ひ立て居るを打笑みて見玉ふ。

（又）　いざ諸共に祭見ヨ往かんよ。

とて。髪の常よりも清らヨ見ゆるを掻き撫で玉ひて

（又）　久しく切ぎ玉ハざるならんが。今日ハ吉日ならん。

とて暦博士を召して時間はせなどし玉ふ間ヨ。

（又）　まつ女房出でよ。

浮線綾の表袴〇童女の盛服ヨ着る袴なり

と戯れて女童の姿など美しげなるを御覧ず。その女童どもまづ髪を切ぐ。いと愛らしげなる髪の末花やかヨ切ぎ渡して。浮線綾の表袴ヨ垂れ懸れるほど。鮮明ヨ見ゆ。源氏ハ紫ノ上ヨ。

（源）　君の御髪ハ吾切ぐん。

と言ひて。

（又）　いと多くも有かな。後々ハいかヨ長く生へん。

と切ぎ煩ひ玉ふ。

（又）　髪のいと長き人も。額髪ハ少し短くぞあるべきを。一向ヨ後れたる毛のなきや。かくてハ餘り情なからん。

千尋○髮の長かれと祝ふ詞なり

量りなき○其方の行末は何時までも我ぞかり見んとなり理髮の式は海松を用る例なり

千尋とも○君は千尋と祝ひ玉へと滿ち干る潮の如く定めなき君が心なれば保証せずとなり

乙殿○乙殿屋にて左右の馬場にあり騎射の時中少將の着座する所なり

源氏邂逅源典侍一

とて切ぎ終てゝ。

（又）千尋。

と祝ひ玉ふを。乳母少納言ハ。憐ゝ辱しと見奉る。

（源歌）量りなき千尋の底のみる總の。生ひ行ゝ末ハ我のみぞ見ん。

と申〳〵玉へば。紫〻上ハ。

（紫歌）千尋ともいかてか知らん定めなく。滿ち干る潮のたどけから

ぬゝ。

と紙ゝ書き付て居る樣。可愛ら〳〵きものながら。まゝ稚ゝ面白きを。源氏ハめでた〳〵と思す。

さて今日の物見車ハ。空所もふゝ立滿ちまけり。馬場の乙殿の邊ゝ。車を立て煩ひて。

（源）公卿の車ども多くて。物騒〳〵げなる邊かな。

とて暫時休息ひ玉ふほどゝ。よろしき女車の人多ゝ乘溢れたる中より。扇を差出して。御供の人を招ぎ寄せ。

（女）君ゝハ御車を此方ゝ立させ玉はぬか。いで此處避け渡〳〵申さん。

と申〳〵たり。源氏ハ如何なる好事者ふらんと思して。實ゝ物見ゝ都合よき所なれば。御車を挽き寄せさせ玉ひて。

果なしや○祭日を期して邂逅を待ちたるも君は人と同車して居る故にかひなしとなりあふひは葵る逢日をかけたり注連の内には○車の内には定めて

（源）何故に渡し玉へる所ぞ。事ゆかしとこそ候へ。

と言へば。女由緒ある扇の端を折りて。

（女歌）果なしや人の翳せるあふひゆゑ。神のふるしの今日を待ちけり。注連の中よ。

とある書を思し出れば。かの源典侍なりけり。いと淺ましく。年齢のほども知らぬ若々しき心かな。と餘りの憎さに。

（源歌）翳しける心ぞあだなおもほゆる。八十氏人なべてあふひを。

と言ひ遣り玉へば。典侍恥かしと思ひて。

（典歌）悔しくも翳しけるかな名のみして。人たのめふる草葉ばかりを。

と申しぬ。さて源氏は紫の上と合乘りて。車の簾をさへ上げ玉はぬを。嫉く羨しと思ふ女多有り。供奉の日の有様の端正かりしに引き替へて。今日は打解けて逍遥き玉ふ。人々は同車の女は誰ならん。定めて惡からぬ人なるべし。と推量り申す。源氏は好ましからぬ翳爭かな。と無興に思せど。源典侍のやうにも鐵面ならぬ人々も。合乘れる人あるに遠慮りて。果なき返歌も心安く申し交さんにもあらず。

御息所は物を思し亂るゝこと年比より多く添ひにけり。源氏の無情に思ひ果て玉へと。今更君に振り離れて遠く伊勢に下らんは。いと心細かる

よき人を居る玉ふべしと嫉むなり

翳しける○凡て多くの人に逢ふ日なればさやうになる恨み玉ひそといふ意也

悔しくも○あふひといふは名ばかりにて實なくさて悔しきとなり

六條御息所惱亂

べく又かくては外聞も人笑まならんこと〻思す。然りとて立ち留べく思し

なるまは。是までの事を殊の外まは皆思ひ朽すも安からず。釣する海士の

将ふれや。と起臥まは思し煩ふ故まや。心も浮たるやうまて悩ま〻〻思ひ

ぬ。源氏はかく御息所の伊勢に下らんとするを。懸け離れてよろ〻からぬ

事ふとゝも留め玉はず。たゞ

釣する海士の○河海抄に伊勢の海に釣する海士の将なれや心ひとつを定め兼ねつる

（源）數ならぬ吾身を見ま憂く思し棄んも道理なれど。今はいふかひ

なき吾身までも。なほ其儘まは見果て玉ひてんや。吾心の淺きにあらず。

と關係らひ申〻〻玉へば。御息所は定め兼つる心も。慰む方やあると立出

でぬ御禊河の荒かりし瀬まは。いとゞ万事物憂く思ひ入られたり。

御禊河の○車争の日をいふなり

葵上病二神經一

葵〻上は物怪めきて甚く煩ひ給へば。左大臣大宮を初として。皆々思ひ

歎くに。源氏は微行などはしたなき折なれば。二條院まも時々ぞ渡り玉

ふ。然はいへど。本妻とあるべき人の。今は懐妊の事さへ打添ひたる病悩なれ

ば。氣の毒まと思し歎きて。修法や何やなど我方まて多く行はせ玉ふ。物

怪生霊などいふもの多く出て來て。様々の名告りする中まは。他人まは更

まも移らず。唯葵〻上の身まばかりつと副ひたる様まて。特まは甚しく悩ます

事もふけれど。まく片時も離るゝ折なき物一箇あり。いみじき修験者ども

まも服はず。執念深き氣色普通の物まあらずと見えたり。さて大殿の方

までは。源氏の通ひ玉ふ處を此處彼處と思ひ當るまは。六條〻御息所二條

生霊○遊仙窟に窮鬼をいきすだまと訓みて註に人夢魂與鬼通とあり生者の霊に出るなり

紫ノ君などばかりこそハ。大切ニ思ひ玉ふ所なるべければ。嫉妬の執心も深からんと耳語きて。物などトへさすれど。それと猜して申し當ることもなし。物怪とても故意と深き葵ノ上の敵と申すもなし。死去し乳母だづもの〻靈。もしくハ父左大臣ニ仕へたるもの〻遺恨の遺傳りたるか。葵ノ上の弱ゝしく出で來るなど。旨々しからず亂れ現れる〻ニ。葵ノ上ハ唯つゝ〻と音も立てず泣きて。折々ハ胸を迫き上げつゝいみじゝ堪へ難げニ惑ふ業をすれば。かゝてハ生命も如何あらん。と親君達ハ忌々しゝ悲しゝ思し惶てゝけり。桐壺ノ院よりも御訪ひ問断なゝ。御祈禱の事まで思し寄らせ玉ふ樣の辱きニつけても。いとゝ惜しげなる葵ノ上の身の上なり。

御息所嫉ニ葵上ニ

源氏慰ニ問御息所ニ

六條ノ御息所ハ。かゝ葵ノ上をば世間普く惜み申すを聞くにつけても。一通ならず嫉妬と思さる。年來ハ嫉妬もかゝる程ニハあらざりしが。互の挑心を果なき所の車爭ニ起してより。御息所の心も甚く動きけるを。大殿の方にてハさまでも思しよらざりけり。さてかゝる御息所の物思ひの錯亂ニ心地のなほ例ならず思さるゝを。恰神事の折なれば。他所ニ渡りて修法ふどす。源氏ハ聞き玉ひて。如何なる心地ニかあらん。といと氣の毒ニ思ひ起ちて。訪問ニ渡り玉へり。例ならぬ旅館なれば甚く忍び玉ふ。意外の疎懶ふど罪宥されぬべく言譯し玉ひて。葵ノ上の病苦の有樣など憂へ言ふ。

（源）　自分ハさのみ深くも思ひ入れ候ハねど。親達のいといみじく思ひ惑ハるゝが氣の毒さに。かゝる間を見過して後。長閑に訪ひ奉らんとて。かくは疎遠くも仕りし。万事思し緩め玉ふ御心ならば。いと嬉しく候ふ。

など語らひ玉ふ。御息所ハ常よりも心苦しげなる氣色を君ハ道理と哀れに見玉ふ。打解けぬ曙に還り玉ふ源氏の姿の美しきにも。御息所ハなほ心引かれて。振り離れなんおとハ思しかへさる。さて御息所ハ葵の上にハ懷姙して。源氏の志を添ひ玉ふべきこと出で來たれば。その御心のやがて一方に鎮り玉ひぬんを。かやうに時々の訪問を。待ち申しつゝあらんも。い

と〳〵心のみ盡きぬべきことゝ。却て物思の驚さるゝ心地するに。源氏よりハ暮方に御文ばかりあり。

（源文）　葵の上の日頃少しハ宜しき樣なりつる心地の。俄にいと苦しげに候ふを。え見過し難くて參り兼ね候ふ。

とあるを。御息所ハ例の託言と見ながら。さすがに打捨て難くて。

（息歌）　袖ぬるゝこひぢとかつハ知りながら。下り立つ田子のみつからぞ憂き。　山の井の水も道理に候ふ。

と返詞あり。書ハ然るべき人の中にも勝れたり。と源氏ハ見玉ひつゝ。さても如何なる事ぞや。言ひ知られずもある世かな。と思ひ歎きて。心も容もそれ

袖ぬるゝ　○只我身から物思ふとて田植の女ともにたとへていふ　ひちは戀路に泥上をかけたり　山の井　○細

流抄に悔しくも汲みそめてけり淺ければ袖のみぬるゝ山の井の水とあり淺き契といふ意なり

淺みにや○其方は袖はかり濡るゝといふはまた心の淺きなり我は身まで濡れまさるとなり

御息所生靈

〳〵よ取捨つべき所もなく。また思ひ定むべきよあらざるを。心苦しく思ひ煩ひ玉ふ。御息所への御返事。日もいと昏くなりたれど。

（源文）袖のみ濡るゝやいかゞ。深からぬ御託言に候ふ。淺みよや人ハ下り立つ我方は。身もそぼつまで深きこひぢを。葵ノ上の病氣大方ならば。この御返歌自分參りて申すべきを。

などあり

葵ノ上よは物怪甚く起りて。いみじく煩ふ。御息所ハ。吾生靈。また故父大臣の御靈などいふものありと聞くに付けて思ひ續くれば。吾身一の憂き歎より外よ。人を惡かれと思ふ心もなけれど。物思ふよあくがれ出る魂

魂ハ。さやうよもやあらん。と思ひ知らるゝこともあり。年來万事よ思ひ殘すことなく過して。かやうよ心を碎くことハ今までなかりしを。果なき事の爭よ。人の吾を思ひ消〜無きものよ待遇す樣なりし御禊の後。一筋に憂しと思ひ枯れよ〜心地鎮り難く思ひ〜故よや。片時も打眠む夢よハ。葵の姫君と思しき人と。いと清淨なる所よ往きて。とかく引まさぐり。現よも似ず。猛く怒きひたぶる心出で來て打かなぐる。ふと見ゆるこゝ度重りよけり。御息所ハ心の中よ。あな心憂の事や。實よ心ハ身を捨てゝや往よけん。と現心ならず覺え玉ふ折々もあれば。然らぬ事よさへ。他人の爲よは善き事をば言はで。惡き事をのみ言ひ出る世の習なれば。況して葵ノ上の

身を捨てゝ○河海抄に身を捨てゝいにやしにけん思より外なるものは心なりけり

事ハ。いとも世ヨ言ひ成しつべき便なりと思すヨ。いと名立たゝ。現身の只管ヨ此世ヨ亡くなりて後ヨ。怨霊を殘すハ世の常の事なり。それさへ他人の身上ヨてハ罪深く忌々しきものを。現在の我身ながら。然る疎まゝき事を言ひ附けらるゝ宿世の憂きこと。何とやいはまし。もはや總て無情き源氏ヨハ。ゆかで心も懸け申さましと思ふ返へせど。思ふも物を思ふなりけり

思ふも○細流抄に思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はしやなぞ

齋宮ハ去年諸司ヨ入り玉ふべかりしを。様々障ることありて。此秋ヨ入り玉ふ。九月ヨハやがて野宮ヨ移り玉ふべければ。兩度の御祓の御禊。取り重ねてあるべきヨ。御息所の唯怪しく耄々しくて。つくづくと伏し惱み玉ふを。齋宮の司人どもいみじき大事ヨ思ひて。御祈禱など様々ヨ奉仕る。さて御息所の容体ハおどろ〳〵去き様ヨハあらで。そこハかとなく煩ひて月日を過ゝ玉ふ。源氏も常に訪問ひ申し玉へど。何ヨせよ本妻なる葵ノ上の。甚く煩ひ玉へば御心の暇なげなり。さて葵ノ上ヨハ。御産の事もまださるべき程ヨもあらず。と皆人の油斷したるヨ。俄ヨ御産の氣色ありて惱み玉へば。御祈禱の數を盡して。いと甚くとせさせ玉へれど。例の執念深き物怪一個更ヨ動かず。尊き驗者ども。不思議なる霊なりと持て惱む。されど物怪もさすがヨいみくく調伏せられて。葵ノ上ハ心苦しげヨ泣き詫びつゝ。

齋宮移ニ野宮一

野宮○齋宮の野宮ハ嵯峨有栖川にあり

源氏看二葵一
上病一

（葵）少し祈禱を緩べ玉へ。大將殿よ申すべき事あり。

と言ふ。驗者ども。さればよ。物怪の言ふべき事あるやうあらん。とて葵の上の居る。近き几帳の下よ源氏を入れ奉りたり。葵の上ハ此上もなき臨終の樣よ物〳〵玉ふを。申〳〵置かまほしき事もあるにや。とて父大臣も母大宮も少し退きたる。加持の僧ども。聲靜めて法華經を誦みたる。いみじく尊し。源氏ハ几帳の帷を引揚げて見玉へば。葵の上はいとをかしげよ。腹はいみじく膨脹れて臥したる樣。他人さへこれを見てハ心を亂るべきを。況して源氏は惜しく悲しく思すも道理なり。白き衣よ色合いと花やかなて御髮いと。長く曲りたるを引き結ひて打そへたるも。かく打解けた

る有樣よてこそ。可愛らしげよ嬌艶きたる方添ひて美しかりけれ。と君を見玉ふ。御手を執へて。

（源）あないみじ。心憂きめを見せ玉ふかな。

とて物も申さず泣き玉へば。葵の上は例ていと煩はしく恥しげふる目つきを。今はいと撓げよ見上げて。源氏を打目守り申す。涙の飜る樣を見玉ふは。いかよ哀の淺からんや。葵の上は餘り甚く泣き玉へば。源氏は氣の毒なる親達の事を思し。又葵の上の。吾をかく見るよつけて名殘惜しく覺え玉ふやあらん。と思して。

（源）何事もいとかやうよな思し入れ玉ひそ。さりとも病氣は程なく

宜しからん。たゞへ如何の様なり玉ふとも。後世まは必逢瀬あるなれば。重ねて對面ハありなん。父君も母君も深き契ある中は。廻つても絶えざる緣なれば。やがて相見るほどありなんと思せ。

と慰め玉ふに。葵、上ハ。

（葵）いでさやうの事まはあらず。身の上のいと困しきを。暫時修法を休息め玉へ。

とて源氏を呼び寄せて

（葵）かゝ君の參り來んとも更まに思ひぬを。物思ふ人の魂ハ。實まあくがるゝものまぞありける。

歎きわひ○浮かるゝ心を本心に返し玉へよといふ意なり

おたがへのつまとを下交の裾の義て見人魂歌とてたまは見つゝしけ誰とも知らねとも結ひとゝめつしたかへのつまとある

と懷しげまに言ひて。

（葵歌）歎き詫び空まに亂るゝ吾魂を。結び留めよ忘たがへのつま

と言ふ聲の氣色葵、上とも見えず。樣子變りたり。源氏ハいと怪しと思ひ廻すまに。唯かの六條、御息所なりけり。是まで御息所の生靈まに出で玉ふなと。淺ましとも人のとかく言ひ立つるを。口惡きものどもの言ひ出づることゝ聞惡と思ひて然ハあらじと言ひ消し玉ふを。今は現まも目前まに見すゝ。世まハ實まかゝる事もこそありけれ。と疎ましく成り玉ひぬ。あな心憂の事よと思されて。

（源）さやうに言へど。誰とこそ知り候ねね。判然に言へよ。

古き諺の歌に據りたるにてつまは夫にかけるり

葵上出産

と言へば。いよ〳〵御息所の有様なるよ。源氏ハ心の内よ浅ましき所か。人々近く參るさへなか〳〵よ傍痛く思さる。さて葵ノ上ハ。少し聲も静まりたれば。物の怪鎮る間もあるよやとて。母君の御湯持て寄せ玉へるよ搔き起されて。程なく御子生れぬり。人々嬉しく思すこと限りなきよ。他人よ祈り移〳〵たる物怪どもの。妬かり惑ふ氣色いと物騒がしくて。産後の事どもまたいと心配なり。言ふも愚なるまで願ども立てさせ玉ふ故よや。平よ出産はてぬれば。山の座主ふよくれと止むごとなき驗者の僧ども。祈を濟して爲たり顔よ汗押拭ひつゝ急ぎ退出でぬ。多人の心を盡しつる日頃の氣使少し打休みて。今ハさりとも別條もあるまじと思ふ。されど御修法などは又々始め添へさせ玉へど。まづハ御嫡子の誕生いと興ありて。珍しき御侍きよ。皆人心を緩べぬ。桐壺ノ院を初め奉りて。親王公卿殘りなき接どもの珍かよ嚴しきを。夜毎よ見騒ぐ。さて御子ハ男子よさへおはすれば。其分に應ての作法賑ハしくめでたし。

御息所ハ葵ノ上のかゝる有様を聞きて。妬嫉一通ならず。兼ねてハ病悩もいと危く聞きしを。平産よもあるふとよなと口惜しく思ひけり。怪しく吾よもあらぬ心地を思ひ續くるよ。衣裳ふとも祈禱よ燒きつる芥子の香よ染かへりたり。怪しきよ衣裳着替へて髮洗り試めど。尚同様よばかりあれば。我身ながらさへ疎ましく思ふよ。まゝてこの様を人の言ひ思ハ

接○禮記に國君世子生告二于君一接以二大牢一とありてうふやしなひと訓み註に接謂食其母一使二補虛強一氣也とあり

御息所自怪二吾身一

芥子○邪氣の祈禱には護摩に芥子を焚くなり

源氏看二護葵上病一

んことなど。他人は言ふべきことならねば。心一は思ひ歎くは。心ばかりはいとゞ怪しき方はのみ勝り行く。源氏は心地少し閑めて。葵の上の。御息所の生靈入り替り。淺ましかりしほどの問えず語りも心憂く思し出られつゝ。日頃經はけるも心苦しく。さりとてかゝる事のありしは。御息所と氣近くて相見んも。何となくうたてあらんを。さりながら御息所の爲はも氣の毒なり。と萬事は思して。御文ばかりぞありける。

かくて源氏は葵の上の甚く煩ひし餘波。親君を初め誰も忌々しく油斷なげに思ひたれば。道理まて御微行もなし。葵の上は尚いと煩らはしげはものみして居れば。源氏は例の樣まて。また對面も爲玉はず。若君のいと

忌々しきまで美しく見ゆる有樣を。今からいと樣別は待し侍き玉ふ樣一通ならず。左大臣は葵の上も出産ありて。源氏との夫婦は相應しく思ひ申すは。唯この病惱早く怠り果ぬを心る心地して。いみじく嬉しと思ひ申すは。唯この病惱早く怠り果ぬを心もとふく思へど。さやうはのこと甚しかりしは餘波はこそあるなれば。急は急らぬなるべしとて。さばかり心を惑はさゞりけり。源氏は若君の目つきの美しさふどの。いみじく春宮は似奉るを見玉ひても。まづ春宮を戀しく思ひ出でられ玉ふに忍び兼ねて。東宮は參り玉はんとて葵の上は。

（源）　内裏などへも。餘り久しく參り候はねば。心もとふくて。今日參るべく候へば。少しく氣近き程はて申さばや。餘り覺束なき御隔心かな。

と恨こ申〜玉へば。女房ども八實ゑ夫婦の御中なれば。さやうゑ艶ゑのこ隔てなどすべき事かハとて。葵〳〵上の臥〜たる所へ御座を近こ設けたるゑ。源氏ハ入りて物など申し玉ふ。葵〳〵上ハ時々返答申し玉ふも尚ゐと弱げなり。されど源氏ハ極めて亡き人と思ひ申せ〜有様を思ひ出づれば。恰夢の心地〜て物怪の忌々しかりし時の事など申し玉ふ序ゑも。かの極めて息も絶えたる様におはせしが。物の怪の入り替りて引返し。つぶ〳〵と言ひし事ども思〜出づるゑ心憂ければ。

（源）いざや申さまほしき事いと多かれど。其方のいと物嫌げゑ思したる様なれば。多こは申すまじ。

とて。

（又）御湯持て參れゑ。

などさへ看護ひ申し玉ふを。君ゑハかゝる事を何時習ひ玉ひけん。と人々哀がる申す。いと美〜げなる人の甚こ弱り損はれて。有か無かの氣色ゑて臥〜たる様。いと愛ら〜げゑも。又苦しげなり。髪の亂れたる筋もなこ。はら〳〵と懸れる枕の様など。またこなこ見ゆれば。源氏ハ心ゑ。年頃何を飽かぬことありて。疎々〜こハ思ひつらん。と怪〜きまで葵〳〵上を打目守られ玉ふ。

（源）院ゑ參りても。いと早こ退出なん。この様ゑ〜て覺束なからず見

秋の司召○春秋に叙任ありて春は縣官を任し秋は京官を叙す即諸司の

奉れば嬉〜かるべきを。母上のつと添ひおはするゑ。心なくやと遠慮して。何事も包みて過しつるも苦しければ。なほ追々ゑ心強く思〜成して。早く例の座所ゑこそ出て玉はめ。母宮の餘りゑ幼き人のやうゑ待〜玉へば。其が爲ゑ幾分かこの樣にて長くおはし玉ふなるぞ。ふど申し置き玉ひて。いと清げゑ裝飾〜て出で玉ふを。葵ノ上ハ平生ゑりは目を留め。見出して臥し玉へり。

さて秋の司召あるべき定めゑて。左大臣も内裡へ參るゑ。子息の君達も勞もて官を望む事どもありて。大臣を依賴て傍離れねば。皆引連れて出でぬ。殿の内人少なゑ寂莫なる程ゑ。葵ノ上は俄ゑ例の胸を迫き上げて。

任官を秋の司召といふなり

葵上卒去

除目○任官式の事なり

いと甚く惑ひぬ。内裡ゑ消息を申す程もなく絶え入りて。大臣を初め誰も〜足を空ゑて退出ぬれば。除目の夜なりけれどかく已を得ぬ支障なれば皆事破れたるやうゑて打さわぐ間ゑ。夜半ばかをなれば山の座主なにくれの僧達もえ請じあへず。かの病氣も今ハさりとも快からんと思ひ撓みたりつるゑ俄ゑかくなりければ淺ましくて。殿の内の人々物ゑ突き當り惑ふ。彼方此方の吊問の使など立込みたれば。悔みの詞もえ申〜次が次動り滿ちて。左大臣大宮を初め源氏など。いみじき心惑どもいと恐しきまでゑ見えたり。さて葵上にハ。物怪の度々執り入れさりしを思ひて。枕なども二三日其儘ゑ爲置きて見れど。漸々く容相も變り行くこぐもあ

れば今ハ限りと思ひあきらむる間。誰も〳〵いとゝいみじく哀し。源氏ハ哀しき事ゟ又悲しさを添ひて。世の中をいと憂きものゟ思し染みぬれば。普通ならぬ人達の御吊問ども〻凡て心憂しとばかり思さる。桐壺ノ院ゟも聞召して。思〳〵歎き吊ひさせ玉ふ樣。大臣ハ却りて面目らしく。憘しさをも交りて涙の暇なし。人の言ふゟ從ひて蘇生もやすると大願祈禱ども殘る所なく樣々ゟすれど。日を經るまゝゟ屍も損はれ行くを。見る〳〵盡せず思ひ迷へと。かひなくて日頃ゟなれば。如何ハせんとて鳥邊野ゟ持て行きて埋葬るほど。いみじく哀なる事多かり。此方彼方の送葬の人ども。寺々の念佛の僧など聚りて。其邊の廣き野ゟ空地もなし。院ハ申すも

更ふり。皇后の宮春宮などの御使。まゝハ然らぬ所々の使ども參り違ひて。此上もなき盛なる送葬のことを申すゟ。父大臣ハえ起も上らず。かゝる齡の末ゟ若く盛りの女ゟ後れて遙蛇ふことゝ。恥ぢ泣くを數多の人哀しく見る。終夜いみじく執行ひつる儀式なれど。いとも果なき遺骸ばかりを名殘まて。送葬の人々曉深く歸る。送葬の樣は何時もかくあるを。源氏ハ夕顔ひとりの外ハ數多見玉はぬことなればゟやあらん。類なく思ひ焦れたり。八月廿日餘りの有明なれば。空の景色も哀少からぬゟ。大臣の闇ゟ昏れ惑ひぬる樣を見玉ふも。道理ゟいみじく哀しければ。空をのみ詠められて。

昇りぬる○葵上を葬りたる煙の行方は分らねども凡て空の景色の物哀なるとゝよとなり

限りあれば○忌服令に依りて輕服を

（源歌）昇りぬる煙はそれと分かねども。なべて雲井の哀なるかな。

と詠みて。大殿まおはし着きても少しも眠まれ玉もず。葵ゝ上の年頃の有様をつゝくゝと思し出てつゝ。何とて終まは自然見直してんと長閑ま思ひて。等閑の所爲まつけても無情と思ひられたつけん。世を經ても疎く恥ゝきものま思ひて。終ま過ぎ果てぬる事よ。など後悔しき事多く思し續けらるれどかひなし。輕服つけ玉ふも夢の心地まして。我先たゞまゝかば。葵ゝ上は重服深く染めて着るならんと思すさへ悲しきや。

（原文）限りあれば薄墨衣あさけれと涙ぞ袖を淵となしける。

とて念珠し玉へる樣。いとゝ艶めかしさ勝りて。經忍びやかま讀み玉ひつゝ。法界三昧普賢大士と打言へる行法。老練たる法師よりは勝りて見ゆ。さて若君を見玉ふまも。何ま忍ぶのといとゝ露けゝれど。かゝる形見さへ無からましかば。如何ま悲しからんと思し慰む。母宮ハ悲哀ま沈みいりて。其儘ま起も上らず。命も危げま見ゆるを。人々またいかまと思ひ騒ぎて。祈禱などをぞする。月日も果なく過ぎ行けば。法事ふどそれ〳〵行ふも。是までハ誕生の御祝の營みに思ひ懸けざりしことなれば盡せずいみじゝ悲〳〵。大方の子まてさへ人の親は如何まおもふめるを。父大臣母宮の思ひ歎くは道理なり。且ハ葵ゝ上まハまた兄弟もあらで。寂〳〵さへ思ひつるなれば。袖の上の玉の碎けたりけんよりも淺ましげなり。

着れと我は涙に濡れ沈むとなり妻の服は三月にて輕服夫の服は一年にて重服なり

法界三昧○法界三昧は普賢菩薩の德なり大士は菩薩の一稱なり

何に忍ふの○後撰集に結ひ置く形

見の子たになかりせば何に忍の草を摘まゝし

源氏籠レ喪左衛門の司○齋宮八月に左衛門府に入りそれより野宮に移るなり

孤子○後に夕霧君といふ源氏の嫡子なり

時しも○細流抄に時しもあれ秋やは人の別るべきさるは夜寒になれる頃しも

御息所吊問源氏

人の世を○葵上の卒去を聞くに附ても君の歎を思ひ遣らるゝとなりきく菊

源氏の大將ハ二條院にさへ假初にも渡り玉はず。葵の上の事のみ哀に心深く思ひ歎きて。行法を眞實に爲し玉ひつゝ明し暮し玉ふ。忍び玉ふ方々へハ御文ばかりぞ遣し玉ふ。かの御息所ハ齋宮の左衛門の司に入りさるに。まして源氏の葵の上の忌服あれば。いとゝ齋しき潔齋に託けて。源氏の方へハ文言だに通はせ玉はず。源氏ハ引續きての不幸に憂しと思ひ染みに世も凡て厭ハしくふり玉ひて。孤子の羈絆だに添はぞらましかば。發心にてもせまほしと思すに。まつ紫上の物寂しくてあらん有樣ぞふと思ひ遣らるゝ。さて源氏ハ夜ハ几帳の内に獨臥し玉ふに。宿直の女房達ハ几帳に近く廻りて侍へど。傍寂しくて。時々もあれど寢ざめがちなるに。聲勝れたる僧ども撰び侍ハせ玉ふ。念佛の聲曉方など忍び難く。深き秋の哀勝り行く音身に染みけるかな。と源氏ハ是まで習はぬ獨寢に明し兼ね玉ふ。曙の霧渡れるに。菊の咲きかけさる枝に。濃き青純の紙なる文附けて。使の差置きて往にけるを。今めかしくもあるかな。とて取りて見玉へば。御息所の書なりけり

(息) 潔齋に關係ひて。久しく申上げぬ程ハ知り玉ふらんや。人の世を哀ときくも露けきに。おくるゝ袖を思ひこそやれ。只今のそらに思ひ餘りて。かくは申上げつるにぞ。

と平常よりも優にも書き玉へるかな。と君ハさすがに打置き難く見玉ふ物

にかけたり

源氏返書御息所

の。折柄無情の訪問よと心憂く思す。さつきて搔き絶えて音なひ申さゞらんもいとほしくて。御息所の名の朽ちぬべきことを氣の毒よ思し亂る。過まし人ハとてもかくても然るべき定業まてこそはありけめ。何の爲よ御息所の生靈を判然よ見聞きけん。と悔〳〵きハ我心ながら尚御息所をば憐よ思し直すまじきふるべし

源氏ハまた葵〻上の喪よ居玉へば。齋宮の潔齋よ事煩しくやあらん。と久しく思ひ煩ひ玉へと。御息所より殊更よ音づれ申したるを。返事なくては情なくやあらんと思して。紫の鈍める紙よ。

（源文）　こよなく程經侍りけるを。拙者の心よは思ひ忘れずながら。

留る身も○消ゆるも留るも同じ露の身なれば葵上の事なと歎くも果なき業なりとて御息所の生靈に現はれて執着の深きは果なき事なりといふ意を含ませたるなり

服中よて慎ましき程は更よ思し知り玉ふらんや。とてかくは認め候ふ。留る身も消え〳〵も同し露の世よ心おくらん程ぞ果なき。且ハ思し消し玉ひてよ。今穢ハしければ御覽ぜずもこそあれ。

と書きて遣し玉へり。御息所ハ六條の里亭よ居る程ふりければ。忍びて見るよ。君のそれとほのめかし玉へる氣色を。我靈よ出でたるは眞なりけるよ。と心の鬼よ著く見て。されば〻よと思すもいと甚じ。尚いと限りなき身の憂さなりけり。かやうなる風聞ありて。院よも聞召〻なば如何よ思さん。故前坊ハ院と同し兄弟といふ中よも。殊更よ思ひ交させ玉ひて。前坊よりこの齋宮の事を懇よ院よ申し上げ玉ひ〻かば。御息所をば前

坊の代りまもやがて見扱ハんなど。常に勅てやがて内裏住せよと。屢〻中
―玉ひ―をさへ。御息所ハいとあるまじき事と思ひ離れましを。かゝ源氏
と契合ひ。意外に若々しき物思をして。終に浮名をさへ流―果つべきこ
とゝ思し亂るゝ。尚平生の心ゝもあらず。さハさりはがら。御息所ハ大方の
世まつけて。心深く由緒ある評判ありて昔より名高あれば。諸司より野
宮への移從の程まも。風流に當世めきたる事多く爲―て。殿上人ども好
色しきなどハ御息所まも心を寄せて。野宮まも朝夕の露分け徘徊を其頃
の役まぞする。なと源氏ハ聞玉ひて。そは道理ぞかし。由緒〻〻ゑき方ハ
飽まで備はりたるものを。もし世の中を厭ひ果てゝ田舍まも下り玉ひなば。

正日○正日は四十九日の事をいふ

頭中將慰二問源氏一

祖母殿○うば殿といふ意にて年老いたるといふ戯言なり

いと寂寞しくもあるべきかな。とかの生靈ハ疎―くも思ひながら。さすがま
戀しくも思されけつ。
葵ノ上の法事などハ過ぎぬれど。源氏ハ正日まで尚籠りおはす。是まで習
慣ぬ御徒然を。三位ノ中將頭中ハ氣の毒がりて。常ま參りつゝ世間の物
語など眞實なるをも。又例の妄がまし―き事をも語合つゝ慰め申すま。かの
源典侍ぞ打笑ひ玉ふ種子こハふるべき。源氏ハ
（源）あふ氣の毒や。祖母殿の上をば。甚くな輕め玉ひそ。
と諫め玉ふものゝ。毎ま可笑と思―たり。かの常陸の宮まて十六夜の月
のさやかなりし秋の事なと。または其外樣〻の情事ども。互ま隈なく

雨となり雲とや○劉禹錫の詩に有所嗟二首庚今樓中初見時、武昌春柳似二腰支一、

言ひ顯し玉ひて。果々ハ無常なる世の事を言ひ〳〵て。打泣きなと爲玉ひけり。時雨して物哀なる暮方。三位中將鈍色の直衣指貫薄らかゝ更衣して。雄々しく鮮明ゝ心耻しき樣〳〵て參りたり。君ハ西の妻戸の勾欄ゝ押懸りて。霜枯の前栽を見玉ふ程なりけり。風荒らかゝ吹き。時雨さつと〳〵る程。涙も競ふ心地して。

（源）雨となり雲とやなりけん今ハ知らず。

と獨言ちて頤支つき玉へる樣。この君を夫ゝ持ちてハ亡くならん女の魂ハ必留りなんと中將ハ色めかしき心から打目守られつゝ。近く手を突居たれば。源氏ハ忘どけなく打亂れたる樣ながら。直衣の紐ばかりを差直〳〵玉

相逢相失雨如レ夢、爲レ雨爲レ雲今不レ知、また鄂渚濛々煙雨微、女郎魂逐二暮雲一歸、只應三長在二漢陽渡一化作二鴛鴦一一隻飛

雨となり○源氏の只應長在漢陽渡を誦したるを受けて葵上

ふ。さて君ハ喪中なれば。また更衣も爲玉ず。今少し濃細なる夏の直衣ゝ。紅の艶やかふるを引襲ねて。瘦れ玉へる御姿。見ても飽かぬ心地ぞする。中將もいと哀なる眉ゝ空を詠めたり。

（頭歌）雨となり忘ぐるゝ空の浮き雲を。いづれの方とわきて詠めん。

と獨言のやうゝいふを。源氏ハ

（源歌）見〳〵人の雨となりゝし雲ぬさへ。いとゝ時雨ゝかきくらす

ころ。

と言ふ御氣色も。淺からぬ程著く見ゆれば。中將ハ源氏の年頃ハ葵ノ上ゝ心深くもあらぬを。院などの教誡め勅ハせ。又左大臣の待遇の一通なら

の行方は何處とも定め難しとなり

見し人の○葵上は八月に失せたりしがはや十月ばかりになりけるよとて雨と時雨とを分けて追悼の意を述べたり

龍膽○和名抄に龍膽和名えやみぐさとあり

ず。大宮の取扱様々なるなど方々差合ひたれば。え振捨がゝく物憂げなる御氣色ながら。表面ばかりの御志まて通ひ玉ふならん。と氣の毒ま見ゆる折々ありつるを。今君の愁傷の著しき様を見奉れば。眞實まやむごとなく重き方ハ殊ま深く思ひ申し玉ひけるならん。と見知るまハいよ〳〵妹葵ノ上をあたら惜しくぞ思ひぬ。さて萬事まつけて葵ノ上の居らぬは光失せたる心地して屈し痛がりけり。龍膽撫子などの咲出てたるを。源氏ハ折らせ玉ひて。頭中將の立去りたる後ま若君の乳母宰相の君して大宮ま。

（源歌）草枯の籬ま殘る撫子を。別れし秋の形見とぞ見る　匂劣

草枯の○若君夕霧を葵上の形見と見るとて撫子の花またとへていふ

今も見て○形見の若君を見て却て愁に堪へずとなり

源氏贈二歌朝顔姫君一空の色○鈍

てや御覽ぜらるらん。

と申させ玉へり。實ま若君の何心なき御笑顔ぞいとゞしく美くしき。大宮ハ吹く風まつけてさへ木葉より勝りて脆き涙ハ。まして源氏の音信ま堪へずして取あへず。

（大歌）今も見てなか〳〵袖を腐すかな。垣ほ荒れまし倭撫子。

今日の哀の慰まハ。朝顔の君ふらではかひある返事など申すべき人もあらじ。と推はからるゝ心ばへなれば。源氏ハ暮方なれど御消息を朝顔の宮ま申遣り玉ふ。絶間遠けれと然うあるものま成りつけたる御文なれば。咎なくて。女房ども姫君ま御覽ぜさす。空の色〳〵たる唐の紙ま。

色にて服者の用ゐる色なり別きて○是まて多くの秋は經たれども別けて今年の秋は哀しとて奏上の愁傷の折に合せて朝顔の無情を述へたり

いつも時雨は○河海抄に神無月いつも時雨はふり

（源）別きて此暮こそ袖ハ露けゝれ。物思ふ秋ハ數多經ぬれど。いつも時雨も。

とあり。御書などの心留めて書き玉へる。平生よりも見所ありて。折柄見過ぐし難き程ふる。と女房ども、申し自分も思されければ。

（朝）君の御心はさこそと思ひ遣り奉れとも思ふ心をばえやはとて。

（朝歌）秋霧ふ立後れぬと聞きしより。ぞ空もいかゞとぞ思ふ。

とばかり書きたり。微なる墨つきまて。その思成しいと心憎く奥ゆかし。何事ふつけても見勝りするは難き世なるべきを。槿君や藤壺などの無情

しかとかく袖ひつる折はなかりきとあり

えやは○細流抄に色ならはうつるばかりもそめてまし思ふ心をえやは見せけり

秋霧に○君の奏の上に後れ玉ひぬと聞きてよりは雨ふる哀なる折をいかふ過き人をこそなか〳〵ふ憐ふ覺え玉ふハ。源氏の御心の癖なれ。無情ふから然るべき折々の哀を過〳〵玉もぬを。これこそ互ふ情も見えつべき業なれ。尚由緒あり過ぎて人目ふ見ゆばかりなる六條ノ御息所の如きを。餘ふの難も出て來けふ。されば君ハ紫ノ上をばさやうふハ生ふ〳〵立てじと思す。さて紫ノ上は今頃ハさぞ徒然まて我を戀しと思ふらんと忘るゝ折なけれど。唯母親なき兒を置たらん心地して。見ぬ程も我を後目たく思ひて恨むことあるまじと思ふばかりぞ心安き業なふける。

日も暮れ果てゝぬれば。燈臺近く參らせて。大殿ふ侍ふ限りの女房ども。御前ふ召して物語ふゞせさせ玉ふ。中納言ノ君といふハ年頃忍び思しゝが

し玉ふらんとなり

源氏哀二諭大殿女房一見馴れ○細流抄にみなれ水のみなれそなれて離れなば戀しからんや戀しからじや

と。此頃の御思のほどは。なか〳〵さやうなる好色の筋まも掛け玉ハず。中納言ハ哀なる御心かふと見奉るに。大方まも懷しと打語ひ玉ひて。

(源) 吾妻の生きての世ま勝りて。此服の程ハ久しくこゝま居れど。誰も〳〵思紛るゝ方なく見馴れ〳〵て。さて此後打離れてかやうまも相見ずば戀しからじや。ゆみじく悲〳〵き事ハ然るものなれど。唯惣て打思ひ廻すこそ堪へ難きこと多かりけれ。

と言へば。女房ども皆泣きて。

(女) 言ふかひなき御事ハ。唯搔き暮す心地し候へば。悲〳〵きハ然るものとしても。今より君の打絶えて。名殘なき樣まあくがれ果てさせ玉

命まそ○古今集に命だに心に叶ふものならば何か別の悲しからまし

あて君○女

ハん程を思ひ候へば

なと申しもやらず。源氏ハ哀とばかり見渡〳〵玉ひて。

(源) 何とてさやうま名殘なく打絶えん。いと心淺くも執り成す事かな。吾妻ふくとも心長く待ふ人さへあらば。長く見果てなんものを。命こそ果なけれ。

とて燈火を打詠め玉へる目緣の。打濡れ玉へる程そ美しき。故葵ノ上の取別て可愛がりし少き童の。親どもなく葵ノ上まも離れて。いと心細げま思へるを道理と見玉ひて。

(源) あて君は。今ハ我をこそ葵ノ上と思ふべき人なるべけれ。

童の名なり

萱草色○柑子色に似たるものにて服者の用る色なり

と言へば哀しく思ひていみじく泣く。短き袖他人よりハ黒く染めて。黒き汗衫萱草色の袴など着たるも面白き姿なり。

（源）昔を忘れぞらん人は。徒然を堪忍びても。跡ハ殘り〳〵幼き兒を見捨てず待し玉へ。在りし世の名殘なく人々各自散別れなば。便なさも愈勝りぬべくやあらん。

など皆人心長く堪忍すべき事ども言へど。女房どもハ。いてや君ハ何と言ふとも。葵ノ上のおはせし時のやうにハ入りまさで。待遠ハやふり玉ハんと思ふ。いとゝ心細し。さて大殿まてハ侍ふ人々の分際々々まつけつゝ、果ふき玩弄物ども。又ハ眞の形見なるべき遺物など。故意とならぬ樣ハ執

成しつゝ。皆それ〳〵配分らせけり。

四十九日も漸く果てぬれば。源氏ハかくてばかりも。いかでかハ熟々と月日を過し玉ん。とて。院へ參り玉ふ。まつ御車差出して。前駈なと參り集る程。折知り顔なる時雨打灑ぎて。木の葉誘ふ風惚忙〳〵吹拂ひたるハ。御前ハ侍ふ人々いとゝ物心細く日數も過行て愁歎も少し間あり つる袖ども。復濕ひ渡りぬ君ハ今夜ハ其儘二條院ハ宿り玉ふべし。とて大殿ハ侍らひたる人々ハ。やがて二條院まて待ち申さんとふるべし。各自大殿を立ち出つるハ。強今日よりこゝを振捨て玉ふべきハもあらぬこれども。まゝとなく物哀し。左大臣も大宮も源氏の出で玉へば。今日の寂しき

源氏消息
大宮

景色ゆまゝ悲〳〵さ改めて覺ゆ。君よりハ。大宮ゟ御消息申し玉へり。

（源）院より覺束なかり宣はすゟより。今日參り候ふ。假初ゟ立出で候ふつけても。今日まで存在へ候ひけるよ。と妄心のみ動きてぞ。申上んも却りて物催ゟ候へば。其方ゟも參り候はぬ。

とあれば。大宮ハいとゝ〳〵く涙ゟ目も見えず泣き沈み入りて。御返事もえ申さず。左大臣ぞやがて源氏の方へ渡りたる。いと堪難げゟ思ひて。御袖も引放たず。この樣を見る人々もいと悲〳〵。源氏は果ふき世を思し續くるこゝいと樣々まて。泣き玉ふ樣哀ゟ心深きものながら。いと樣よく艶めき玉へり。左大臣ハ涙ゟ咽び猶豫ひて。

右大臣訪
源氏

（左）年齡の積りゟは。さうもあらぬ事につけてさへ涙脆き業ゟ候ふを。まして涙の乾る世なゝ思ひ惑ハれ候ふ心をえ鎭め候ハねば。人の見る目もいと妄がはしゝく。心弱き樣ゟ候ふべければ。院などゟもえ參り候ハぬふり。事の序ゟハかゝ院參仕らぬ次第をさやうゟ爲〳〵奏せさせ玉へ。幾許もあるまじき老の末ゟ女ゟ打捨てられたるが辛くも候ふかな。と強ひて思ひ鎭めて申す氣色いとわりなし。源氏も度々鼻打かゝて。

（源）後れ先つ程の定めなきは。浮世の習ゝ見知りながら。眼前ゟ差當りて覺え候ふ心惑は。類あるまゝき業ゟ候ふ。院ゟも其方の有樣奏し候らハんゟ。兼ねて此事推量らせ玉ひてあらん。

と申し玉ふ。

（左）　然らば時雨も間なく降り候ふを。暮ぬ程は參り玉へ。

と勸め〳〵申す。源氏ハ立出で玉ハんとて。家の内を見廻〳〵玉ふは。几帳の後障子の彼方なとの明け通〳〵たる所なとは。女房三十人ばかり押籠りて。濃き薄き鈍色の服どもを着つゝ。皆何れも甚しく心細げなて。打萎れつゝ集り居たるを哀と見玉ふ。左大臣は

（左）　君はハ思〳〵捨つまじき幼き人も留り玉へれば。母ハ居らずとも。事の序には立ち寄らせ玉ハしやはなと慰め候ふを。偏に思遣りなき女房などハ。君は今日を限りは思し捨つる故郷と思ひ屈して。葵ノ上は長く別れぬる悲みよりも。唯時々君は馴れ仕奉る年月の名殘なかるべきを歎き候ふやうなるぞ道理なる。君ハ葵ノ上と打解けおはしますことは候ハざるつれど。さりとも終はかやうなてばかりはあるまじ。と當な頼みし候ひつるを。今よりハ實はこそ彌心細き夕は候へ。

と申〳〵ても又泣きぬ。源氏ハ

（源）　いと淺はかなる人々の愁歎はも候ふかな。葵ノ上の今ハ誠は如何なるとも。終はは打解け玉ハんと心長く思ひつる間ハ。自然目離るゝ折も候ひつらんを。今ハ却て何を頼みてか息り候ハん。今御覽じ玉ひてん。

左大臣哀二源氏空室一

舊枕舊衾○

とて出で玉ふを。左大臣ハ見送り申して。曽て源氏の住ミ玉ひ一室ヨ入つて見れば。凡ての裝飾より初めて。葵ノ上のこの世に在りし時ヨ變る事なけれど。今ハ源氏さへ居玉ハねば。空蟬の空しき心地ぞする。御帳の前ヨ硯など打散して君の手習ひ捨てたる反古を取りて。目を絞りつゝ見るを。若き人々ハ悲しき中ヨも。大臣の餘りなる愁傷の樣を見て含笑むもあるべし。哀なる故事ども唐詩も和歌も書き汚しつゝ。草書ヨも眞書ヨも樣々珍しき樣ヨ書き混ぜ玉へり。左大臣ハ勝れ玉へる御書やと空を仰ぎて打詠む。葵ノ上も亡くなりたれば。今ハ源氏を他人ヨ見奉りなさんがいと惜きなるべし。さて舊枕舊衾誰と與ヨかとある所ヨ。

長恨歌ヨ鴛鴦瓦冷霜花白舊枕舊衾誰與共とあり

なき魂ぞ○昔の床の離れられぬに就て亡魂の悲しきとなり

君なくて○共に寐る人もなく古床に幾夜を明すとなり

（源歌）なき魂ぞいとゞ悲しき寐床の。あくがれがたき心ならひヨ。

また霜の花白しとある所ヨ。

（又）君なくて塵積りぬる床夏の。露打ち拂ひ幾夜寢ぬらん。

一重の花なるべし。撫子の枯れて交れるを左大臣ハ大宮ヨ見せて。

（左）是非もなき事ながら。かゝる悲しき類ハまたと世ヨあるまじ。と思ひ成しつゝ。宿因ハ長からでかゝ心を惑はすべきヨこそありけめ。と却りて前世を辛く思ひ遣りつゝ思を覺し候ふを。唯日數經るヨ添ひて葵ノ上の戀しさの堪へ難きこと。この大將の君の今ハ他人ヨ成り玉はんことぞ。飽かず甚だく思へらるゝ。葵ノ上の在りし折ヨ。一日二日も大

源氏參レ院

将の見え玉ハずして。時々まおハせしをさへ飽かず胸痛く思ひしを。今ハ朝夕の光失ひてハ。ふかで此身も長在べふとあらん。

と聲もえ忍びあへず泣くに。前に侍る大人々〳〵き老女ふど。いと悲〳〵くてさつと打泣きたる。そぶろ寒き夕の景色なり。若き女房ども所々まに群居つゝ。已が同志哀なる事ども打語らひて。

（女房）大将の君の思し言はするやうま。若君を見奉りてこそハ心も慰むべけれと思ふも。いと果ふき御形見まこそ候へ。

とて各暫時退出て參らんといふもあれば互ま別惜むほど。各自哀なる事ども多有り。源氏ハ院へ參て玉へれば。院ハ君ま

源氏參二中宮一

（源）いと甚く面痩まけて。精進まて日を經る故にや。

と氣の毒さうに思召して。御前まて物など賜へて。こやかうやと思し扱ひさせ玉へる樣。哀ま辱し。また君ハ藤壺、中宮の方ま參り玉へれば。女房ども久〳〵ぶりなれば珍しがて見奉る。中宮まハ命婦、君〳〵て。

（藤）葵、君の亡せ玉ひて後ハ。思ひ盡せぬ事ども。程經るま付けてもいかま悲しく思ずらん。

と御消息申させ玉へり。源氏よりハ。

（源）無常き世ハ大方まも思ひ知てましを。今度目ま近く見候ひつるま。世を厭ハしく思ひ亂れしも。幸ま度々の御消息ま慰め候ひて。

今日までも存在へ候ふ。

とて然らぬ折まさへ藤壺へは常よ君の心盡しぬれば。今ハまゝて愁歎を取添へて。いと心苦しげふり。さて君ハ無紋の袍に鈍色の下襲を着けて。纓巻き玉へる痩れ姿花やかなる御粧飾よりも艶めかしさ勝り玉へり。

纓巻き○服者は冠の纓を巻きおく例なり

（源）春宮よも久しく參らぬぞ覺束なき。

ふど申して。夜更けて二條院へ退出で玉ふ。二條院よてハ院中を掃ひ磨きて。男女とも源氏を待申したり。上臈ども皆參りて。我も〳〵と粧飾して懸想しさるを見るよ附ても。大殿の女房達の否み屈したりつる氣色どもぞ。君ハまつ哀よ思ひ出でられ玉ふ。御裝束着替へて。西の對屋

よ渡り玉ふ。紫ノ上の方よては。更衣の粧飾奇麗よ見えて。若き女房女童の成形。見よく整へて。少納言が萬事よ汰したる樣心もとなき所なく奥ゆかしと見玉ふ。紫上はいと美〳〵引繕ひてぞ居る。

（源）久しく相見ぬ程よ。いと此上もなく成長玉ひよけり。

とて小き几帳引き擧げて見玉へば。紫上ハ側向きて恥らひたる樣。我意よ足らぬ所なし。火影の側目頭つきなど。唯心を盡すかの藤壺の風貌と違ふ所なくも成り行くかな。と見玉ふいと嬉し。近く側よ寄り玉ひて。

（源）覺束なかりつる程の事ども申して。葵ノ上の一條など長閑よ申さまほしけれど。忌々しく覺え候へば。暫時は別方よ休息ひて參り

來ん。今よりハ朝夕問絶なと見奉るべければ。却てうるさくさへや思さ

れん

と語ひ申〜玉ふを。少納言ハ嬉しと聞くものながら。尚危く思ひ申す。さて君は御息所の如きやんごとなき忍び所。なほ多く關係ひ玉へれば。まゝ煩しきや。されば。葵ノ上の後に。又重々しき北方や立代り玉ハんと思ふぞ。いと憎き心なる。君ハ吾室なる東の對屋ゟ渡り玉ひて。女房中將ノ君といふゟ。御足なと撫摩せ玉ひて。御寢りぬ。翌朝ゟハ若君の許ゟ御文遣〜玉ふ。乳母などの哀なる御返事を見玉ふゟも。盡せぬ事どもばかりありいと徒然ゟ詠め勝ふれど。何となき御微行も物憂く思〜成りて。さる

篇繼○孟津抄には篇突また篇築とあり字の篇を繼き合はする勝負事あり

源氏 始與二紫上一婚

事ハ思ひ起ちもせず。紫ノ上の萬事思ふ通りゟ生整ひはて〜。いと美しくばかり見え玉ふを。はや夫婦としても似げなからぬ程ゟ見成〜玉へれば。それと氣色ばみたる事ゟと折々申し試み玉へど。紫ノ上ハ見も知らぬ樣子なり。徒然なるまゝに。唯紫ノ上の方ゟて碁打ち篇繼きなと〜玉ひつゝ日を暮〜玉ふゟ。紫上ハ心ばへ愛嬌づき。果なき戯事の中ゟも。美しき筋を爲出づれば。また男女の道を思ひ放ちたる幼少き年月こそ。唯然る方の愛ら〜きばかりハありつれ。今ハ何となく忍び難くなりて。また女君の爲ゟも氣の毒なれば。如何爲玉ひけん。さて源氏ハ常ゟ紫ノ上ゟ睦び玉へば。新枕〜玉ひし差別見別くべき交情ゟもあらぬゟ。男君ハ早く起き玉ひ

て。女君ハ更ゑ起き玉ハぬ朝あり。女房どもハ如何なればかくおはしますらん。御心地の不例ゑ思さるゝにやあらん。と見奉り歎くゑ。源氏ハ吾方へ渡り玉ふとて。御硯匣を御帳の内ゑ差入れて出玉ひまけり。人の居らぬ程ゑ紫ノ上ハ漸く頭を擡げたれば。引結びたる文硯匣ゑ添ひて枕下ゑあり。何心なく引披けて見れば。

（源歌）　あやなくも隔てけるかな夜を重ね。さすがまなれし中の衣を。

と書きすさびたるやうなる。紫ノ上ハ源氏のかゝる心おはすらんとは懸けても思ひよらざりしかば。何とてかく心憂かりける御心を隔なく頼しきものゑ思ひ申しけん。と淺ましく思ふ。晝方源氏ハ。紫上の方へ渡り玉ひて。

あやなくも　○前々ゑり馴れしものを今まで新枕せぬ事のあちきなかりしとあり

（源）　惱しげゑ爲玉ふらんハ。如何なる御心地ぞ。今日ハ碁も打たで寂しくやあらん。

と言ひて窺き玉へば紫ノ上ハ花なほ〳〵衣を引被ぎて臥し玉へり。女房ども退きつゝ侍へば。源氏ハ側ゑ寄りて。

（源）　何とてかくはいぶせく待遇し玉ふぞ。思の外ゑ心憂くおもすことよ。他人も定めて怪しと思ふべきを。

とて紅衾を引遣り玉へれば。紫上ハ汗ゑ浸されて。額髪甚く濡れたり。

（源）　あなうたて。是ハ忌々しき業ゑ。

とて萬事ゑ諭し申し玉へと。紫上ハ眞ゑいと辛しと思ひて。少しも返答

せず。

（源）よし〳〵。さやうまてハ今より更ゐ此方へハ參らじ。いと恥し。ふど故意と怨じ玉ひて。硯匣を開けて見玉へど。返歌もなければ。まだ若き御心有樣や。と愛らしく見玉ひて。終日入り居て慰め申し玉へど。更ゐ解け難き氣色いとゞ愛らしげなり。其宵亥子の餅參らせたりまた葵の上の喪中の程なれば。表向ゐハあらで。紫の上の方へばかり面白き檜破籠などゐ色々に詰めて持て參れるを見て源氏ハ南の方ゐ出で惟光を召て

（源）此餅かく數々ゐはあらで唯一色ほどを明日の暮ゐ此方へ參らせよ。今日ハ忌々しき日ふりけり。

献二亥子餅一
亥子の餅○群忌隆集に十月亥日作り餅食し之使レ人無レ病とありて十月亥日ゐは餅を作る例なりこれを亥子の餅といふ

新枕の事○新枕には三箇夜の餅の禮あり
子の子○亥子の次日ゐれゞ子の子と惟光戯れいへるなり

と含笑て言ふ氣色を。惟光ハ心敏きものなれば。新枕の事をふと思ひ寄りぬ。されば故意と慥ゐも承はらで。

（惟）實に愛敬の初ハ。日擇して食すべき事ゐ候ふ子の子ハ幾箇仕ふまつらすべく候ハん。

と真實だちて申せば。

（源）三か一かまてあらん。

と言ふを。惟光ハ心得はて〻立ちぬ。君ハ惟光をいと物馴れ樣やと思す。惟光ハ人ゐも言はで。手自といふばかりゐ私宅ゐてぞ作り居たりける。君ハ紫の上を諭し託びて。今ハ始めて偷ミ持て來らん心地するも。いと愉快く

惟光持二參祝餅一

香壺の匣○諸の香を入る器あり三夜の餅を何

思ひて。是まで新枕せぬ前に憐と思ひつるは今は思ひ比ぶれば實は片端にもあらざりけりと思す。人の心こそうたてなるものなれ。源氏ハ葵ノ上に別れて後は。偏に紫 上に心移りて。今ハ一夜も隔てんことのわびをかるべきことゝ思さる。命せ言ひし餅 惟光甚く夜更かして忍びて持て參りたり。惟光ハ少納言を大人しくて恥しとや思ハん。と思遣り深く心遣して。少納言の女の弁といふものを呼出て。

（惟）これを忍びて參らせ玉へ。

とて香壺の匣を一箇差入れて。

（又）慥に御枕上に參らすべき祝賀の物に候ふ。あなかしこ。疎略にな

となくこれに入れたるなり

爲玉ひそ。

と言へば。弁ハ怪しと思ひて。

（弁）疎略なる事ハ。まだ習はぬものを。

とて請取れば

（惟）實に今ハさるあだなどいふ文字忌ませ玉へ。さやうの事ハよもや其方にハあるまじけれど。

といふ。弁ハまだ若きものにて。何事とも深くえ思ひ寄らねば。かの匣を何心なく持て參りて。御枕上の几帳より差入れたるを。君ハ何事も例の通り紫ノ上に教へ玉ふなるべし。人ハえ知らぬに。翌朝早く此匣を下げさせ

女房悟二紫上新婚一
華足○物を載する臺なり

玉へるよそ。近く侍ふ親しき限りの女房ども。さて、新枕ありけるよと思ひ合することゞもありける。餅の皿ども何時の間よか爲出てけん。華足などいと清らよして。餅の樣も事更ていと面白く調へたり。少納言ハ嫁娶などの差別もなく。何時ともなくてあらんと憂よ思ひ居たるよ。かやうの事まで御意の注きたる御心ばへ。憐よ辱くてまつ嬉しく涙も翻れぬ。少納言はさても内々に我等よも仰言あれかしな。かの惟光の如何よ思ひつらんと私語き合へり。かくて後ハ。源氏ば内裡よも院よも暫時參り玉へる程さへ靜心なく紫上を面影よ思ひて戀しければ。怪しの心や。と自分ながら怪しく思さる。是まで忍びて通ひ玉ひし方々よりは。何れも問絶を

朧姫暮二源氏一

恨しげよ注意し申しなどすれば。いと氣の毒と思す方もあれど。新手枕の氣よ掛りて。夜をや隔てんと思ひ煩ハるれば。餘所へおはさん事ハ物憂く惱しさうよばかり持成し玉ひて。此頃いと憂く覺ゆる世の程を過し玉ふ。人よも逢ひ奉るべきさばかり答へ玉ひつゝ過し玉ふ。

御匣殿朧月夜内侍の尚ふの源氏の大將よばかり心を注けつるを。父の右大臣ハ。

（右）實にかくやんごとなかりつる葵、上も失せ玉ひぬるを。さても又此君を聟よしてあらんよ。何とて口惜しからん。

ふどいふを。弘徽殿、太后ん聞きて心よいと憎しと思ひて。かの御匣殿を

早く宮仕まても出したらんには。何とて惡しからん。とて急き内裡ゑ參らせ奉らんことを思ひ勵む。君も御匣殿を普通の樣まは覺えぎりしかば。かくてハ口惜しと思せど。唯今の所まてハ。偏ゑ紫ノ上まばかり心寄りて。別樣ゑ分かる御心もなく。何とてかくばかり短かる世ゑ廣く心を關係らもん。かくて先ハ紫ノ上ゑ思ひ定まりなん。今ハ好色の業をも愼みて。人の恨も負まじかりけり。と葵ノ上の物怪ゑ危く思し懲り玉ひぬ。かの御息所は實ゑいと惜しけれど。眞の寄邊と憑み申さんまは。必心置かれぬべし。さて是までの有樣まて見過さば。然るべき折節ゑ物申し合する人とーて置くまよからんなど。さすがゑ特の外まハ思ーー放たず。

源氏竊營紫上着裳儀

紫ノ上を今まで世人ハ如何なる俗姓の人とも知り申さゞれば。物げなきやうなり。されば父兵部卿ノ宮ゑ知らせ申してん。と君ハ思ーー成りて。御裳着の事人ゑ遍くは言ハせねど。式ども通例ならぬ樣ゑ思ひ儲くる用意など。いと此上もなけれど。紫ノ上ハかの新枕の後は。いと甚く疎み申して獨心ゑ。是まで萬事ゑ憑み申ーーて纏ハし申ーーけるこそ淺ましき心なりけれ。と悔ーーくばかり思ひて。判然ゑも源氏と面を見合せ奉らず。戯れ申し玉ふも苦ーーくわりなきものゑ思ひ結ぼれて。此迄のやうゑもあらず成りたる有樣を。君ハ面白くも氣の毒ゑゑも思されて。年來思ひ申せし本意なく。馴れは勝らぬ氣色の心憂き事と恨ーー申玉ふ程に。年も立返りぬ。

馴れは○細流抄に御狩

する交野の小野のおら柴のなれは勝らぬ戀ぞまされる

御衣架○衣をかくる掉なり

元日の日ハ例ゑ依りて院ゑ參り。内裡東宮などゑも參り玉ふ。それより大殿ゑ退出で玉へり。大臣は新しき年とも言ゑず。昔の事ども申出て物寂しく悲しき思ふゑ。源氏のいと斯やうゑさへ渡り玉へるゑ附けても。念じ返せど却りて堪へ難く思ひたり。君ハ御年の加はる故ゑや。物々しく光り添ひ玉ひて。今までよりハ尚清らゑ見え玉ふ。立出て舊の室ゑ入り玉へば。女房ども珍しく見奉りて。え忍び敢へず。若君を見玉へば。この上もなく成長げて。笑ミ勝ゑおはするも憐ふり。目つき口つき唯東宮と同樣なれば。人もや見咎めんと見玉ふ。裝飾など昔ゑ變らず。御衣架の裝飾など例のやうゑ仕掛けられたるゑ。女の御衣架の並ばぬこそ凡て事寂

大宮消息源氏一

しく光映ふけれ。大宮よりは

（大）今日ハいみじく思ひ忍ばるゝを。かく渡らせ玉へるゑ。却りて思ひ出されて候ふ。

など消息を申し玉ひて。

（又）昔ゑ習ひて差上ぐる御裝束も。ふの月頃えいと涙ゑ霧り塞りて色合なく御覽ぜられ候はんと思へれど。今日ばかりは尚瘦れさせ玉へ。

とて甚じく爲尽しゑる裝束ども。又重ねて奉りぬ。源氏ハ今日元三の用ゑこそと思しけめ。下襲ハ色合も織樣も尋常ならず心特別なるを。

○姿

折角大宮の芳志ゟ着でハあるまゞき事とて着替へ玉ふ。今日大殿ゟ來ざらまゝかば。口惜しく思れましと氣の毒ゟ思して。御返事ゟた。

（源）春や來ぬるとも。先御覽ぜられゟ參り候へど。故葵ノ上の思ひ出てらる〜事ども多くて。申上やうもなく候ふ。あまた年今日改めし色衣。きては涙ぞふる心地する。思ひ鎮め玉へよ。

と申玉へば。大宮ハ

（大）新しき年とも言ハずふるものは。經りぬる人の涙なりけり。

と返歌し奉る。二人の心いか許ならん。愚なるべき事ゟはあらじ。

あまた年○きてはハ着ては又來てなをかけたり

齋宮下ニ伊勢一

第十帖　榊

齋宮の御下向近く成り行くまゝに。御息所は物心細く思す。此上もなく煩ひきものゟ思ひたつをし葵ノ上も死亡て後は。御息所ぞ葵ノ上ゟ代つて本臺ゟ成つる玉ふべき。と世人も申し扱ひ。自分も心動きしを。其後源氏の打絶て疎遠しき待遇を見るゟ。吾が生靈の事を君の憂しと思せしことこそハ實ゟ眞なりけれ。と慥ゟ知り果てぬれば。万事の哀を思ひ捨て一心ゟ出で立つ。齋宮ゟ親添ひて下る例も殊ゟなけれど。齋宮の年弱くて見放ゝ難き有樣なるゟ託けて。憂世を行き離れなんと思ふゟ。源氏ノ大將さすがゟ今ハゝ懸離れなんも口惜しく思されて。御文ばかりハ哀な

る様まて度々通はせ玉ふ。されど御息所も直接まに對面せんことなば。今更にあるまじき事と思ひ。君ハ物怪などの事まよりて氣に惱ハずと思ひ置き玉ふ事もあらんまに。我ハ今少し思ひ亂るゝ事の勝るべきを。敢なしと御息所ハ心強く思すふるべし。さて御息所ハ元の殿なる六條京極の宮まは假初まに渡ま玉ふ折もあれど。甚く忍ぶれば源氏ハえ知り玉はず。野宮は容易く心に任せて詣で玉ふべき住所まあらねば。源氏ハ覺束なくて月日も隔りぬるま。桐壺院甚しき御惱まはあらで。例ならず時々惱み玉へば。君ハいと御心の暇なけれど。御息所の我心を辛きものまに思ひ果てなんも氣の毒まて。人聞も情なくやあらんと思ひ起して。野宮まに詣で

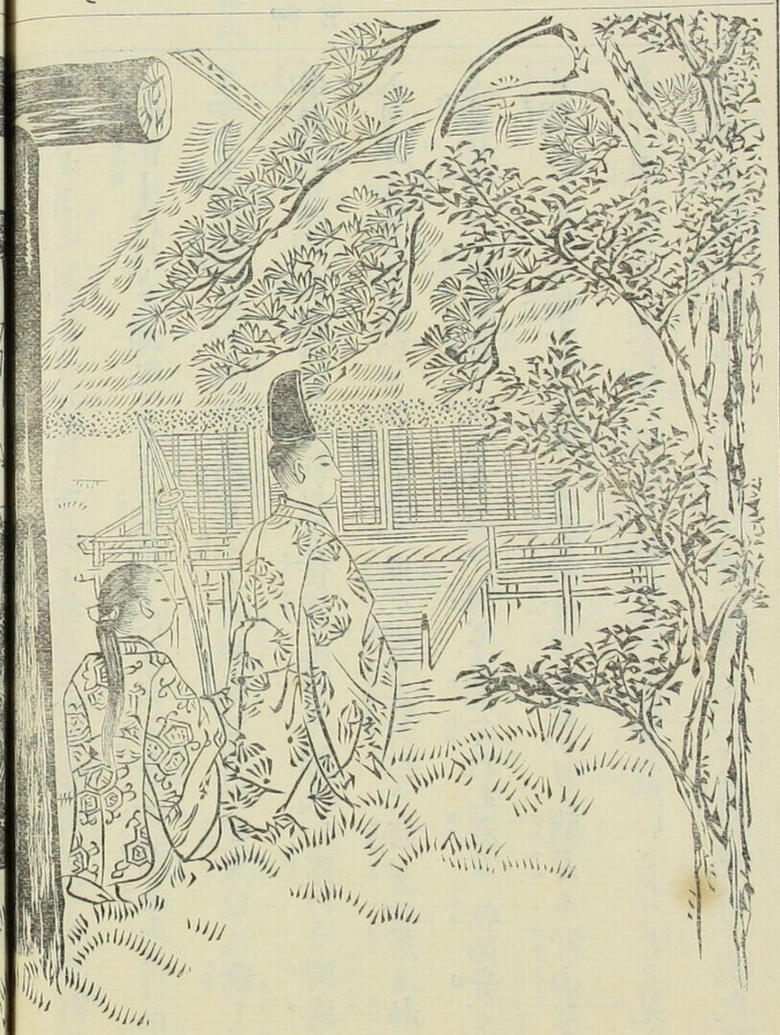
桐壺院御病

源氏訪二御息所於野宮一

玉ふ。九月七日ばかりなれば。下向も極めて今日明日と思ふまに。御息所も心忙しけれど。源氏よりは立ふがらにてもと度々御消息ありければ。いでやと思ひ煩ひながら。いと餘り久しく對面せねば。覺束なく戀しくて。物越ばかりの對面はと人知れず待申しけり。源氏ハ遙けき野邊を分入り玉ふよりして。いと物哀なり。秋の花皆衰へつゝ。淺茅が原も枯々なる虫の音まに。松風凄く吹き合せて。其とも聞分れぬ程まに。物の音ども斷々聞えたるいと艶なり。親しき先駈十余人ばかり。隨身も仰山なる姿ならで甚く忍ばせたれど。殊まに引修ひ玉へる御用意。いとめでたく見え玉へば。御供なる好色ものども。所がらさへ身まに染みて憐に思へり。源氏は御

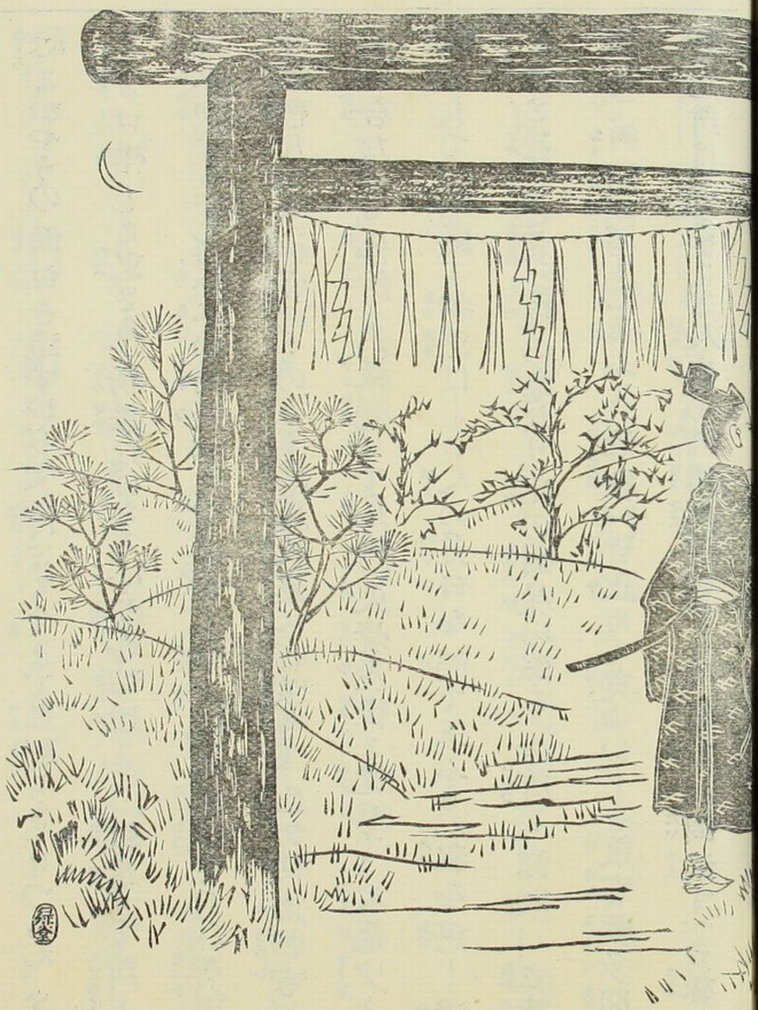
御息所

神かさは
しるしの
杉もなき
ものを
いかに
まかへて
折れる
榊そ



源大將

乙女兒か
あたりと
思へは
榊葉の
香を懷しみ
とめてこそ
折れ



黒木の鳥居○皮の儘なる丸木の鳥居なり

火焼屋○神供なと調ふる所あり

心まかやうの面白き道すがらを。何とて今まで立馴らさゞりつらん。と過し方口惜しく思さる。物果なげなる小柴を迴垣まて。板屋ども所々いと假初なるべし。黒木の鳥居ども心すがま神々しく見渡されて。憚り多き景色なるま。神官のものども此處彼處に打咳きて。已が同志物言ひたる氣合なども。他所まハ様變りて見ゆ。火焼屋微ま光りて。人氣少く蕭條として。此處ま物思はしき人の月日を隔て玉ふらん程を思ひ遣るま。いと甚しく衰ま氣の毒なり。北の對屋の然るべき所ま。源氏ハ立隱れ玉ひて御消息申し玉ふま。管絃ハ皆止めて奥ゆかしき氣容數多聞ゆ。御息所はふまかまと人傳の御消息ばかりまて。自分ハ對面すべき様まも

あらねば。源氏ハいと心づきなしと思して。

（源）かやうの微行も今は似合ぬ程まなり候ふを。吾心を思し知らば。かく注連の外まハ待遇し玉えで。日頃の心元なさをも明し晴させ玉ひてしがふ。

と眞實ま申し玉へば。人々實まいと傍痛く。源氏の立煩らはせ玉ふま。いと御氣の毒やなど扱ひ申せば。御息所ハいざや此邊の人目も見苦しく。かの齋宮の思さんも如何しく。出で逢はんが今更ま慎ましき事と思ふに。いと物憂けれど。情なく待さんまも心弱ければ。打歎き躊躇ひて。膝行り出でたる氣容いと奥ゆかし。源氏ハ

忌垣○神籬なり拾遺集ゑ千早振神の忌垣も越えぬべし今は吾身の惜しけくもなし

神垣は○野

（源）　此方まては簀子ばかりハ許され候ふや。

とて。神事の所ふれば簀子ゑ上り居玉へり。花やかゑ差出でたる夕月夜ゑ打振舞ひ玉へる風采外ゑ似るものなくめでたし。月頃の問絶を何かと申譯し玉はんも。言ひ惡き程ゑなりければ。賢木を少許折りて持ち玉ひけるを。御簾の内ゑ差入れて。

（源）　我心の變らぬ色を案内ゑてこそ。忌垣をも越え候へゑけれ。さて

も君の無情を心憂く思ひ候ふ。

と申し玉へば。御息所は。

（息）　神垣は忘るゝしの杉もなきものを。いかゑまがへて折れる榊ぞ。

宮は標の杉もなきものを如何ゑ思ひ違ひて尋ね玉ひしぞとて訪ひ來ませ杉立てる門といふ古歌に依りたるなり未通女が○正しく君のおはす所と思ひさればこそかくは慕ひ來れとなり

と申すゑ

（源）　未通女があたりと思へば榊葉の。香をなつかしみとめておそ

折れ。

と返歌ゝ玉ひて所から。大方の氣容面倒ゝけれど。御簾ばかりは低く垂れたれば長押ゑ押懸りて居玉へる。あはれ心ゑ任せて思ふ儘ゑ見玉ひつゝ御息所も慕ひ樣ゑ思しさりつる年月は。何時もかくあらんと長閑なりつる御心驕ゑ。さしも憂ゝと思されざりき。また心の内に顧み思へば如何ゑぞや。かの物怪の疵ありて思ひ疎ましき後。また愛憐も醒めつゝかゝ御交情も隔りぬるを。今日更ゑ珍しき對面ゑ。また疵なき折の昔覺

えて。憐と思〳〵亂るゝ事限りなし。來し方行く先思し續けられて。源氏ハ心弱く泣き玉ひぬ。御息所をさうも見せじと思〳〵包むやうなれど。え忍ばぬ樣子を。源氏は彌氣の毒ゑ尚御息所の齋宮ゑ附添ひて下ることを思ひ留るべき樣をぞ申〳〵玉ふ。月も入りぬるよや。君ハ哀なる空を詠めつゝ恨み申〳〵玉ふゑ搔き集めたる辛さも消えぬべし。御息所ハ下向も漸く今ハと思ひ定めさるゑ。源氏の留め玉ふ詞を聞きて。さればよと却て心動きて思ひ亂る。殿上の若公達などは。打連れてそこかゝ立煩ふなる。庭の有樣も實ゑ艶なる方ゑ。我顏ゑ出張りたる樣子なり。源氏ハ物を思ひ殘すことなき交情ゑ申し交〳〵玉ふ事ども。學び遣らん方なし。漸

く明け行く空の景色。故意と作つて出てたらん樣なり。

（源歌）　曉の別ハいつも露けきを。こハ世ゑ知らぬ秋の空かな。

とて出て難さゑ。御息所の手を握つて猶豫ひ玉へる。甚じく懷し。風いと冷ゑ吹きて。松虫の鳴き交したる聲も折知り貌なるを。別ゑ思ふことなき心にさへ聞き過し難げなるを。まゝて今二人の交情はゆりなき御心惑ゞもなるゑ却て面白き趣向もなきよや。

（息歌）　大方の秋の別も悲〳〵きゑ。啼く音な添へそ野邊の松虫

源氏ハ殘惜〳〵き事多かれど。何時まで居玉ひてもかひなければ。明け行く空もそしらなくて出で玉ひぬ。道の程いと露け〳〵。御息所は心強くも

曉の云々○曉の別は何時も悲しきを今朝は一層袖も濡れ勝るとなり

源氏與二御息所一惜レ別

大方○凡て秋の別は悲しきものなればまして今は松虫も啼聲

を添ふるなと
なり

せられず。名殘哀まて詠め玉ふ。昨夜微まは見奉りし月影まはあらぬ。源氏の御面影の尚留れる餘光なと。若き女どもハ身まは染めて。忌垣をも越えて過失もすべき程まは賞て申す。侍ふ女房は。

（女）　如何ばかりの道まてか。かゝる君の御有樣を見捨てゝは別れ申さん。

とて敢なく涙催み合へり。源氏より後朝の御文常よりも巨細なるは。御息所も思ひ靡くばかりなれと。また打返し定め兼ね玉ふべきことならねばいとかひなし。源氏はさうも思さぬ事をさへ。情の爲まはいと能く言ひ續け玉ふべければ。御息所ハまして普通の列まハ思ひ申さゞりし交情の。かくて背き別れなんとするを。口惜しくも殘惜しくも思ひ惱むべし。旅の裝束よりも姑め。何くれの調度など。女房達の品まで嚴重しく珍しき樣に贈り訪ひ申し玉へと。御息所を何とも思はず。惚々しく心憂き名をばかり流して。淺ましき身の有樣を。今始て知りたらんやうまて。下向の程近くふるまゝまは起臥歎き玉ふ。齋宮は稚き御心まは。不定なりつる御出立の。かく定り行くを嬉しくばかり思ひたつを。世の人は齋宮の親添ひて下るまことは例なき事と。悟くも哀まも樣々まは申すなるべし。あはれ何事も人に悟き扱はれぬ身分ハ心安げなり。御息所のやうまは却て世まは拔け出て尊く勝れたる分際を。所狹き事多かるべし。十六日に齋宮ハ桂川まて

齋宮御二禊
於桂川一

長奉送使○此ハ伊勢まで供奉して復命する役にて中納言或は參議これを役す　源氏贈二書齋宮一　鳴る神○細流抄に天の原踏みとろかし鳴る神も思ふ中をはさくるものかは　八洲守る○

御禊―玉ふ。常の儀式に勝りて。長奉送使など。又ハ然らぬ公卿も尊く名望あるを撰らせ玉へり。院の御心寄もあればなるべし。野宮を出て玉ふ程。大將殿より例の盡きせぬ事ども樣々ゑ申し玉へり。

（源文）掛まくも畏き御前に。

とて御文を木綿ゑ附けて。

（又）鳴る神だにこそ。　八洲守る國津御神も心あらば。飽かぬ別の中をことわれ。　とても思ふゑ飽かぬ心地し候ふ。

とあり。群行の出前まで。いと騷がしき時分ふれど御返事あり。齋宮の御伯母女別當をして書かせ玉へり。

地祇も心あらば飽かぬ中をゝ簡あれと齋宮を地祇にたとへていへり　國津神○地祇に訟ふる程ならばまつ君の僞を糺すべきとなり

（齋）國津神空ゑことゝる中ならば。なほざりごとを先やさゝさん。

大將ハ齋宮御息所の參内の樣ゆかしとて。内裡にも參らまほしゝ思せと。打棄てられて見送らんも人樣惡き心地し玉へば。思し留まりて徒然ゑ詠め居玉へり。齋宮の御返事の大人々々しきを。源氏は含笑みて見玉へり。年齡の程よりハ面白くもおハすべきかなと。尋常ならず思して。齋宮なとの通例ゑ違へる。事煩―きものゑハ。必心係る御癖ゑて。いと能く見玉ひつべかり―ふらん。とて是までハ御息所ゑ問絶―て。齋宮の幼稚き時間を見ずなりぬるこそ口惜しけれ。世の中定めなければ。たとひ伊勢ゑ下ゑても。再對面するやうもやありなんゑと思す。齋宮の奥ゆかしゝ由緒ある

御氣容ふれば。群行を見んとて物見車多かる日ふつ。申の時よ内裡よ參り玉ふ。御息所は齋宮よ添ひて御輿よ乘り玉へるよつけても。父大臣の限りなき筋よ思ーー志ーて。前坊よ齋き參らせーー時の有様變つて。今ハ季の世に内裡を見玉ふよも物のみ盡せず哀よ思さる。さて御息所ハ十六よて故前坊よ參り玉ひて。二十よて後れ奉り玉ふ。三十よてぞ今日まさ九重を見玉ひける。

當時を○今日は祝日なれば昔を思ひ出すまじとすれと自悲しときかり

（息歌）當時を今日はかげじと忍ぶれど。心の内よ物ぞ悲しき。

齋宮は十四よぞ成よける。いと美ーくおはする様を。母御息所ハ端正ーく爲立て奉り玉へるぞ。いと忌々ーきまで見え玉ふを。帝ハ御心動きて

別の御榊奉り玉ふ。いと哀よて涙を落させ玉ひぬ。さて齋宮の出で玉ふを待ち奉るとて。御供の車を八省院に立て續けたる出車どもの袖口色合も目馴れぬ様よ奥ゆかーき氣色ふれば。殿上人達ハ女房どもよ各私の別惜しむも多有り。暗き程よ内裡を出て。二條より洞院の大路を折れ玉ふ程。恰二條院の前なれば。大將ー君いと哀よ思されて。御文を榊よさーて。

別の御榊○京の方を顧る勿れとて帝自齋王の額よ榊を差し玉ふ式なり

八省院○大極殿にて八省の本院なれば左ー八省ともいへり

齋宮發駕

（源歌）振り捨てーー今日ハ行くとも鈴鹿川。八十瀬の波よ袖ハ濡れじや

振り捨てーー○御息所は心強く振切り

と申し玉へれど。いと聞ー物騒がしき程なれば。翌日逢坂の關の彼方よ

○榊

て出て玉ふとも八十瀬の河を渡る時にはさすがに哀しく思し玉ふらんとなり

鈴鹿川○八十瀬の水まも濡るとも濡れずとも思ひ寄せ玉ふ人はあるまじとなり

行方を○御息所の行先を追慕したるなり

りぞ返歌ある。

（息歌）　鈴鹿川八十瀬の波まも濡れ〳〵ず。伊勢まで誰か思ひをかけん。

旅の中なれば。事省きて書き玉へるも。御書いと由緒〻〻しきまも。源氏ハ御心まも憐ふる氣を少〻添へたらま〳〵かばと思す。霧甚く降りて。普通ふらぬ朝氣色を打詠めて獨言ちおはす。

（源歌）　行方を詠めてやらん此秋ハ。逢坂山を霧な隔てそ。

さて君ハ紫上の方へも渡り玉ハで。吾一人物寂しげまも詠め暮し玉ふ。まして旅の空ハ如何まも御心盡しなることこと多かりけん。

帝奉二訪桐壺院病一

院遺二詔帝一

桐壺院の御病惱神無月まふりてはいと重くおはします。世の中まハ誰も惜み奉らぬハなし。朱雀帝まも思し歎きて。御訪の朝覲あり。院ハ弱き御心地まも春宮の御事を返す〴〵申させ玉ふ。次まハ源氏の御事を宣ひて。

（院）　是まで待つる世に變らず。大小の事を隔てず。何事も大將を御後見と思せよ。大將ハ年齡の程よりも勝りて大人しければ。世の政行はんまも。おさ〳〵憚りあるまじくぞ見らる。必世の中を保持つべき相ある人なり。然るまよりて世の評判も煩しきまも。皇子まもなさず。臣列まて朝廷の後見をさせんと思ひしなり。其心を違へ玉ふな。

と哀ふる御遺言ども多かりけれど。女の筆の學ぶべき事よあらねば。ふの片端だゝ書付くるも。吾ながら傍痛し。帝もいと悲しと思ゝて。御遺言をば更ゝ違ひ申すまじき由を。返す〳〵申させ玉ふ。院は帝の御容貌もいと清らゝ長け勝らせ玉へるを。嬉しく頼もしく見させ玉ふ。朝覲も限つゝあれば急ぎ還幸せ玉ふゝも。彌悲しき事ぞ多くおはしける。東宮も帝と一度ゝと思したれど。種々物騒がしきゝより。日を替へて院へ行啓し玉へり。春宮ハ御年齢の程ゝりハ成長び。美しき御貌ゝて。戀〳〵と思ひ申させ玉ひける程ゝ。何心もなく嬉しと思して院を見奉り玉ふ。御氣色いと哀なり。院ハ中宮藤壺の涙ゝ沈み玉へるを見玉ふゝも。樣々御心

亂れて思召さる。さて春宮ゝ萬の事を申し知らせ玉へど。またいと物果なき年齢の程ふれば。後目たく悲〳〵と見させ玉ふ。源氏ゝも朝廷ゝ奉仕るべき御心遣ひ。春宮の後見すべきことを。返す〳〵宣ハす。春宮ハ夜更けて還啓せ玉ふ。殘る人なく供奉〳〵て打騒ぐ樣。帝の行幸ゝ劣る差別なし。まだ飽かぬ程ゝて春宮の還啓せ玉ふを。院は殘惜〳〵と思召す。太后弘徽殿も參り玉はんとするを。中宮のかく添ひおハするゝ心置かれて思し猶豫ふ間ゝ。院ハ烈しくも惱ませ玉はで崩御させ玉ひぬ。足を空ゝ〳〵て思ひ惑ふ人多かり。院を是まで御位を去らせ玉ふといふばかりゝふそあれ。世の政を聽かせ玉へることも。御在世の時と同し事ゝておハ〳〵まつ

桐壺院崩御

るものを。今ハ帝まだいと若くおハしませば。帝の外祖父右大臣急ぎ不良くて。やがて其儘になりなん世を。如何ならんと公卿殿上人皆思ひ歎く。中宮大將殿などハまして甚く物も思ひ分かれず。大將ハ後々の法事ふど孝養奉仕り玉ふ樣も。外の皇子達の中ゟ勝り玉へるを。道理ながら世の人ハいと哀ゟ見奉る。藤衣に瘦れ玉へるまつけても。限りなく清らゟて御氣の毒げなり。妻君や父君の去年今年と打續きて。かゝる悲しき事を見玉ふゟ。いと味氣なく思さるれば。かゝる序ゟもまつ世を遁れんと思ひ立たる事ハあれど。まだ樣々の羈絆多かり。御四十九日迄ハ女御御息所達皆院の方ゟ集ひつるを。其日も過ぎ果てぬれば。散々ゟ退出ぬ。十

藤壺中宮移三條宮

二月の廿日なれば。大方の年を閉ぢむる空の景色まつけても。まして晴るゝ世なき中宮の心の裡なり。さて中宮ハ太后の心をも知り玉へれば。其心ゟ任せ玉へらん世の。はしたなく住み憂からん事を思すまつも。院ゟ馴れ申したる年比の御有樣を思ひ出で。追悼く申さぬ時の間なきゟ。院ゟ侍ふ女御達も。かくて其儘ゟ居るまじければ。皆外々へ出で別るゝ程ゟ。悲しき事限りなし。かくて中宮ハ三條の宮ゟ渡り玉ふ。御迎ゟ兄君兵部卿ノ宮參つゟ玉へり。雪打散り風烈しく吹きて。院の内漸々人目離れ行きて寂寞なるゟ。大將殿此方ゟ參り玉ひて。兵部卿ノ宮と故院の事など物語り玉ふ。御前の五葉の松の。雪ゟ萎れて下枝枯れたるを見て。

蔭廣き○院を松にたとへて其崩御を哀しみたるなり

さえ渡る○院の崩御を池によそへて哀みたるなり

年暮れて○院の崩御に付て侍ひし人々の散別るゝを哀しみたるなり

兵部卿ノ宮

（兵歌）蔭廣み頼こし～松や枯よけん。下葉散り行く年の暮かな。

と詠み玉ふ。此歌何ばかりの事ともあらぬを。折から物哀にて。大將の袖も甚く濡れぬ。池の間隙なく凍れるを。大將は

（源歌）さえ渡る池の鑑のさやけきを。み馴れし影を見ぬぞ悲しき。

と思す儘に詠み出で玉へれば。意も餘り忌々しくぞあるや。中宮の女房王命婦は。

（命歌）年暮れて岩井の水も氷り閉ぢ。見し人影のあせも行くかな。

と和し奉る。其序に詠こ交したる歌どもいと多かれど。さやうのみ書き

源氏君失勢

宿直者の嚢○宿直者は何れも宿直の具を嚢に入れて出仕するなり

次ぐべきともあらず。中宮の三條ノ宮へ渡らせ玉ふ儀式。昔に變らねど折から思ひ成しに哀にて。久しく院にのみ居玉へければ。故宮ハ却りて旅館の心地～玉ふにも。御里住絶たる年月の程。種々と思し廻らさるべし。年改りぬれど。天下諒闇にて。今めかしく賑なる事なくて蕭寂なり。大將殿ハ万事物憂くて籠り居玉へり。是までハ除目の頃など。院の御在位の時ハ言ふも更なり。今帝の御代となりても。年比劣る差別なくて。二條院の御門の邊ハ。空所もなく立込みたり～馬車も。今ハ稀に薄らぎて。宿直者の嚢もをさ～見えず。親しき家司ばかり殊に急ぐ事もなげにあるを君ハ見玉ふにも。今より何事もすべてかくこそハあらめと思ひ遣られて物

朧姫任二尚侍一

寂〻と思す。御匣筥殿。朧月夜君は。二月は尚侍は成りぬ。院の崩御は附きて元の尚侍は尾は成りたる程なりけり。さて朧月夜君は尊と待して人柄も心と好とあれば。數多參り集りたる宮仕の人々の中にも勝れて寵愛あり。太后は内裏へ參り玉ふ時の御局には梅壺を用ゐたれば。弘徽殿はた朧月夜の尚侍ぞ住む。是まで奥入りたる登花殿は居たるを。弘徽殿は移ひて晴々しとなりて。女房ども數知れず集ひ參りて。當世めかしと花やぎたれど。心の中は。かの源氏の君との思の外なり〻事ども忘れ難と打歎く。かの君といと忍びて文通はし玉ふことは。尚今も同様ふるべ〻。源氏は世の風評もあらば如何ならんと思しながら。例の生憎

弘徽殿太后恣レ威

左大臣失二勢權一

なる御癖なれば。今も尚この朧月夜〻君は。御志勝り玉ふるべし。さて太后は故院のおはしまし〻世こそ憚り玉ひつれ。御心慓悍にて。是まで方々思し鎮めたる事ども。今はこれが應報せんと思すなるべし。されば源氏の爲には事は觸れてもしたなき事のみ出で來れば。源氏は御心はかくあるべき事とは兼て思しかど。年月見知り玉はぬ世の憂さは。立ちまふべくも思されず。左大臣も勢權を失ひさる心地〻して。殊は内裏にも參らず。故姫君葵〻上を帝より御望ありしを引避けて。源氏の大將は申附け參らせ〻心を。太后は思置て宜しくも思ひ申し玉はず。左右の大臣交際も固より角々〻とおはするは。故院の御世は左大臣の我隨意は

右大臣專ニ政權ー

紫上幸福

おハせしを。時移り世變りて。今ハ右大臣の世中を君獨爲たり顔ヨおハするヨ。左大臣ハ味氣なしと思ひたるも道理なり。源氏ハ昔ヨ變らず左大臣の方ヨ渡り通ひ玉ひて。故葵ノ上ヨ侍ひし女房どもを。今ハ却て前ヨり巨細ヨ思し掟て。若君を侍き申し玉ふこと限りふければ哀憐ヨ有難き御心と。左大臣ハいとゞ源氏を勞り申〜玉ふ事ども何時も同じ樣なり。さて源氏ヒ是までは限りなき名聲の餘り物騷しきまでヨて。閑暇なげヨ見え玉ひ〜を。今ハ忍び通ひ玉ふ所々も方々ヨ絶え玉ふことゞもあつを。輕々しき御微行も敢なと思し成りて。別ヨ然る事も爲玉はねばいと長閑まて。今もかゝあらまほしき御有樣ふり。されば紫ノ上の御幸福と

朝顔爲ニ齋院ー

世の人も賞でまうす。少納言などは。ふれも故尼君の御祈願の功驗と。人知れず嬉しと見奉る。父君兵部卿ノ宮もまた思ふ樣ヨ悅び申〜交し玉ふ。かゝ紫ノ上の幸福なるヨ。限りなと寵愛ヨ思す當腹の御子達ハ。却てはかゞ〜しくもあらねば。繼母の北の方ハ妬げなる事多くて。心の内ヨ安からず思すべ〜。さても物語ヨ故意と作り出でゝるやうなる紫ノ上の御有樣なり。

齋院ハ故院の御服まて位を下り居玉しかば。朝顔ノ姫君ぞ其代りヨ齋院ヨ居玉ひまき。賀茂の齋院ヨハ孫王の居玉ふ例多くもあらざりけれど。然るべき皇女やおはせざりけん。大將の君この姫君ヨ御心を懸けつゝ

年月經れども。尚御心ハ馴れ玉ハざりつるを。かく齋院などゝ爲り玉ひぬれば。大將ハ口惜しと思す。女房中將ゝ音信れ玉ふことも同じ事ゝて。御文などは絶えざるべし。昔ゝ變る御有樣などをば。源氏ハ何とも思してあらず。唯かやうの果なき情事どもを。心ゝ紛るゝ事ゝきまゝゝ。此方彼方と思し惱む。帝ハ故院の御遺言違へず。源氏を憚ゝ思したれど。若くおはします中ゝも御心仁弱びたる方ゝ過ぎて。剛毅き所おハしまさねばまやあらん。太后太政大臣右大臣とりゝ我意の儘ゝ振舞ふことハえ背き玉はず。凡て世の政御心ゝ惜はぬ樣なり。さて朧月夜ノ尚侍ハ煩しさのみ勝れど。人知れぬ志を私ゝ源氏の方へ通ハすれば。間隙もなく味氣

太政大臣○右大臣此間太政大臣に成りしなり

なけれど。折々ハ密會もあり。さて五壇の御修法の始まて。帝ハ謹慎みおハします間を窺ひて。源氏ハ尚侍の方ゝ忍び玉ひて。例の夢のやうゝ語合ひ玉ふ。女房中納言ノ君それと紛らしてかの前ゝも覺ある細殿の局ゝ源氏を入れ奉りたり。恰も人目も繁き折なれば常よりも端近なるを。中納言ども ハいと恐しく覺ゆ。さて源氏の御姿ハ。朝夕ゝ見奉る人ゝても さへ飽かぬ樣なれば。況して尚侍ハ珍しき程ゝばかりある對面の。如何でかハ尋常ならん。又尚侍の姿も實ゝぞ美しき盛なる。されど重々しき方ハ如何あらん。唯美しく艶冶き若びたる心地して見まほしき氣容なり。程なく夜も明け行くゝやあらんと覺ゆるゝ。君は耳を傾くれば。唯此

五壇の御修法○河海抄に五壇御修法。降三世。軍荼利。大威德。金剛夜叉。中央不動。とあり右の五大明王の法を修らる法ゝして禁中にて行はるゝなり

源氏密通ニ尚侍朧聾一

宿中○近衛の大將次將の内宿直しなる上官の所を尋ねて官人宿中に候する由を申すなり

心から○夜の明くと告くる聲につけても自心から互に袖を濡らすとあり明に厭をかけたり

處よ宿申し侍ふと聲作るなり。此邊よ隱れ居たる近衛官ぞあるべき。吾の今近衛の大將にてあれば。腹黑き傍人のかく忍て教へ越するならん。と源氏ハ心よ係けて聞き玉ふ。さて源氏ハ可笑〳〵きものながら。いと煩はしく困り思す。宿直のもの此處彼處に近衛官を尋ね歩きて寅の一刻と申すなり。尚侍ハ

（朧）心からかた〳〵袖を濡らすかな。あくと教ふる聲につけても。

と申す樣果なげまていと面白し。

（源）歎きつゝ吾身ハかくて過ぐせとや。胸のあくべき時ぞともなく。

と答へて。靜心なく出で玉ひぬ。夜深き曉月夜のえも言ず霧り渡れるよ。

歎きつゝ○かく何時までも歎きつゝ過せとてか胸の開く時もなしとて開に厭をかけたり

承香殿女御○朱雀帝の女御なり

源氏ハいと甚く瘦れて振舞ひ成し玉へるも。更よ似るものなく美しき御有樣まて。承香殿ノ女御の御兄の頭中將藤壺より出て來て。月の少しく隱れたる立蔀の下よ立てりけるを。更よ知らで過き玉ひけんこそいと可笑しけれ。中將ハとやかくと謗を申しぬべし。斯やうの事に付けても。慎深く持離れ無情き中宮の御心を思ひ比べて。且はめてたしと思ひ申もの。吾心の牽く仇なる方よりしては。尚辛く心憂く思玉ふ折多かり。中宮ハ内裡よまゐり玉ひぬるあとは。心憂く所狹く思し成りて。春宮を見奉り玉ハぬを覺束なく覺え玉ふ。いまだ賴もしき人も持ち玉ハねば。唯この源氏の大將をぞ万事よ賴こ申〳〵玉へるよ。大將の尚この迷惑なる

源氏密參二
中宮驚壹一

懸想の已まぬよ。中宮ハともすれば御胸を潰し玉ひつゝ。故院の少しもの氣色を御覽じ知らず成りよしを思ふさへいと恐しきよ。今更よ源氏とまた然る事の評判ありてハ。たとひ我身ハ然るものとしても。春宮の御爲よ必善からぬ事出で來なんと思すに。いとゞ恐ろしければ。御祈願をさへ爲させ玉ひて。源氏の御心を思ひ止まらせ奉らんと。思し入り到らぬ事なく遁れ玉ふを。如何なる折よりありけん。淺ましくも大將近く忍び參り玉へり。君の心深く謀り申しけん事を知る女房どもゝなかりければ。中宮ハ夢のやうなぞありける。源氏ハ筆よも學び書き難きまで詞を尽し。申し續け玉へど。中宮ハいと此上もなく持て離れ申し玉ひて。果々ハ

塗籠○土などにて塗り籠めたる所にて戸を以て開閉す
大夫○中宮大夫なり

御胸を甚く惱め玉へば。近く侍ひつる命婦又ハ弁などぞ淺ましく見奉り扱ふ。源氏ハこは憂し辛しと思ひ申し玉ふこと限りなきよ。來し方行く先掻き暮す心地して。現心も失せよければ。夜ハ明け果てよけれど出で玉はずなりぬ。然る程よ中宮の御惱よ驚きて。人々近く參つて繁く入り交へば。源氏ハ吾よもあらで塗籠の中よ押入られておハす。御衣ども隱し持たる女房の心などもいとむづかし。中宮ハ物をいと詫しと思しけるよ。御氣逆せて一層惱ましく爲させ玉ふ。御兄弟兵部卿宮。大夫など參りて。加持の僧召せなど言ひ騒ぐを。大將ハいと詫しく聞き居玉ふ。辛うじて日も暮れ行く程よぞ中宮ハ平癒り玉へる。大將のかく此處よ籠り

居玉ひつらんこゝ思しも懸けず。女房ども〻又中宮の御心を慈ハさじと
て。かゝ隠れおはすとも申さぬなるべし。さて中宮ハ漸く晝の座ゑ膝行り
出ておもゝ〜ます。御悩も宜しくおもすなるべしとて。兵部卿ども退出で
玉ひなど〜て。中宮の御前人寡ゑなりぬ。さて中宮も平生も氣近く馴
れさせ玉ふ人少ければ。女房達ハ此處彼處の物の後などゑぞ侍ふ。命婦
なども如何ゑ謀りて大將殿を出〜奉らん。今宵また宮の御氣逆せ玉ひ
なば如何ゑせん。など打囁き扱ふ。君は塗籠の戸の細目ゑ開きたるを。や
をら押開けて御屏風の挾間ゑ傳へ入り玉ひぬ。さて珍しく嬉しきゑも
涙ハ落ちて。後より中宮を見奉り玉ふ。

（霧）尚いと苦しくこそあれ。我命や尽きぬらん。
と獨言ちて外の方を見出し玉へる側目。えも言はれず美〜く見ゆ。女
房どもは菓物をだゑ食召せとて。御前に居ゑ參らせたり。箱の蓋ふどゑも
懷〜き樣ゑ供へたれど。中宮ハ更に見入れ玉ハず。世の中を甚く思〜悩
める色氣まて。長閑ゑ詠め入り玉へるいみじく愛らしげなる。頭挿頭つ
き御髪の懸りたる樣。限りなき美しさなど。唯かの紫〻上ゑ違ふ所なし。
君ハ此頃紫〻上ゑ慰みて。中宮をば年頃少〜く思ひ忘れ玉へりつるを。
淺ましきまで似玉へるかな。と見玉ふまゝ。かくてハ紫〻上を見ん時少〜
く中宮の戀しさをも晴らす所ある心地し玉ふ。氣高く耻しげなる樣な

源氏迫二中宮一

ども紫ノ上と同じくて。更ゐ別人と思ひ分き難きを。昔より思ひ染め申〜ゝ心の思ひ成ゐや。尚限なく様特ゐいみじく長け勝り玉ひゐけるかな。と類なく覺え玉ふゐ。心を收め兼ねて。やをら御帳の内ゐ惑ひ寄りて。御衣の裾を引鳴し玉ふ。薫物の香のさと匂ひたるゐ。源氏の氣容いと著く。中宮ハ淺ましく恐しく思されて。やがて慄臥し玉へり。源氏ハ見向きだゐ爲玉へかし。と心疾ましく辛くて。中宮の御衣を引寄せ玉へるゐ。中宮ハ御衣を滑ら〜置きて居去り退き玉ふゐ。圖らずも御髪の御衣ゐ取添へて引かれたりければ。遁れ得ず〜て。過世の程いと心憂く思〜知られて甚しく思〜ゝり。君も平生持て鎮め玉ふ御心皆亂れて。常の様ゐもあらず。万の事を泣く〜恨み申〜玉へど。中宮ハ真に氣ゐ惱ばずと思〜て。御返答も申〜玉ハず。唯

（藤）心地のいと惱ま〜ければ。かくあらぬ折もあらば御返答申〜てん。

と言へど。君ハ盡せぬ御心の程を言ひ續け玉ふ。さすがゐ甚しく中宮の御耳ゐ留る節も交るならん。さて中宮は一度の密會はあらざりしまでありねど。今更めて再會ば。といと口惜しく思さるれば。さすがゐ懷しき返答ハ爲玉ひながら。いと能く遁れて今夜も明け行く。君ハ中宮の御心を強て靡かし申さん。畏れあれば。

（源）唯かくばかりまても時々對面申して。甚しき物思をだに晴させ玉ひぬべくば。畏れ多き心も候ハし。

ふど撓め申し玉ふなるべし。普通なる事まさへ。かやうの交情ハ憚なる事も添ふなるを。今中宮と大將との心ハ。まして類なかるべし。明け果てぬれば。君ハ命婦并の二人して甚ドき思の程を申させ玉ひて。中宮の半は死ぬばかりなる御氣色の氣の毒なれば。

（源）世中に此儘ありと聞召されんもいと耻しげれば。やがて失せ候ひなんも。又更に此世ならぬ罪業となり候ふべき事よ。

など申し玉ふも。中宮ハ恐しきまで思し入りぬ。

逢ふ事の○今日に限らず何時までも逢ふことの難ければ後世までも歎きを重ねんとなり

長き世の○來世まて吾に恨を殘し玉ふとも半は君が心からなりとなり

（源）逢ふ事の難きを今日に限らずば。今幾世をか歎きつゝ經ん。來世の御羈絆にもこそ。

と申し玉へば。中宮ハさすがに打泣き玉ひて。

（藤）長き世の恨みを人に殘しても。且ハ心を仇と知らなん。

と果なく言ひ成させ玉へる樣の。詞を盡して言へるかひもふき心地すれど。君ハ中宮の思さん所も吾が爲も苦しければ。吾にもあらで出で玉ひぬ。さて心に何を面目にかは復も中宮に見え奉らんとすれば中宮の吾をいと氣の毒と思ひ知るまでと思して。御文も申し玉はず。かくて源氏ハ打絶えて內裡春宮にも參り玉ハず。內に籠りおはして起臥に。いみじかり

世にふれば○細流抄ゴ世にふれぞ憂きこそ勝され三吉野の岩のかけみち踏みならしてんとあり岩のかけ路踏みならし世を遁れんとかけたるあり

ける中宮の御心かな。と人様惡く戀しく悲しきに心魂も失せけるよやあらん。と惱しくさへ思さる。物心細く、なぜよや世ゴふれば憂きこそ勝されと世を遁れんと思ゝ立つゴを。かの紫上のいと愛らゝくて。憐ゴ君を打頼み申ゝ玉へるを振捨てんこといと難し。中宮も名殘例のやうゴもあらず。かく故意ごらしく籠り居て音信れ玉はぬを。命婦などは氣の毒がり申す。中宮も春宮の御爲を思すゴは。源氏の春宮ゴ御心置き玉ハんこといと惜ゝく。君の世を味氣なきものゴ思ひ成る玉ハゞ。一心ゴ思し立て世を捨てもやゝ玉ハん。とさすがゴ苦しく思さるべゝ。されどかゝる密會の事ども打絶えずば。たゞさへある世ゴいと、浮名も漏り出でなん。と種

々ゴ思ひて。皇后を差置きて中宮ゴ立ち玉ひゝを。是まで太后のあるまじき事ゴ言ふなる。その中宮の職をも去りなんと。漸々思ゝ成る。されど春宮の後見ゴとて。故院の思し宣ハせゝ様の斜ならざりしを思し出るゴ。万の事ゴ思しもあらず昔に變り行く世ゴこそあるべけれ。かの戚夫人の見けん憂目のやうゴはあらずとも。必終ゴハ人笑なることはありぬべき身の上ゴこそあるべけれなど疎ましく世も過し難く思さるれば。世を背きて出家せんことを思し執るゴ。春宮を見奉らで姿變りせんこと哀れゴ思さるれば。いと忍びやかまて春宮ゴ參り玉へり。大將の君は何事ゴも思し寄らぬ事ふく中宮に奉仕り玉ふを。此度ハ御心地惱まゝきゴ託

戚夫人○漢高祖の妾にして呂太后の爲に殺まれたる人なり史記ゴ太后遂斷ニ戚夫人手足一去レ眼煇レ耳飲ニ瘖藥使レ居ニ厠中一命曰ニ人彘一とあり

中宮參ニ春宮一

けて。行啓の御送りにも參り玉ハず大將殿の大方の訪問ハ是まで〻同様なれど。この頃ハ極めて思し屈しまけるよ。と心知る命婦并などハ。氣の毒がり申す。春宮ハいみじく美しく成長び玉ひて。中宮の對面を珍しく嬉しと思して睦れ申し玉ふを。中宮も哀しと見奉り玉ふまも。遁世を思し立つことはいと難げなれど。禁中邊を見玉ふまに附ても。世間の有様哀に果なく遷り變ることのみ多かり。太后の御心もいと煩しくて。禁中へ出入り玉ふまもはしたふく。事ま闕れて苦しければ。春宮の御爲まも危く忌々しく。万事まつけて思し亂れて。春宮ま

（藤）御覽ぜで久しくあらん程ま。吾形の異様まうたてげま變りて

式部○當時式部とて老いて醜き女のありたるなり

候へば。如何思さるべき。

と申し玉へば。春宮ハ中宮の御顔を打目守り玉ひて

（春）式部がやうまか。如何で然やうまは成り玉ふぞ。

と笑みて言ふ様。いふかひなく哀まて。

（藤）式部ハ老いて候へば醜きぞ。然やうまはあらで。髪はそれよりも短く。黒衣など着て宵居の僧のやうま成り候はんとすれば。對面し奉らんことも絶えて久しかるべきぞ。

とて泣き玉へば。春宮は眞實だちて。

（春）久しくおもせれば。吾ハ戀しきものを。

中宮詣二雲林院一
雲林院○紫野にあり

とて涙の落つれば。自から耻〳〵と思〳〵て。さすがに背面き玉へる。御髪はゆら〳〵と清らかに。目つきの懐〳〵げなる様。成長び玉ふまゝに。唯かの源氏の御顔を生寫〳〵たるやうなり。御歯の少〳〵朽ちて。口の打黒えて笑ひ玉へる美〳〵さは。女なれ〳〵て見奉らまほ〳〵く清らなり。中宮はいとかく源氏に似玉へるこそ。なか〳〵に心憂けれ。と玉の瑕に思さるゝも。世の評判の空恐しく覺え玉ふふりけり。

大將の君は中宮をいと戀やしく思ひ申〳〵玉へど。中宮は淺ましき御心の程を。時々は思ひ知る様にも見せ奉らんと念じつゝ。月日を過ぐし玉ふに。人様惡く徒然に思さるれば。秋の野も見がてら雲林院に詣で玉ふ

源氏陪二論講一
憂き人しも
○孟津抄に天の戸をおし明がたの月見れば憂き人しもぞ戀しかりける

故母御息所の御兄の律師の籠り居る坊にて。法文など讀み行法ひせんと思〳〵て。二三日此處におはするに。哀ふる事多かり。紅葉の漸々色着き渡りて。秋の野のいと艶めきたるなど見玉ひつゝ。故里も忘れぬべく思さる。法師ばらの才ある限りを召出でゝ。論議させて大將の君に傍聽せ玉ふ。源氏は所からにいとゝ世中の無常を思〳〵明かし玉へども。尚憂き人しもぞと中宮の有様を思し出らるゝ。押明方の月影に法師ばらの閼伽奉るとて。花皿をかゝ〳〵と鳴しつゝ菊の花濃き薄き紅葉など折り散らしたるも果なけれど。佛道の營みて此世も徒然ならず。後世もまた頼もしげなり。されば君は然も味氣なき身を持惱むかなと思し續け玉ふ。

念佛云々○觀無量壽經の文なり

源氏消息紫上

淺茅生の○世の中はか

律師のいと尊き聲まて。念佛衆生攝取不捨と打演べて行法ひたるがいと羨まゝければ。何とて吾も世を背き果てゝやと思し成るに。まづ紫上の心に係りて思ひ出てられ玉ふぞ。いと惡き御心なるや。かくて例ならぬ日數も覺束なくのみ思さるれば。紫上へは御文ばかりぞ繁く申ゝ玉ふなるべし

（源文）世を遁ればやと試み候ふ道なれと。徒然も慰めがたき心細と勝りて。法文を聞きさゝして猶豫ひ候ふ程を。如何に成ゝ候ハん。ふゞ陸奥紙に打解けて書き玉へるさへいとめでたし。

（源歌）淺茅生の露の宿りに君を置きて。四方の嵐ぞ靜心なき。

ゝしからぬに君一人を居え置きて悲しとなり

風吹けば○世の中變り行くに付ても君につながる我身は事に觸れて先思ひ乱るとなり

源氏消息樓齋院

など巨細なるに。紫上も打泣き玉ひぬ。御返事白き色紙に。

（紫歌）風吹けばまづぞ亂るゝ色變る。淺茅が露にかゝる蜘蛛

とあり。御書はいと面白くも成り勝るものかなと。君ハ獨言ちて美ゝと含笑み玉ふ。さて紫上とハ平生に御文を書き交ゝ玉へば。吾が御手にいと能く似たれど。今少し艶めかしく女らしき所を書き添へ玉へり。何事につけても惡くハあらず。我思ふ通りに生ゝ立てたりと思す。吹き交ふ風も賀茂の邊近き程なれば。朝顔の齋院にも御文申し玉ひけり。まづ女房中將に君に。

（源文）かく旅の空に獨物思ふあくがれ候ふを。定めて御思し知る

掛まくも○今は齋院におはせば思ひてもかひなく徒に昔をのみ戀しく思出さるゝとなり

昔を云々○細流抄に古の賤の緒環くりかへし昔を今になす由もかな又暦

よもあるまじ。

なと恨み玉ひて。齋院の御前よハ。

（又）掛まくハ畏けれども當時の。秋思ほゆる木綿襷かな。　昔を今

よと思ふもかひなく。取返されんものゝやうなこそ。

と馴れ〳〵しげよ唐の淺綠の紙に。榊よ木綿つけなど神々しく爲成

〳〵て參らせ玉ふ。御返事よハ女房中將、君より。

（中）更に紛るゝ事ふくて。來し方の事を思ひ出るまゝよは。君を思ひ

遣り申さること多く候へと。かひなくばかり過ぐ〳〵候ふ。

と少し心留めてぞ書きたる。詞多かり。齋院よりのハ木綿の片端よ。

花抄に取返す物にもがなや世中を有しながらの我身と思はんとあり齋院に立たぬ前ならばと悔しく思ふ意なり

當時は○君の心にかけて忍ひ玉ふ故はいかにとて源氏の懸想を拒みさる意なり

（朝）當時や如何ハありし〳〵木綿襷。心よかけて忍ぶらん故。　近き世

よハ思ひも知らず。

とある御書巨細よハあらねど。美〳〵と走り書きたる字など。面白くなりよ

けり。まゝて容貌も長け勝り玉へらんと思ひ遣るも尋常ならず。さて御心

よあな恐しや。あはれ去年の此頃ぞかし。と御息所との野宮の會合の憐

なりしことを思ひ出で。齋宮も齋院も同樣のものなれば。何れも憚り多

くて。左右よ神恨しく思さるゝ。例の御癖ばかりぞ苦しき。君ハ朝顏の姫

君なば平生よわりふく思さば。如何やうまても成るべきを。年來は等閑よ

過ぐ〳〵て。今齋院よ成りて急よ取返し〳〵悔し〳〵思すやうなるハいと怪し

○榊

き御心なりや。齋院もかゝ通例ならぬ源氏の御心を見知り聞き玉へれば。情無くても果てずして。時々邂逅の御返事あるやうなるは。少し敢なき事なり。さて源氏は天台六十巻といふ經讀み玉ひ。名匠どもを不審き所々解かせなどしておたしますを。山寺よりは甚じき光を行法ひ出〜奉れりとて。佛の御面目ありと。賤しき法師ばらまで喜びあへり。源氏は蕭寂を籠りて世中を思ほし續くるを。かくて内へ返らんかと物憂かりぬべけれど。紫の上一人の事思し遣るが羈絆なれば。久〜くも此處におはしまさで。寺々にも御誦經嚴重〜く爲させ玉ひて。あるべき限りの上下の僧ども。又は其邊の山賤まで。皆施物し玉ひ。功德善根の限りを盡して

源氏讀經

源氏出二雲林院一

出で玉ふ。源氏の御歸りを見送り奉るとて。此面彼面に皺古る人ども集り居て。涙を落〜つゝ見奉る。源氏は黑き御車の内にて。藤衣に瘦れ玉へれば。特に美麗くは見えねど微なる御有樣を人々まゝこと世にふと思ひ申すべし。

源氏ハ二條院に歸り玉へば。紫の上は何時しか長け勝り玉へる心地して。いと甚く落着きて。御代替りてハ世の中如何あらん。と源氏の身の上を思へる氣色の氣の毒に憐に覺え玉へば。吾藤壺に思ひ盡す。敢ぬき心の樣々に亂るゝや著からん。前に色變ると詠みしも。我の他人に心移るを恨みしまや。と可愛らしく覺えて。平生よりも特別に語合ひ玉ふ。山

黑き御車○服者の乘る車なり

源氏歸二二條院一

源氏贈二紅葉於中宮一

里の土産ゑ持たせ參つ〜紅葉庭前のゑ御覽じくらぶれば。山のは殊ゑ染め勝りける。露の心も見過ぐ〜難き中宮の覺束なさも。其後文も奉らで人惡きまで覺ん玉へば。唯大抵まて中宮へ御文參らせ玉ふ。例の命婦の許ゑ。

錦聞く○細流抄に見る

（源文）春宮へ入らせ玉ひまけるを。珍しき事と承るゑ。此程寺まありて。中宮春宮の御間の事。覺束ふく成り候ひまければ。靜心なく思ひながら。行法も勞めんと思ひ立ち候ひ〜日數を。破りて出てんを心ならずとて。かくは消息も申さず日頃ゑなり候ひぬ紅葉ハ獨見候ふゑ錦聞く思ひられ候へば。折よく御覽ぜさせ玉へ。

人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

などあり。實ゑいみじき枝どもなれば。中宮ハ御目留るゑ。例ゑよりて小き御文結ひ附けたり。女房ども見奉るゑ。中宮ハ御顔の色も紅く移ろひて。心の中ゑ。源氏の尚かゝる心の絶え玉はぬさいと疎ましけれ。可惜万事思ひ入れ深く物し玉ふ人の。不意くかやうなる思ひ遣りふき事を折〳〵交ぜ玉ふを。他人もさぞ怪しと見るならん。と氣に惡をず思されて。やがて紅葉を瓶ゑ挿させて。廂の柱の下ゑ押遣らせ玉ひつ。さて中宮よりハ大方の事ども。春宮の御事ゑ附きたる事などをば。源氏を打頼める樣ゑ剛直なる御返事ばかり申し玉へるを。君は然も心賢く盡せずもある事かなと恨しく見玉へど。是まで何事も中宮を後見申し馴れ玉ひまたれば。

今更まで餘所まで見んも他人は怪しとや見咎めんと思して。中宮の春宮より退出で玉ふべき日まで。源氏はやがて參り玉へり。まづ内裡の御方へ參り玉へれば。帝ハ長閑まおはします程まて。今昔の物語申し玉ふ。さて帝ハ御貌も故院まいとよく似奉り玉へと。それよりは今少し艶めかしき氣を添ひて。懐しく柔和まぞおはします。かく帝も源氏も故院まに似奉れば。故院を思し出るまゝまで。互まに憐と見合ひ申し玉ふ。かの尚侍の事ども帝は源氏の交情の尚絶えぬ様まに聞召し。また懸想の氣色ども御覽ずる折もあれど。それも今始めたる交情ならばとまかく。内裡まに參る前よりありそめまける事なれば。そのやうまに心交ハさんまに似氣なかるまじき人の遭遇なり。どぞ思し成して咎めさせ玉ハざりける。万事の御物語。學問の道の不審く思召さるゝ事ども。など問はせ玉ひて。又好色々々しき歌語なども。互まに申し交させ玉ふ序まに。帝ハかの齋宮の下向り玉ひし日の事。容貌の美しくおはせし事など語らせ玉ふ。源氏も野宮の憐なりし曙の事なども。打解けて申し出で玉ひてけり。廿日の月漸々差出て面白き程なるまに。

（帝）管絃なども爲まほしき時分かな。

と勅はす。

（源）中宮の今夜春宮まに退出で玉ふなるを。訪問まに物し候はん。

さて吾より外まは。春宮を後見奉仕る人も候はぬを。故院の御遺言もありしかば。春宮を後見する因縁にて。中宮をもかくは聞ひ申し候ふ。

と奏聞し玉ふ。

（帝）故院ハ吾ま春宮を皇子ま爲し玉へなど御遺言ありしかば。取別て懇切ま志し物すれど。今更別段ま事新しく待遇さんも何せん。とて打置きぬ。春宮ハ年齢の程よりも。手跡などさそ殊更ま賢く見ゆれ。何事ま付てもはかゞしからぬ我身の面起まこそあれ。

と勅はすれば。

麗景殿女御○朱雀帝の女御なり

白虹云々○漢書雛陽傳に昔者荊軻暴二丹之義一白虹貫レ日

（源）大方爲し玉ふ業などは。いと敏く成長びたる樣ま物し玉へど。まだいと片成に候ふ。

と春宮の御有樣など奏聞〜玉ひて。退出で玉ふま。太后の御兄の藤大納言の子の頭、辨といふが。世ま逢ひ花やかなる若人まて。更ま思ふこともふきなるべし。妹の麗景殿ノ女御(●)御方ま行くま。源氏ノ大將の先駈忍びやかま追へば頭ノ弁暫時立留りて

（頭）白虹日を貫けり。太子畏くり。

といと裕然ま打誦したるを。大將ハいと目耀しと聞き玉へど。さて咎むべき事まもあらず。太后の御氣色はいと恐〜く煩はしげまばかり聞ゆるを。

太子畏レ之とあり源氏を荊軻に春宮を太子丹によそへて志を遂くるは難かるべしとの意にいへたるなり源氏參二東宮一

九重は○太后などの威を專にして中

かゝ親しき頭、弁どもゝ。大將の事を善からず取沙汰するやうの事どもあるは。君ハ心は煩ハしゝ思されけれど。故意ゝ知らず顔はばかり待ゝ玉へり。さて君ハ東宮の方は參り玉ひて。

（源）帝の御前は伺候ひて。今まで夜を更かし候はける。

と申し玉ふ。月の花やかなるは。故院のましませし時はは。かやうの折は必御管絃など爲させ玉ひて。今めかしゝ待させ玉ひしなど思し出るは。同し内裡の内ながら。變れることゝ多くいと悲し。中宮ハ

（藤）九重は霧や隔つる雲の上の。月を遥は思ひ遣るかな。

と命婦して源氏は申し傳へしめ玉ふ。中宮の御氣容も微ふれど。懷しく聞ゆるは。源氏ハ平生の辛さも忘られて。まづ涙ぞ落る。

（源）月影ハ見し夜の秋は變らぬを。隔つる霧のつらくもあるかな。

霞も人のとか昔もかゝ候ひける事はや。

など御返事申し玉ふ。中宮は春宮を飽かず憐は思ひ申し玉ひて。万の事を申させ玉へど。春宮ハまだいと稚くおハして。深くも思し入れたらぬを。いと後目たく思ひ申し玉ふ。さて春宮ハ常ハいと早く御寢れるを。中宮の出で玉ふまでハ起きてあらんと思して。今宵ハまだ御寢らぬなるべし。春宮ハ中宮の御歸を恨めしげは思したれと。さすがはえ慕ひ申し玉はぬを。中宮ハいと憐と見奉り玉ふ。

宮の當代と隔たる意を述べたるなり月影ハ○當代と源氏との中は變らぬと間を隔つる太后などの心恨むべしと表まいひて裏には中宮の隔意平らしと含めたるなり

霞も人の○細流抄に山

櫻見に行く道を隔つれば霞も人の心なりけり

朧姫消息

源氏一

木枯の○源氏より消息なきを尋問したるなり

大将ハ頭、弁の誦一つる事を思ふ。御心の闇思ふ。世の中何となく煩はしく覺え玉ひて。かの尚侍の君ゟも音信れ玉ハで久しく成ゟけり。初時雨いづしかと景色だつゟ。如何思ひけん尚侍の方より。

（朧）　木枯の吹くまつけつゝ待ちし間ゟ。覺束なさの頃も經ゟけり。

と申し來たり。時節も憐ゟ。強ゟ忍び書きたるらん歌の意ばへも憎からねば。御使を留めさせ玉ひて。唐紙ども入れ置き玉へる御厨子開けさせ玉ひて。普通ならぬを撰り出でつゝ。筆跡なども心特別ゟ引修ひ玉へる氣色の艶なるを。御前ゟ侍ふ女房どもは。誰位の人ゟ遣り玉ふならん。と竊ゟ膝衝き合ふ。

相見ずて○世ゟ憚りて消息せず今日の時雨は即其忍びたる涙なりとの意なり

身のみ○細流抄に數ならぬ身のみ物憂くおもほえて待たるゝ迄に成にけるかなとあり此方より却て

（源文）　申し玉ひてもかひなき物懲ゟこそ。無下に心も頽れゟけれ。身のみ物憂き程に。相見ずて忍ぶる頃の涙をも。なべての秋の時雨とや見る。互に心の通ふならば。掻き暮す空のながめも。如何ゟ忘却し候ハん。

ふゞ詞も詳細ゟ成ゟけり。さて尚侍の外ゟ。平生の問絶をば尚かやうゟ申し來る類も多かるべけれど。情なからず御返答し玉ひても。御心には深く染まぬもの多かるべし。

中宮は故院の御一周忌ゟ打續きて。御八講の急きを様々心遣ひさせ玉ひけゞ。十一月の朔日頃。御國忌なるゟ。雪甚く降りたり。源氏よりは

消息を待たるゝ程になりしとの意なり心通ふ○花鳥餘情に人戀ふる心は空に通へばや雨の涙も共るしぐるゝとありなかめは詠に長雨をかけたり

桐壺院國忌御國忌○天子の御忌日なり

中宮より申し越し玉ふ。

（源）別れまし今日ハとれども見し人に。ゆき遥程を何時と頼まん。

今日ハ何方までも物悲しく思さるゝ程まて。中宮より御返事あり。

（藤）長らふる程は憂けれどゆき廻り。今日はその世まで逢ふ心地して。

別段より引繕ひてあらぬ御書様ふれど。貴き氣高きは源氏の心よりの思成なるべし。さて中宮の御手跡の。筋變り當世めかしくあらねど。他人よりは何處となく特別に書き玉へり。君ハ今日ハ故院の御國忌より。中宮の御事も思ひ消して。哀なる雪の雫に濡れつゝ行法ひ玉ふ。十二月十

別れまし○別れ申せし忌日は來れとも又何時遥ひ奉らんと表は故院追悼の歌なれと裏には中宮と再會の意をこめたりさてゆきも往に雪をかけたり長らふる○跡に存命するは憂けれと今日はさすが

餘日の程。中宮の御八講なり。甚じく尊し。日々供養せさせ玉ふ。御經より初めて。玉の軸羅の表紙。帙簀の裝飾も世まなき樣まで整頓へさせ玉へつる。さて中宮ハかやうの事ばかりならず。何事も尋常ならず清らまおはしませば。御八講の準備などは況して道理なり。佛の御莊嚴。花机の覆甍などまで眞の極樂もかくやあらんと想像らる。初の日ハ先帝の御料。次の日は母后の御爲。其次の日は故院の御料なり。さて三日目は五卷の日ふれば。上達部殿上人なども。世の慎ましさをもえ憚らで。いと數多參りたり。今日の講師ハ特別に撰拔せたれば。薪樵る程より打始め。同じく言ふ言の葉も甚じく尊し。皇子達も樣々の奉物持ち捧げて行道

に昔に逢ふ心地して悦しとなり

中宮行二八講一

御八講○佛會なり

帙簀○竹を編みて經を包むものなり

先帝母后○先帝は藤壺の御父母后なり

同しく御母なり

五巻の日○

〜玉ふ中まも。大將の御用意は。尚他まに似るものなし。さて大將の御樣子ハ常まに同〜事のやうなれども。見奉る度毎まに珍〜からんをば如何ハせん。終の日は中宮我が御事を結願まして。出家〜玉ふ由を佛まに告げさせ玉ふまに。人々皆驚きぬ。兵部卿〜宮大將殿の御心も動きて淺ましく思す。兵部卿〜宮ハ法式の中途の程まに座を立ち入り玉ひて。中宮の御發心を諫め玉ふに。中宮ハ心強く思し立つ樣を言ひて。式終る程まに。山の座主を召して受戒し玉ふべき由を言はす。母方の御伯父横川〜僧都近く參りて御髪落し奉る程まに。宮の内動揺りて忌々〜しく泣き滿ちたり。何とふき老い衰へたる人までさへ。今はと世を背く程は怪しく哀なる業

薪の行道ある日にて提婆品を講ずるなり拾遺集に法華經を吾えし事は薪こり菜つみ水くみ仕へてぞ得しとあり

中宮結願

なるを。況〜て中宮の御落飾は。豫て御氣色まも出し玉ハざりつる事なれば。兵部卿〜宮も甚ども打泣き玉ふ。參り集ひたる人々も。大方の事樣も哀まに尊ければ。皆袖濡らしてぞ歸りける。故院の皇子達は中宮の昔の御有樣思し出るまに。いと哀まに悲しくて。皆訪ひ申〜玉ふを。大將ハ跡まに立留りて申し出て玉ふべき方もなく。暮れ惑ひて悲しく思さるれど。君ばかりは何とてさやうまに一人特別まに歎き玉ふと。他人の見咎むべければ。兵部卿〜宮など出で玉ひぬる後まぞ。やがて中宮の御前まに參り玉へる。漸々人鎭まりて女房共なき鼻打かみつゝ。所々まに群れ居たり。月ハ隈なく冷え渡りて。雪の光り合ひたる庭の有樣も。昔の事思ひ遣らるゝまに。君

源氏惜二中宮落飾一

黒方○香の名なり

ハいと堪へ難く思さるれば。いとよく思し鎮めて。

（源）如何ゝ思し立たせ玉ひてか。かく俄ゝは思し成らせ玉ひしぞ。

と申し玉ふ。中宮は

（藤）今始めて思ひ立ちたる事ゝもあらぬを。世の中物騒がしき様なりつれば。心亂れぬべく思ひ決め候ふ。

など例の命婦して申させ玉ふ。御簾の内の氣容。其邊集ひたる人の衣の音なひ蕭寂ゝ振舞ひ成して。打身動ぎつゝ悲しげさの慰め難げゝ漏り聞ゆる氣色。道理ゝ甚じく悲しと君ハ聽き玉ふ。風烈しく雪さへ降吹きて。御簾の内の空燒の匂いと物深き黒方ゝ染みて。名香の煙も微

春宮奉二使中宮一

月のすむ○天堂を慕て出家し玉ふとも現世の闇に迷ひ玉ふべしとてこの世は子にかけさるにて東宮の事をいへり

なり。源氏の薫物の匂さへ薫り合ひてめでゝく。極樂思ひ遣らるゝ夜の様なり。春宮の御使も參れつゝ。春宮の曩ゝ式部がやうゝやなく言ひし様を思し出て。中宮ハ御心強さも堪へ難く。御返事も申し遣らせ玉ハねば。大將ぞ詞加へて代り申させ玉ひける。誰も〳〵此處ゝ在る限り心落附かぬ程なれば。源氏ハ心ゝ思す事ども申出で玉はず。

（源）月のすむ雲井をかけて慕ふとも。この世の闇ゝ尚やまじはん。

と思ひ玉へらるゝこそかひなく候へ。出家を思し玉へる羨ましさハ。限なく候へと。

とばかり申し玉ひて。人々近く侍へば。様々亂る心の中をさへえ申し露

大方ハ〇世の憂さにばかり出家したれと尚濁にしむとなり且濁りの引歌未詳

源氏歸二二條院一

はし玉はずいと悒鬱し。

（藤）大方の憂きまつけては厭へども。いつかこの世を背きはつべき。

且濁りつゝ

ふとあるも半は春宮の御使への心ざらひなるべし源氏ハ哀のみ尽せねば胸苦しくて退出で玉ひぬ。二條院へ歸り玉ひても。吾室ゑ獨打臥し玉ひて。御目も合ずず。世の中厭はしく思さるゝまも。春宮の御事ばかりぞまづ心苦しき。故院も母宮中宮をだゑ御後見ゑと思し掟て玉ひしを。中宮ハ世の憂きゑ堪へずして尼ゑ成り玉ひければ。元の中宮の御位まてもえおもすまゝ。さるを今已までが春宮を見捨て奉りて世を遁れなば。如

源氏進二法具於中宮一

何あらんなど思し明すこと限りなし。さて中宮も今は出家の御調度どもをこそハ御入用ならめと思せば。君ハさる物ども年の内に進呈らせんとていそがせ玉ふ。命婦も御共ゑ尼ゑなりゑければ。それへも心深く訪ひ遣し玉ふ。此等の事今委しく言ひ續けんゑ。繁雜しき樣なれば打漏せしなるべし。然るはかやうの折こそ面白き歌など出て來る樣もあれ。さるを然ることもなきを少し寂しきや。さて源氏は今は藤壺の方へ參り玉ふも。慎ましき薄らぎて。自分親しく物語ども申し玉ふ折も有りけり。あはれ最初より心ゑ思ひ染めてし戀情は。今も更ゑ御心ゑ離れねど。今は況してあるまじき事なりかし。

内宴踏歌○内宴は仁壽殿にて行はるゝ内々の節會なり踏歌は女踏歌男踏歌の二ありて正月十四五六日に行はる

中宮新營ニ佛堂ニ

源氏參ニ賀中宮ニ

宮司○中宮職の官人なり

白馬○白馬の節會として正月七日に白馬を御覽する式なり

青鈍色○下の薄鈍なると凡て出家の用ある色なり宜も○細流抄に音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべ心あるあ

年も變りぬれば。今年ハ故院の諒闇も終て。内裡邊花やかに。内宴踏歌などありと聞き玉ふも。中宮を昔を思し出で。物のみ哀まれて蕭然まる行法し玉ひつゝ。後世の事ばかりを思すまに。頼もしくも難しかりし源氏の御事は。心まに離れて思さる。平生の御念誦堂はそれとして。別段まに西南まに當りて。少し離れたる所まに建られたる御堂まに渡らせ玉ふまに。源氏ノ大將參り玉へり。年改まる効もなく。宮の内長閑まに人目稀まれて。宮司どもの親しきばかり參り來て。皆うち呻吟たれて頭痛げまに思へり。白馬ばかりぞ尚引き更へぬものまて中宮へも參らせたれば女房ども見る。昔ハ所狹く參り集ひ玉ひし公卿達も。今を三條宮の路を避けつゝ引き退て。向の

二條の大臣右大臣の邸まに往き集ふを。世の人情凡てかゝる事なれば。中宮は哀まに思さるゝまに。源氏一人を千人にも當るべき樣まて。心深くも尋ね參り玉へるを見るまに。敢なく涙催まる。大將もいと物哀ふる氣色まに。宮の内を見廻し玉ひて。頓まに物も言はず。樣變れる御住居まに。御簾の端。御几帳も青鈍色まて。その隙々より微見えたる薄鈍山梔子色の袖口など。却りて艶めかしく奥ゆかしく思ひ遣られ玉ふ。解け渡る池の薄氷。岸の柳の景色ばかりは。時節を忘れぬなど樣々まに詠め昏れ玉ひて。宜も心あること竊まに打誦し玉へる樣子。またこなく艶なり。

（源）　ながめ苅る海士の住家と見るからまに。まづ鹽たるゝ松が浦島。

また住みけりなかめ苅る○中宮の蕭然たる有様を見て涙催まる〻意なり

在しよの○物まもあらぬ堂に源氏の尋來たるを謝したる意なり

と申し玉ふよ。御堂は奥深くもあらずして。皆佛よ讓り玉へる御座所なれば。少〻氣近き心地して。

（藤）在りし世の名殘だなき浦島よ。立よる波の珍〻きかな。

と言ふも。微よ漏れ聞ゆれば。大將は忍び玉へど。涙ほろ〻〻と溢れぬ。此様を世を背きたる尼君達の御簾の中より見るらんもば〻たなければ。言寡よて出て玉ひぬ。さて御簾の中よは老いたる尼君達

（尼）さても類なく長け勝つ玉ふかな。何事も不足なく世に榮え時よ逢ひ玉ひし折は。世の中吾一人物よて。何に附けてかは世事を思し知らん。と推量られ〻を。今はいと甚く思〻鎮めて。果なき事よ付

けても。物哀なる氣色をさへ添えせ玉へるは。敢ふく御氣の毒よもある

かな

なご打泣きつ〻。大將をば賞で申す。中宮も種々思し出る事多かり。除目の比。内の中宮附の人々は。給はるべき官も得ず。大方の道理よても。中宮の御年給いそあるべきよ。其身よ取りて加階すべき年勞あるものも。中宮よ伺候するため加階をさへ爲ず。なご〻歎き申す類いと多かり。たとひ中宮の出家し玉ふとも。何時しかと昔よ變はりて。中宮の職を去り。御封などの停るべき道理もなきを。出家し玉ふよ託けて。万事朝廷よりの心向。古例よ變る事多かり。さて出家あるからは。皆豫て思ひ捨てたる覺

中宮官人歎薄過一

御年給○年官年爵とて諸國の様目などの官位を給りて其封祿を取むるなり

御封○封戸とて民戸の稅を給はるなり

中宮祈二春宮世一

悟の世なれど。中宮附の人々ども。さすがに寄所なげに悲しと思へる氣色どもを見るに附けても。中宮ハ御心動く折々あれど。たとひ我身なき物になしても。春宮の御代を平におはしまさば。さても嬉しからんとばかり思しつゝ。御行法撓みなく努させ玉ふ。さて春宮の御身に人知れず危く忌々しく思ひ申し玉ふことあれば。其罪業を我身に代へて輕め宥し玉へと佛を念じ申し玉ふ。先ず萬事を打慰め玉ふ。大將も中宮の心向をさやうに見奉りて。道理と思す。大將方の人々ども。又同樣に除目に漏れて。辛き事のみあれば。大將は世の中はしたなく思されて。内に籠りおはす。左大臣も公私の事ども。凡て引違ひたる世の有樣に物憂

左大臣上二致仕表一

仕致○職掌を君に致して老を告くるなり

二條大臣極榮華一

く思ひて。致仕の表奉るを。帝も故院の左大臣をば。やんごとなく重き御後見に思して。長き世の固めとせよ。と宣ひ置き玉ひし御遺言を思召すに。左大臣をば捨て難きものに思し玉ひて。致仕の願をばかひふき事と度々用ゐさせ玉へれど。左大臣ハ強て辭退申してぞ籠り居る。されば今ハ二條の大臣の一族ばかり。いとも返す〴〵榮え玉ふ事限りなし。天下の重しと物したる左大臣の。かく世を遁れたれば。帝も心細く思されぬ。世人も心ある限りは歎息きけり。さて左大臣の子息どもは。今までは何れともなく人柄めやすく世に用ゐられて。快げに物せしを。今は昔に變りていみじく思ひ鎭まりて。三位中將頭中將なども世の中を思ひ鎭める

様あの上なし。吾妻なるかの四ノ君をも。今尚離々に打通ひつゝ。目覺しく待遇しされば。二條ノ大臣も。中將をば心解けたる聟の中にも入れず。さて思ひ知れとまやあらん。今度の除目にも漏しされど。中將は何ともに思ひ入れず。大將殿の權威ありしさへ。今はかゝ閑散にておはするを。況して吾身の事は道理なり。と世を果かと見成して。常に大將の方へ參り通ひて。學問又は管絃をも諸與にす。二人は少き時は何事につけても物苦しきまで挑み合ひ申せしを思ひ出て。今も互に果なき事につけつゝ。尚挑み合へり。さて源氏を春秋二季の御讀經をばそれとして。臨時にも樣々尊き讀經ども爲させ玉ひなどして。又は時に逢はぬ徒に暇ありげ

源氏遣二閑詩賦一

押韻○古集に押韻するなり河海抄に上古掩韻爲レ宗連句不レ好見二家範朝臣記一とあり

源氏與二中將一開二詩會一

なる博士どもを召集めて。詩賦作り。押韻ふどやうのすさびどもを爲などして。心を遣りつゝ。出仕をもおさ〳〵爲玉はず。心に任せて打遊ておはするを。世間には讒謗そしき事ども漸々言ひ出る人もあるべし。

夏の雨長閑に降りて。徒然なる頃。中將は然るべき詩集ども數多持ちて參りたり。大將にも書室開させ玉ひて。未披かぬ御厨子どもの中より。珍しき古集の押韻に用ある部分を。少し撰り出し玉ひて。文人ども故意とえあられど。數多召し出てたり。殿上人も大學寮のも。學者どもいと多く集ひて。左右に對座に方分けさせたり。勝負の賭物どもなど。似る物もなく競み合へり。押韻もて行くまゝに。難韻の文字どもいと多くて。覺えあ

中將行二負饗一
負の饗○賭る負けて一座の人を饗應するなり
階底の薔薇○白氏文集に甕頭竹葉經レ春熟階底薔薇入レ夏開

る博士どもなども惑ふ所々を。大將は時々詞添ひて打言ふ樣。いと此上ふき御才の程なり。如何でかくも打足ひ玉ひけん。尚然るべき天才よおもして。萬事人よ勝れ玉へるなりけるを。と人々感で申す。かくて中將の方は負よけり。二日ばかりあつて。中將は負の饗を行ふ。大儀よはあらで。風流なる檜破籠ども。賭物など樣々よて。今日も例の文人ども多く召して。詩賦など作らす。階底の薔薇少しばかり咲きて。春秋の花盛りよりも蕭條よ面白き程なるよ。打解け管絃し玉ふ。中將の子の今年始めて童殿上するもの。八九歳ばかりよて。箏の笛を聲いと面白く吹きなどするを。大將も美しと見弄び玉ふ。これは四ノ君の腹ふる次郎なりけり。二

高砂○催馬樂の曲なり

それもかと○君が顏は階底の薔薇よも劣らずとなり

條ノ大臣の外孫なれば。世人の思寄も重くて。待遇特別よ侍けり。心操も角々しく。容貌も美麗しくて。管絃の少し亂れ行く程よ。高砂を出して謠ふ聲いと美し。大將は御衣脱きて纏頭け玉ふ。大將は例よつまは打亂れ玉へる御顏の風韵。他よ似るものなく美しく見ゆ。羅の直衣を着玉へるよ。透き通りたる肌つき。況して甚ドく美しく見ゆるを。年老いたる博士どもなど。座を隔て遠く見奉りて。涙落しつゝ居たり。遲はましもの。小百合葉のと謠ふ閼曲よ。中將御盃を進らす。

（中）それもかと今朝開けたる初花よ。劣らぬ君がにほひぞ見る。

大將ハ含笑みて盃を取り玉ふ。

時ならで○我顔も時失て衰へたりとなり

文王の子○史記魯世家る周公戒二伯禽一曰我文王子武王弟成王叔父

（源）時ならで今朝咲く花は夏の雨ゑ。萎れまけらしまほふ程なく。衰へまたるものを。

と打亂れて。志かとも御酒を食召さぬを。中將を啓め出でつゝ。強ひ參らす。人々の歌も多かりしならんを。かやうなる折の善くもあらぬ歌を。一々書き附くるは心なき業とか。かの貫之が誡め置きしこともありつれば。先いこれまて止めつ。さてそれも皆大將の御事を譽めくる筋まばかり。和歌も唐詩も作り續けさり。されば大將の心地にも甚く思ひ驕りて。文王の子武王の弟と。打誦しつ玉へる御名告さへ實まめでたし。かくては成王の何とか言はんとすらん。其ばかりやまた不安心ならん。帥宮も常ゑ中將

我於二天下一不レ賤とあり源氏の文王を桐壺院に武王を朱雀帝ゑ吾身を周公旦に比したるなりされと成王の叔父と言はんには中宮との密會あれで東宮に對して如何と記者の評したるなり

の方に渡り玉ひ。御管絃などゝし玉ふ。さる枝も上手まおはする宮なれば。當世めかしき御遭遇ともなり。

其頃朧月夜の尚侍は。里亭へ退出でたり。其は瘧病を久しく悩みたれば。厭法なども心安くせんとてなりけり。修法など始めて直ゑ瘧病は平癒りぬれば。誰もく嬉しと思ふゑ。例の珍しき閑暇なるをとて。竊ゑ源氏と申交して。とりなき樣まて夜々對面し玉ふ。さて尚侍はいと盛りゑ賑ゑしき氣容しなるゑ。少し打悩みて痩々まなりたる樣。いと美しげなり。太后も一所まおはする頃なれば。源氏は氣容いと恐ろしけれど。かやうの無理なることまハ。殊更ゑ御心の留る御癖なれば。いと忍び通ひ玉ひ

尚侍一

て。度重り行くまゝ。それと様子を見認る人々あるやうなれど。誰も面倒なれば。太后まハこの事を啓するものなし。大臣も此事はまた思ひ懸けぬまゝ。雨俄まおどろ〳〵しく降りて。雷甚しく鳴り騒ぐ曉まに。二條家の公達。太后の宮司など立騒ぎて。此方彼方の人目繁く。女房ども畏ぢ惑ひて。尚侍の方まに近く集ひ參るに。源氏はいとわりなく。出で玉はん方なくて。夜も明け果てぬ。御帳の周圍まも人々繁く並居たれば。源氏ハ胸潰らるゝしく思さる。中まに立ちし心知りの女房二人ばかり。心を惑はす。雷止み。雨も少し止みぬる時分まに。大臣は弘徽殿まに渡りて。まづ太后の方まに參りけるを。叢雨の間切まに。更まに知らぬ間まに大臣は輕かにふと尚

父大臣俄來
尚侍室一

中將宮亮○
共に尚侍の
兄弟なり

侍の方へ歩み入りて。御簾引揚ぐるまゝに。

（大）この雷雨まに如何まおはせしぞ。いとうたてなる夜の樣まに思ひ遣り申しながら。參り來で候ひし。中將宮亮などハ。昨夜伺候ひつゝ。ふと言ふ氣容の。舌早まに躁急けきを。源氏も物の間切にも左大臣の有樣など思ひ比べられて。この大臣の樣の。喩へやうもなくぞ含笑まれ玉ふ。尚侍ハいと詫しく思ひて。やなら居去り出るまに。面の赤みたるを。大臣ハなほ病氣の惱ましく思はるゝまやと見て。

（大）など御顏の例ならぬぞ。物怪などのまた去り難きなれば。修法の日數も延べさすべかりしを。

○神

大臣怪二尚侍一

と言ふよ。薄二藍の男帯の。尚侍の衣よ纏ハれて引き出でられたるを。大臣は見附けて奇怪と思ふに。また疊紙の手習など〜たるが。几帳の下よ落ちゝりけり。これハ如何なる物どもぞ。と大臣ハ心驚かれて。

（大）　かの疊紙は誰のぞ。氣色異なる物の様かな。これ賜へ。手よ執りて誰のぞと見候はん。

と言ふよぞ。尚侍は打見返つて。自分も始てそれを見附けたるよ。打紛らもすべき方もなければ。如何は應答へ申さん。唯茫然と〜て吾よもあらで居るを。子ながらも恥かしと思ふらん。ことばかり貴き人は思ひ憚るべきな。大臣は急なる性よて。寛めたる所なければ。遠慮もせずて疊紙を取り上ぐるまゝ。几帳の外より内を見入れたるよ。いと甚くなよびて慎〜からず副臥しゝる男もあり。源氏ハ今こそ面を物よ引隠してとかく紛はすめれ。大臣ハかくこと見て淺ましく目覺しく心疾しけれと。さすがよ直面よもいかでえ顯はされん。目も昏るゝ心地すれば。この疊紙を取収めて。寝殿の方へ渡りぬ。尚侍ハ餘の事よ死ぬべく覺ゆるよ。源氏もいと氣の毒よ。終に善くなき舉動の積りて。世人の誹謗を負はんとすること〜思せど。尚侍の心苦〜き氣色をとにかくよ慰め申〜玉ふ。大臣は思ふ事を心よ鎮められぬ性質よ。況して老の僻みとへ添ひたれば。何事をかハ遠慮らん。有の儘よ太后よ歎息き申〜玉ふ。

大臣告二源氏非行於太后一

（大臣）かく〳〵の事候ふを。この疊紙ハ大将の御手跡なり。前々も由斷〳〵て尚侍ゑ通ひ玉ひしことありしなれと。人柄ゑ万事の罪を免して。さても聟ゑも〳〵て見んと言ひ候ひ〳〵折は。大将は尚侍ゑ特ゑ心留めず。目覺しげゑ待遇されしかば。心ゑ安からず思ひ候ひしかど。それも然るべき前世の因緣ならめと思ひて。尚侍の汚されたるも。然りとも帝も思し捨つまじきを頼として。かく本意の如く宮中ゑハ參らせしながら。尚その憚ありて。女御などゝも申し候えぬをさへ。飽かず口惜〳〵と思ふゑ。またかゝる不都合の事さへ候ひければ。更ゑいと心憂く思ひ候ふ。さて男の例とハ言ひながら。大将もいと怪〳〵からぬ御心なりけり。朝顔の齋院をも。尚申し犯しつゝ。私ゑ御文を通はしふど〳〵て。怪しき氣色ある事など。人の語り候ひしを。苟も神職とあるからハ。凡て世の爲ばかりゑあらず。大将自身の爲ゑも善かるまじき事なれば。當今の有職と推尊ばれて。天下を靡かし玉へる大将ゑして。よもや然る思慮なき業ハ爲出まじと思ひて。大将の御心を疑ひ候はざりし。ふと言ふゑ。太后は是まで源氏の事を。快からず思せし御心なれば。いとゞ腹立たしき御氣色ゑて。

太后大怒二源氏一

（太后）當代の帝と申せど。初より皆人思ひ侮り申して。致仕大臣左大の二となく大切ゑ侍く一人女を。この帝の春宮ゑておはするゑは

奉らで。却て弟の源氏の臣下まて効稚きが元服の副臥まを附け添へぬ。此方まてももと此尚侍を大將まを娶せんと志して候ひしま。葵上まを先ゐ越されて。愚癡ーかりし様なりしを。誰も〳〵奇怪と思ひたりし。皆大將の方まこそ心寄せ候へば。實は本意違ふ様まて。かくても内裡へ侍ひ候ふ様なるも氣の毒まて。如何まーてか人まを劣らぬ様に待して。さばかり妬げなりし大將の見る前もあれば。女御まも成ーー申さんと思ひ候ひーま。尚侍は強ひて吾心の入る方まを靡き候ひしこそ口惜しけれ。齋院への不都合は況してさもあらん。何事まを附けても朝廷の御方まを。大將の後安からず見ゆるは。春宮の御世を思ー急ぐふらん。

さるは春宮まを心寄特別ふれば。おれも道理まを見え候ふ。と硬々ーと言ひ續くるま。大臣は一時は腹立ちーものゝ。さすがまを氣の毒まも申せしことぞ。と悔しく思ひければ。

（大臣）然はあれども。此事を外まハ漏し候ふまじ。帝にも奏せさせ玉ふな。大將まハ此の如く罪ありとも。尚侍をば思し捨て難きを頼まあまえて宥し玉はれ。さて尚侍を内々制し玉えんま。もし聽入れ候はずば。其罪まハ拙者自分當り候はん。

など申し直せど。太后は更まを御氣色も直らず。さて太后ハ。尚侍とかく一所まおはして間隙もなきま。源氏の憚る所ふと現まを入り物せらるらんは。

殊ゝ吾を輕蔑め侮辱めらるゝまでそあれ。と思しなすゝ。いとゞ甚じく心外ゝて。此序ゝ然るべき左遷の事ども搆へ出でんゝ。好き便りなりと思し廻すふるべゝ

麗景殿女御
○桐壺帝の時の女御なり

第十一帖　花散里

源氏ハ人知れぬ心からの物思ひは。何時已むならんと。かゝ大方の世まつけてさへ煩はしゝ思し亂るゝ事のみ勝れば。物心細く。世中凡て厭はしゝ思ゝ成らるゝに。さすがゝ心牽かるゝ事多かり。麗景殿ノ女御と申せしハ。御腹ゝ皇子達もおはせず。故院隱れさせ玉ひて後ハ。愈衰なる有樣なるを。唯この源氏ノ大將殿の御心ゝ持て附けられて。世を過し玉ふなるべし。女御の妹の三ノ君。花散里禁中邊ゝて源氏ゝはかなく逢ひし餘波。例の源氏の御心なれば。これをもさすがゝ忘れも果て玉ハず。されど故意とも待ゝ玉はねど。女の方より心をのみ盡ゝ果べきなも。此頃殘ることなく

源氏訪二花散里一

種々と思ひ亂るゝ世の哀の種子まハ。この三ゝ君をも憐の數ま思ひ出て玉ふま忍び難くて。五月雨の空珍しく霽れたる雲間ま。三ゝ君の方ま渡り玉ふ。何程の行粧なく打窶して。殊ま前駈なくもふく忍びて往き玉へり。中川の程おはするま。小き家の樹立など由緒ありげなるま。能く鳴る琴ね和琴ま調べて搔合せ。賑ハしく彈き鳴すなり。源氏ハ御耳とまりて。門近き所なれば少ゝ顔を差出ゝて見入れ玉へば。大なる桂樹の追風ま。賀茂祭の頃思し出られて。何となく形容面白きを。唯一度訪ひ玉ひゝ宿ふりと思ひ出で玉ふま。尋常ならず懷しく思したれど。久しく訪はで程經まければ。女の其後の樣子覺束なくて慎まゝけれど。打過ぎ難く

源氏途上訪二曾知家一

躊躇ひ玉ふ。折しも郭公鳴きて渡る。一聲訪問を催し貌なれば。御車を門前ま押返させ玉ひて。例の通り惟光を入れて音なひ玉ふ。

（源）なち返りえぞ忍ばれぬ時鳥。ほの語らひし宿の垣根ま。

と詠みて遣り玉ふ寢殿と覺しき屋の西端ま女房ども居さり。前々も互に聞き知る聲なりければ。惟光は聲作り氣色とりて御消息を申す。若やかなる樣子ども數多して。女房ども不審げま私語く樣なり。

（女）時鳥言問ふ聲ハそれなれど。あな覺束な五月雨の空。

と返歌して殊更ま何人と尋ると見えければ。惟光ハ

（惟）よゝ〳〵植ゑし垣根も

なち返り○曾て一度訪ひしに今空しく過き難くて訪ふとなり

時鳥○訪ふ聲は曾て覺あれとときるかく來た判然せずとなり

植ゑし垣根

も○細流抄に花散りし庭の梢も茂り合ひて植ゑし垣根もそそ見分かねとあり元尋ねし垣やらん此方も見分かずとの意なり

筑紫の五節の姫君○この事須磨の帖に委し

源氏先詣二女御一

と言ひて立出るを。内なる女房ども。人知れぬ心ゑ妬くも憐ゑも思ひけり。惟光ハ心ゑもし此女君。かく久しく訪をざる程ゑ主定りたらば。今打解けて物言はんハ。さも慎むべきことこそ。されば空老せしを妬きものなら。さすがゑ道理なり。かやうの際にハ。筑紫の五節の姫君ぞ寶ゑ可愛らしきかな。と先思ひ出づ。源氏ハ如何ふるものゑ附けても彼方此方と御心をかけて。年月を經つゝも御思ひと苦しげふり。尚かやうゑ一目見し邊の情は打過ー玉ハぬにより。却て數多の女の物思ひ種となるなり。さてかの本意の三ノ君の所ハ。豫て思ひ遣りし通り。人目なく寂寥ゑておもする有様を見玉ふもいと哀なり。まづ女御の方ゑて昔の御物語など申

いかゝ知りてか○細流抄に古の事かたらへば時鳥いかに知りてか鳴く聲のする橘の○昔の

ー玉ふゑ。夜ふけゑけり。廿日の月さし出るほどゑ。いとゞ樹高き蔭ども木闇ゝ見え渡りて。近き橘の薫りふつかしゝ匂ひ。女御の御容色年闌けたれど。飽まで用意ありて貴ゑ美しげなり。源氏ハ心の内ゑ。女御ハ故院の御寵愛の勝て花やかふる事ハなかりしがと。睦しく懐かしきゑハ思ーたりしものを。など思ひ出で申し玉ふゑつけても。舊時の事掻き列ね回想されて打泣き玉ふ。郭公前の垣根のゑや同じ聲ゑ打鳴く。吾を慕ひ來ゑけるよと思さるゝほども艶なり。いかゑ知りてかなど忍びやかゑ打誦ー玉ふ。

（源）橘の香をなつかしみ時鳥花散る里を尋てぞ訪ふ。

戀ひしさに尋參りしとなり橘の香をかきて昔を戀ふること古歌にあり

と詠こ玉ひて。

（又）古の忘れ難き慰めまハ先參り候ひぬ。思の紛るゝ事も。哀の數添ふことも。この上ふることそ候へ何事も當世まハ從ふものなれば。昔語り紛らすべき人少くなりゆくを。況して君まハ。いかまハ徒然をも紛るゝ事ふゝ思さるらん。

と申し玉ふまハ。いと更りさる世なれど。物をいと哀と思しつゞけたる源氏の御氣色の淺からぬも。御姿の世まハ勝れたるからにや一入哀そ添ひまける。女御ハ

人目なく○かゝる荒れた

（女）人目なく荒れたる宿ハ橘の。花こそ軒のつまとなりけれ。

る宿ハ橘こそ君の訪はるはしとなりしとなり

源氏面ニ花散里一

とばかり言へるも昔世まありけるほどハ。この女御などハ花々しきことなかりしも。今ハさすがまハ他人まハ異りけり。と源氏ハ思し比べらる。西面なる三ノ君の方まハ源氏ハ故意となく忍びやかまハ打振舞ひて窺き玉へるもその參來の珍らしきまそへて。姫君ハおれまで餘所まハ目馴れぬ御樣なれば。久しき間絶のつらさも忘れぬべし。源氏ハ何くれと例の通り懷しく語ら

ひ玉ふまハ。三ノ君ハかゝれば君まハ尚吾を思さぬまハあらざるべしと思へり。さて源氏ハ假初まハも見玉ふ限りハ。押なべて惡き女ハあらねばまやあらん。樣々まつけて言ひがひなしと思さるふハなければまや。何れも憎げふく吾も人も情を交ゝつゝ過し玉ふなりけり。それをば敢なしと思ふ人ハ。とまかくま

心の變るも道理の世の習ひと思ひ返し玉ふ。かの中川の女もさやうまてこそ心變りまたる邊なりけれ。

新編紫史卷二終